

山部会における主なWG配布資料

目 次

1. 山村再生担い手づくりについて.....	1
2. 森づくりガイドラインについて.....	67
3. 木づかいガイドラインについて.....	103

(余 白)

1. 山村再生担い手づくりについて

2015 年度 山村再生担い手づくり事例集の作成についての提案

‘15.12.21 豊田市矢作川研究所 洲崎燈子

【2015 年度の目標】

年度内に 20 件以上の活動団体（川・海の団体を含む）への聞き取りとレポート作成を行う。

【スケジュール案】

- 1) 取材先の確定（～8 月）
- 2) 取材者の募集、確定（～9 月上旬）
- 3) 取材者と取材先のマッチング（～9 月下旬）
- 4) 取材（10～12 月）

事前検討会 10 月 29 日（木）19：00～ 於・豊田市職員会館 3 階第 1 部室

中間報告会 1 月 6 日（水）19：00～ 於・豊田市職員会館 3 階第 1 部室

- 5) 調査者によるレポートの作成・提出、交通費等の請求（12 月～3 月）

*交通費等の計算・支払事務は豊田市の株式会社 M-easy 戸田友介代表が担当

【取材先候補】22 団体 ◆は川・海の活動団体、

●長野県

平谷村

飯伊森林組合平谷事務所（鈴木元氏）

根羽村

天下杉（石原明子氏）

（福祉施設での慰問活動等を長年続ける、根羽村のボランティアグループ。
村外でしか演らない、幻の演芸集団）

●岐阜県

恵那市

夕立山森林塾（佐藤大輔氏）

●愛知県

豊田市

おいでん・さんそんセンター（鈴木辰吉氏）

野外保育とよた森のようちえん 森のたまご（遊佐美絵氏）

農村舞台アートプロジェクト（かとうさとる氏）

（豊田市全域で農村舞台と伝統芸能を再生しつつ新たな活用方法を実践）

〈稲武地区〉

稲武山里体験推進協議会（どんぐり工房）（村瀬氏）

（山里の自然や農林業、食や工芸などの知恵と文化を体験を通して伝える）

〈旭地区〉

老人福祉センターぬくもりの里（下平氏）

（アートと福祉をつなげる試み）

◆有間竹林愛護会（原田茂男氏）

（河畔の竹林整備とハチクのタケノコ「夢たけのこ」の生産・加工・販売）
あさひ森の健康診断（鈴木辰吉氏）

（矢作川流域初の地域主催による森の健康診断）

あさひ薪づくり研究会（安藤征夫氏、戸田友介氏）

（地域材による薪の生産・販売・宅配、ソフト事業の「さくら村」のツリーハウスづくり等が面白い）

〈足助地区〉

あすけ聞き書き隊（河合友理氏）

（若者たちが足助の古老に聞き書きを行い6冊の聞き書き集を発行）

山里センチメンツ（安藤順氏）

（足助病院・山里暮らしをよりよいものにするためのシンクタンク）

〈下山地区〉

しもやま再来るプロジェクト（木下貴晴氏）

（間伐材でバイクラックの設置をしているグループ）

〈小原地区〉

コレカラ商店（水澤孝司氏）

（I ターンの若者らによる醤油、砂糖、塩などの基本調味料、ビールキットやオーガニックコーヒーの生豆、各種スパイスなどを販売する商店の経営）

〈旧豊田市〉

ファーストハンド（松島周平氏）

（木工家具の製作と販売、カフェ＋ショップの経営、ものづくりWSの開催）

トム・ヴィンセント氏

（地域の竹資源の有効利用に向けた各種取組）

岡崎市

◆鳥川ホテル保存会（松田直人氏）

額田木の駅プロジェクト（唐澤晋平氏）

日近太鼓（吉口照波氏）

（今年21回目を迎える、地域が一体となるイベント“日近の里 太鼓フェスティバル”の運営）

蒲郡市

◆蒲郡市漁場環境保全協議会（伊藤幸昌氏）

西尾市

◆島を美しくつくる会（鈴木きよし氏）

【取材者】

浅田益章、井上祥一郎、井上崇也、今村豊、沖章枝、蔵治光一郎、近藤朗、Siti Norbaizura Binti Md.、清水雅子、洲崎燈子、高橋伸夫、田中五月、丹羽健司、浜口美穂、松井賢子、溝口裕太、吉橋久美子、大森正昭、糸 淳、宇野利幸、石原 淳

2015年度「山村再生担い手づくり事例集」取材先×取材者

取材先	取材者
飯伊森林組合平谷事務所、天下杉、夕立山森林塾	* 近藤朗、石原 淳
野外保育とよた森のようちえん 森のたまご、農村舞台アートプロジェクト、稲武山里体験推進協議会	* 溝口裕太、蔵治光一郎、Siti Norbaizura Binti Md. Rejab、宇野利幸
おいでん・さんそんセンター、老人福祉センターぬくもりの里、有間竹林愛護会	* 松井賢子、沖章枝、大森正昭
あさひ森の健康診断、あさひ薪づくり研究会、しもやま再来るプロジェクト	* 高橋伸夫、田中五月、桑淳
あすけ聞き書き隊、山里センチメンツ	* 洲崎燈子、今村豊
コレカラ商店、ファーストハンド、トム・ヴィンセント氏	* 丹羽健司、吉橋久美子、浜口美穂
鳥川ホタル保存会、額田木の駅プロジェクト、日近太鼓	* 清水雅子、井上崇也
蒲郡市漁場環境保全協議会、島を美しくつくる会	* 浅田益章、井上祥一郎

*はチームリーダー

(余 白)

矢作川流域圏懇談会 とは…

矢作川流域は矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもとでさまざまな課題に取り組んできた歴史があります。

2009(平成21)年7月に河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取り組みが必要であることが明記されました。これを受けて国土交通省豊橋河川事務所は2010(平成22)年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取り組みを行うことで、流域圏全体の発展につなげることを目指す「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げました。

矢作川流域圏懇談会は山部会、川部会、海部会で構成され、各部会で学識者・行政・関係団体・市民団体などのメンバーが連携して地域の課題を抽出し、その解決方法を探っています。また部会間の連携によって、持続可能な流域圏のあり方を模索しています。

山村再生担い手づくり事例集 とは…

矢作川流域圏懇談会山部会は、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。解決の糸口として、矢作川流域で農業、林業、林産業、定住支援などの中山間地振興に携わる団体・個人の活動情報を共有し、生産者と消費者、農村と都市の住民、関連する団体・個人同士のネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」の作成を提案しました。2014(平成26)年度に第1集が刊行され、本冊子は第3集となります。

この事例集によって流域住民の中山間地振興に関する意識を啓発することを目指すとともに、その具体的な支援方法を示します。そしてゆくゆくは流域内全域でお金、人材、物がまわり、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が達成されることを目指します。



目 次

長野県

平谷村

- 1 飯伊森林組合平谷事務所 1

根羽村

- 2 天下杉 4

岐阜県

恵那市

- 3 夕立山森林塾 7

愛知県

豊田市

- 4 おいでん・さんそんセンター 9
- 5 野外保育とよた 森のたまご 11
- 6 農村舞台アートプロジェクト実行委員会 13
- 7 稲武山里体験推進協議会 16
- 8 老人福祉センターぬくもりの里 19
- 9 あさひ森の健康診断 21
- 10 あさひ薪づくり研究会 24
- 11 有間竹林愛護会* 26
- 12 あすけ聞き書き隊 29
- 13 山里センチメンツ 32
- 14 しもやま再来るプロジェクト 34
- 15 コレカラ商店・コレカラ農園・コレカラご飯 36
- 16 first-hand 39

岡崎市

- 17 額田木の駅プロジェクト 42
- 18 日近太鼓 44
- 19 鳥川ホタル保存会* 46
- 20 岡森フォレストーズ 49

蒲郡市

- 21 蒲郡市漁場環境保全協議会* 52

西尾市

- 22 島を美しくつくる会* 55

*川・海の活動団体

飯伊森林組合 平谷事務所

調査団体名 : 飯伊(はんい)森林組合 平谷事務所 団体代表者名 : 飯伊森林組合西部支所 鈴木 元
 設立年 : 1976(昭和51)年 対応してくれた人の名前 : 鈴木 元
 団体URL : <http://hanishinrin.or.jp/>
 活動拠点 : 長野県下伊那郡平谷村内森林 調査員 : 近藤朗、石原淳、浜口美穂
 取材日 : 2015年12月9日 レポート作成者 : 近藤朗

活動内容

飯伊森林組合は、長野県最南部の飯田市、下伊那郡を所管する森林組合で、この下伊那地域(1市3町9村)の面積は1,929km²(森林率は86%と極めて高い)。1976年に14森林組合が合併し設立されたものであるが、2006年に飯田市森林組合とも合併するなど変遷してきているものの、この地域では根羽村(根羽村森林組合)と阿南町の和合地区(和合森林組合)は合併せず、独自の組合活動を展開している。

飯伊森林組合の保有施設としては、木材流通センター、きのこ流通センター(しいたけ)、小径木加工施設を運営する他、福利厚生施設「屋神荘」があり、ここで林業講座なども展開している。なお、管内は広く5つの支所がある(2008年再編)。

- **平谷事務所(平谷村)** … 平谷村は飯伊森林組合の西部支所管轄(阿智村・平谷村、浪合村(2006年合併)と清内路村(2009年合併)は阿智村に合併している)であり、鈴木元さんは、この支所職員。平谷村は面積約77km²で、長野県で最も人口の少ない村として知られている。(2005年3月時点で589人、現在は480人程度とのこと)。村の96.7%が山林、組合では大体3,000~4,000haを管理している。
- **鈴木元さんのこと** … 平谷村生まれで平谷村育ち、就職は長野市で別な仕事をしていたが、辞めて平谷に戻ってきた時に平谷の事を良く知っているだろうと見込まれ、声をかけられ現在の仕事に従事することとなった(2001年)。西部支所において主に平谷村を担当し、阿智村にも調査に出かける。2014年には森林施業プランナーに認定される。2012年には当地の経営計画を策定した。現在38才(取材時点)。

* 今回の取材は飯伊森林組合というより、主に平谷村で森林管理に取り組む鈴木元さんという視点で行っています

キャッチフレーズ

「人づくりは村づくり」～ 矢作川の源流の森からの発信

- ・ 総合的な観光立村を目指す長野県で最も小さな村のメッセージ
- ・ 都会になる必要はない

鈴木さんのモットー(何を大切にしているか)

- 水の循環は農林水産業のサイクルと同じ
 …… 山に始まり田畑を潤し、人々の生活用水として活用され、海にそそぐ水は皆に恩恵を与えるもの。その水は皆で保全すべき。したがって、源流も地元の人間だけで守ってはいけなく、源流の人間だけでは守れない。未来の子供たちに返せるものを。

設立(入組)から現在に至るまで変化したこと

- 入組から活動・作業内容について大きな変化はないが、様々な補助金をいただき作業を実施しており、その中で間伐作業量が増えました。
- 平谷村について言えば、やはり人口の減少が大きい。私は現在平谷ではなく飯田市に住み通っている。これは子どものこと(遊び友達などの教育環境)を考えての事であり、これから人(特に子どもたち)をふやしていくこと、繋がりをつくっていくことが重要だと思います。

連携している団体・専門家・自治体など

平谷村(役場):連携しているというより、村は私たちを何かと頼りにしている関係だと思えます。例えば道の駅(R153)の山などでは、特に観光間伐を進めており、私たちに依頼が来ます(取材日当日もこの作業中でした)。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

鈴木さんの元で伐採等作業を行う造林チームは現在6名。その内3名が長野市、福島、福岡からの「ターン」です。「平谷に住みたい」という方はおり、村営住宅など利用しますが、今後ずっと定住して下さるかどうかが鍵となります。木材の搬出作業チームは、造林班とは別に阿智村の衆を中心に行っています。

「平谷村の鈴木さん」としては、消防団員であると共に、3人ほどの仲間で地歌舞伎に取り組んでいるところです。なお、お母様は、道の駅信州平谷内の「高嶺蕎麦」にて働き、五平餅の普及にも一役買っているらしいです。

現在直面している課題 ~ 今後やってみたいこと

- 組合については入組から活動・作業内容について大きな変化はないが、林業経営そのものは、人手の確保を含めとても大変な状況になっている。
- 木材価格が安すぎる。現在7,000円/m³程であるが、15,000円は必要であろう。
- 平谷の山は搬出用作業道が作りづらい地形であり、これを確保することが大きな課題である。
- 平谷の森のあり方について自分なりの考えはあるが、一方でまずは経営面を優先させなければならないジレンマがある。

【今後やってみたいこと】

これらの課題解決を何とかしたい。ジレンマの中で現在模索中です。

チームオリジナルの質問 鈴木さんの考える平谷の森のあり方と伝えたいことは何ですか

今、私たちが取り扱っている生産林の他に、森には矢作川の水源林、保全林という意義・機能も大きく、川の近くであるとか、必要な場所においては、ナラなど原木林を増やしていきたい。生産林と原木林をきちんと分けて管理体制をつくるべきだと思う。現行の補助制度の中だけでこれを進めていくことには限界があり、山は個人所有で本当にいいのだろうかとも思う。水源林、原木林というものは村にとっても必要なものであるし、下流にとっても大事なはず。そろそろ、このことを国レベルで考える時代なのではないか。森を適正に管理するための林道・作業道にしても、山をくぐらない事も重要であり、もっと公益的(公共)事業としての展開を望みたい。

取材者(近藤)からのメッセージ

今から20年ほど前、小さな息子を連れて初めてそり遊びをさせたのが平谷村のスキー場であり、頻繁に通いました。帰りには必ず道の駅信州平谷に寄り、「ひまわりの湯」に浸かっていました。我が家にとって、名古屋から平谷は最も身近な山村であり、矢作川の源流を意識させる存在でした。(当時は豊田土木事務所で矢作川など河川を担当)また、当時の平谷村は人間地上絵コンテストで優勝し、珍珍幕府と銘打った村おこしを展開するなど、非常に個性豊かな地域だというインパクトがありました。

今回の取材で懐かしさを覚えると共に、国道153号が私たち(まち)を源流(山)に誘う魅惑のルートになりえること、その可能性について思いが至りました。子どもがもう少し大きくなると浪合村(現阿智村)の治部坂高原スキー場や、ヘブンスそのはら(阿智村)へ、売木村など下伊那地域の日帰り温泉にもよく行きました。私の場合は子育てのためでしたが、この「山村再生担い手づくり事例集」調査により、矢作川源流域での数多くの地域のタカラモノが発見できました。まちにないものがここにある、人が育つために必要な何かがここにある、ということを感じさせる地域として発信したいですね。

写真



飯伊森林組合 平谷事務所 鈴木元さんと作業中の造林作業チーム(道の駅信州平谷付近)



整備されたヒノキ林と取材風景

天下杉

調査団体名 : 天下杉
 設立年 : 1992年頃(今から22~23年前)
 団体URL :
 活動拠点 : 長野県南信地域
 取材日 : 2015年 12月 18日

団体代表者名 : 以下6名全員
 対応してくれた人の名前 : 石原明子、石原久枝、浅井加恵子
 片桐淳恵、稲垣悦子、石原みちゑ
 調査員 : 近藤朗、石原淳
 レポート作成者 : 石原淳

団体名の由来

根羽村には、平成元年環境省(当時環境庁)の巨木調査により長野県下第1位(全国第6位)の巨木であることが認定された大杉(月瀬の大杉)がある。団体名は、この大杉から名づけられたものである。

所在地: 根羽村月瀬日影平
 樹高: 約40m
 幹回り: 約14m(目通り1.5m高)
 樹齢: 1,800年余り



活動のきっかけと活動内容

22~23年前、根羽村商工会の都市との交流事業の中で、根羽村大豆から「ふれ愛豆腐」が生まれ、お年寄りに配られた。その時、受け取ったお年寄りから「母親の手作りの味がした」「懐かしい子どものころの味がした」といった感謝が寄せられ、何か他に喜んでいただけることがないかと思いついたのが、演芸による慰問活動であった。主な活動対象は、老人福祉施設や身障者支援施設であり、活動内容は歌、舞踊、寸劇(シンクロ)、など多岐に及ぶ。また、活動場所は飯田市をはじめとする南信地域が主であるが、岐阜県や愛知県などの公演も行っている。

キャッチフレーズ

「幻の演芸集団(おひざ元の根羽村では活動しないため……)」

団体のモットー(何を大切にしているか)

見ていただく方々に喜んで頂けること。また、自分たちも楽しむこと。



10年前のシンクロ公演での1枚

設立から現在に至るまで変化したこと

当初は石原明子さん1名であったが、徐々に仲間が加わり、現在は6名体制で活動を行っている。活動の対象は、初め重度障害者が中心であったが、次第に老人福祉施設においても活動をするようになった。レパトリーについては、対象となる相手に合わせて時代にマッチした種目(スーダラ節、寅さん、ちゅらさん、じえじえ)も取り入れている。

連携している団体・専門家・自治体など

「ねば杉っ子餅」、「きくの会」、「活かまいかい」、「和(なごみ)」など根羽村内の多数の活動団体(これらはすべて女性のグループ)、飯田市、根羽村、売木村、喬木村、名古屋市、豊田市、恵那市、その他

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動

身体障害者、特別養護老人ホームなど福祉施設を主とした慰問活動

現在直面している課題

団体の平均年齢が75歳を超えたこと。できる限り、楽しく頑張りたい。

今後やってみたいこと

山村再生担い手事例集でご紹介いただき、オファーなどがあつた際には、お役に立てる範囲にはなりますが、頑張りたいと思っている。また、そろそろ御園座公演もありかと考えている(笑)。
なお、ご期待いただいているシンクロの演技については、冬場の公演は遠慮させていただきたい。ただ、今年はオリンピックイヤーであるため、暖かくなったら披露したいと考えている。(ただし、体型とも相談したい。前にも増して見せられない状況となっている。)冬場に見たい方は、水着をお貸しすることは可能であるため、是非団体に加わっていただきたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・特に必要性は考えてないが、出会った方々を大切に、感謝したいと思う。
- ・ありのままでよいと考えている。

チームオリジナルの質問1

<質問内容>皆さんの活動の原動力はなんですか？

<答え> 皆さんに喜んでもらうことと、自分たちも楽しむことである。



手品の種明かしを受ける取材者

チームオリジナルの質問2

<質問内容>初めからこのような勢いのある団体か？根羽の女性はみなこんなか？

<答え> この団体に無口でおとなしい人はいない。根羽の女性は皆こんなかと言えば、それは言い過ぎだが、概してパワフルな女性は多いと思う。それは、全国源流サミットの時に村の女性パワーを感じた。

その他、伝えたいこと

笑うことが健康に対して最も必要なことです。だから、「皆さん、私たちと一緒に笑いましょう！」

天下杉さんを取材して

常に団員の方々に圧倒された取材でした。しかし、決して押し売りではないため、終始楽しい時間を過ごすことができました。特に印象に残ったのは、全てが手作りという事です。音響は、数々のカセットテープをラジカセに出し入れして再生するんです。そのため、再生時に曲が途中から始まったり、途中で切れたり、「今時これ？」と思いましたが、それが懐かしくて逆に新鮮で面白さを倍増させていました。舞踊、歌、寸劇、手品・・・団員すべてが主役になるばかりでなく、慰問される側も舞台に駆り出され、皆が主役になるのです。ただの傍観者にさせないことが楽しませる秘訣と感じました。山村再生担い手づくり事例集は、地域の活動的な若者が取材先になるものという先入観がありましたが、担い手が若者である必要はないとつくづく思い知らされました。

「天下杉の皆さん、月瀬の大杉に全く引け目を感じない団体ですね。これからもこの地域の『元気』を引き出してくださいね。我々は、取材を通して元気を取り戻しました！それから、1月に実施された地域部会では、山部会のメンバーの前で披露していただきました。皆さんの演技は、都市で生活する我々に潤いを与えて下さいました。夜の懇親会でも、天下杉さんの話題で花が咲きました。これからも、矢作川流域の人々に『元気』をお分け下さい。お願いします。」

《 売木村での公演の様子と取材風景 》



司会進行と歌を披露する石原代表



飛び入り出演を依頼された皆さん



芸者姿で踊りと歌を披露する天下杉



反省会を兼ねた取材風景

《 山の地域部会での公演の様子 》



熱演する団員



飛び入り出演を果たした山部会員1



飛び入り出演を果たした山部会員2



熱演に元気をいただきました！

NPO法人夕立山森林塾

調査団体名 : NPO法人夕立山森林塾
 設立年 : 2006年1月1日
 団体URL : <http://yudachiyama.sub.jp/>
 活動拠点 : 恵那市山岡地区
 取材日 : 2015年12月9日

団体代表者名 : 佐藤大輔
 対応してくれた人の名前 : 佐藤大輔、高草武臣
 調査員 : 近藤朗、浜口美穂、石原淳
 レポート作成者 : 石原淳

活動(事業)内容

特定非営利活動として主に以下の事業を行う。

- ①自然環境の保全にかかわる教育・啓発事業
- ②自然環境の保全にかかわる広報事業
- ③森林および地域文化情報の収集・提供および調査研究提言事業
- ④森林および地域文化研修・講習会



やまおか木の駅・薪の駅

キャッチフレーズ

森・里・人が元気につながる

会のモットー(何を大切にしているか)

各種講座・活動を通じて、森づくりの大切さを訴え、森林ボランティアを育成し、素人山主に安全で科学的な山仕事の愉しさを伝えることで、地域の森林再生のみならず、山村の活性化をめざすものである。

設立から現在に至るまで変化したこと

◆設立前～設立初期(2005年～2008年)・・・森の健康診断リーダー養成・山村の人材育成が主たる活動の時期

2005年10月に第1回土岐川・庄内川源流の森の健康診断が始まり、森の健康診断リーダー養成と山村の人材育成のため夕立山森林塾が始まった。2008年までに塾生を100名輩出し、塾の幹部や関係団体の主要な役職に就くなど一定の役割を果たした。そのため、一度は団体を解散する話が出た。

◆設立中期(2008年～2013年)・・・木の駅の運営が主たる活動の時期

2009年土佐の森・救援隊を視察し、地域通貨『森券』を活用した間伐材の有効利用を標準化することが検討され、実働部隊である「杣組(そまぐみ)」とともに本団体が運営の主体を担うことになった。同年12月に恵那市中野方(後の笠周)において木の駅プロジェクトの社会実験が行われ、9戸56tの丸太が集まり、森券で地元商店街も潤うことが証明できた。その後、全国第1号となる木の駅が本格的に始動し、会のモットーである山村の活性化が図られた。2011年より、笠周木の駅は「笠周木の駅実行委員会」に委ねられ、サポート的立場に退いた。その後、山岡地区で新たな木の駅を立ち上げ、花白温泉に薪ボイラーを導入した。この頃から活動の拠点は、北部の笠周地区から南部の山岡地区に移った。

◆現在

現在は、木の駅のサポート的立場を続けながら、恵那市の委託による「市民講座(間伐講習)」「森林体験イベント」を開講・開催している。また、株式会社BESSのCSR活動や株式会社リコーの社有林「リコーえなの森」の環境保全活動の支援を行っている。恵那市と連携協定を結んだ名古屋大学に対しては、「臨床環境学」の現地コーディネーション(地元住民とのコンタクト)の支援など、地域・社会貢献の幅が広がっている。

連携している団体・専門家・自治体など

- 【官】 国土交通省、環境省、岐阜県、恵那市(素人山主の育成事業)
- 【民】 豊森なりわい塾、地域の未来・支援センター、NPO法人地域再生機構、株式会社花白温泉、NPO法人杣の杜学舎、株式会社BESS(CSRの支援)、株式会社リコー(社有林の環境保全活動の支援)
- 【学】 名古屋大学(2005年5月恵那市との連携協定を締結。森林活動を主とする現地コーディネーション)

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

- ・木の駅プロジェクトのサポート・主動(笠周地区・山岡地区) ・間伐講習の実施(恵那市からの委託)
- ・民間企業のCSR支援 ・民間企業の社有林の管理支援 ・大学との共同研究・支援

現在直面している課題

これまで、目先の課題をこなすことに追われてきた。設立10年を機会に、一度立ち止まってこれまでの活動の反省と今後の活動の着地点を見据えたい。特に、これまでの活動は、目の前の課題に対して受動的な立場をとってきたが、今後は主体的に取り組みたい(主体的に取り組む対象をみつきたい)。

今後やってみたいこと

- ・林野庁が行っている「森林・山村多面的機能発揮対策交付金」などのように、申請書類や報告など地元住民にとって作業困難な事務作業を支援したい。
- ・移住者との連携を深めたい。特に、移住を考えている人や地域の発展に危機感をもった人たちを支援したい。現在は「夕立山森林塾」であるが、いずれは「夕立山山村塾」のような、より広い範囲で活動と支援を行いたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

これまでの人脈を大切にしながら、現状に固執することなく、新たな人脈を築きたい。それには、恵那市だけでなく、長野県(根羽村ほか)や愛知県(豊田市ほか)などの流域の団体と連携することが大切だと考えている。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 連携する団体への支援活動は大変でしょうか？

<答え> 『楽しいです!』

その他、伝えたいこと

- ・山村における課題は、山村だけの問題ではありません。流域全体の問題だと思います。
- ・人のつながりがあれば、なんでもできると思います。我々は、矢作川流域圏の皆さんと連携したいと考えています。是非、よろしくお願いします。

写真



佐藤大輔さん(代表)と高草武臣さん(事務局)



間伐の実演



薪ボイラーを活用する花白温泉



取材風景

おいでん・さんそんセンター

調査団体名	: おいでん・さんそんセンター	団体代表者名	: センター長 鈴木 辰吉
設立年	: 2013(平成25)年8月	対応してくれた人の名前	: センター長 鈴木 辰吉
団体URL	: http://oiden-sanson.com/	調査員	: 松井賢子、沖章枝、大森正昭
活動拠点	: 豊田市足助町(足助支所2階)	レポート作成者	: 大森正昭
取材日	: 2015年11月16日		

活動内容

「おいでんさんそんセンター」は市の出先機関だが、ここが何かをやるという機関ではない。ここは、まちといなかの皆さんをつなぐプラットフォームとして、住民自身が社会課題を解決するために、民間同士のつながりのサポートを行っている。

たとえば、旭地区の東萩平では当センターの仲立ちにより、H26年に住友ゴム(まち)と東萩平町(いなか)とで、『いなかとまちのパートナー協定』を締結させ、郷土の森づくり活動を永続的なものにした。また、まちの小学生との[セカンドスクール]や、草刈り応援隊を始め、まちといなかをつなぐ幾つもの活動を行っている。

キャッチフレーズ

まちとむらをつなぐ“プラットフォーム”

会のモットー(何を大切にしているか)

競争ではなく、支え合って豊かになる未来の社会、賛同出来る人は誰でもどうぞ！。

設立から現在に至るまで変化したこと

オープン当初、センターとして何をやっていくかということで、プラットフォーム会議に色々な団体に集まっていたき、話し合っ、「おいでんさんそんセンターの描く未来」を創造し、課題解決に向けた専門部会を設けた。

現在、「地域スモールビジネス研究会」「移住・定住専門部会」「次世代育成部会」「食と農専門部会」「森林部会」の5つの専門部会をつくり、多くの皆さんが活動するなかで、ゼロから圧倒的ネットワークと拡がりによって百人力となっている。

以前は、いなかに働く場をつくり過疎化を食い止めようと考えていた。しかし、分かったことは、いなか暮らしがしたいからいなかにくる、来てから仕事を探す、ということ。

この5年で101世帯246人が来られたが、皆さん仕事があつてここに来たわけではない。

連携している団体・専門家・自治体など

名古屋大学、矢作川水系森林ボランティア協議会、豊田森林学校など多数。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

5つの各専門部会が中心となり、行政につきものの縦割り対応ではなく、多くの課題を一挙に解決すべく活動している。

例えば「森林部会」では、いなかで暮らしたいという、Uターン、Iターンの若者に、林業をボランティアでなく生業にすることを目標に、夏に農業、冬には林業が出来るよう「半農半林塾」を立ち上げるなどして支援している。

現在直面している課題

林業では、間伐しなければいけない森林が山ほどあるが、材価が安く、切り捨て間伐は補助金しか出ないため、収入は時給800円にも満たない。でも諦めずにやっている。

このままでは農地も山林も集落も消滅し、荒れ地になってしまう、なんとかこれを防ぎたい。今後10年で市内の4割の農地が、跡継ぎが居ないなどのために耕作放棄され荒れていく。農地が荒れれば、そこに暮らす理由がなくなり、農村は消えていく。この課題には力を入れ取り組んでいる。

設立から3年経ち、現在スタッフ7名で運営しているが手一杯である。今後どう運営していくのか、どう進化させていくのか、3年を節目に民営化を含めその方針を議論していく。

今後やってみたいこと

いなかの住民は、農家でありまた林家でもあるが、仕事の中で「農」と「林」が交わることがあまりない。一緒になってやれることがないかと相談を受けた。かつての農と林のつながり、で何かやれることがないか考えている。

また、エネルギー発電モデル集落(薪ボイラー、バイオマス発電、電気自動車など)を現実にやろうと言う話が出ているが、どこから手を付ければよいのか今、模索している。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

5つの専門部会には大学の先生を含めた大勢の専門家がおり、このネットワークにより何事か有っても誰かが助けてくれる。役所の比ではなく百人力だ。

冊子「里CO」の感想

「里CO」という本がいい：とよたで見つけた ミライの山里暮らし、田舎から日本のミライを変える座談会、とよたの田舎へ山里女子8人の話など、思わず手にとり、そして読みたくなるきれいなデザイン、すぐに購入させていただきました。(税込 ¥1,000)

その他、伝えたいこと

行政は、税金を集めその税金を使って社会問題を解決する。しかし、今後人口が減り経済が縮小すると、多くの社会資本を税金でまかなってはいけない時代が来る。

行政スタッフも減られる一方で、課題は増えていく。これを解決するには住民自身が主体になってやって貰うしかない。これらを効率的に行うためには、行政が様々な組織・団体・企業などと、住民とのつながりやサポートの場を提供するという役割になっていく必要がある。「おいでん・さんそんセンター」はそのような未来の市役所を模索している。

農山村は今、高齢化、人口減少にさらされているが、これは未来を先取りしているだけで、今後30年もすると日本中が今の農山村と同じ状態になる。今、いなかがダメだと諦めると、30年後の日本を諦めるということ。へこたれてはダメ。

いなかだから住みたいという人達が居る、いなかをよりいなからしくすれば、いなかはもちこたえられる。都市の病んでいる部分を助けつつ、都市の人達にいなかの課題解決を手伝ってもらう、そのための機関としてさんそんセンターが間に入る。

写真



市役所時代よりも元気そうな
センター長の鈴木辰吉さん

[暮らしの糸をつなごう]
手作りの立体看板



冊子「里CO」とよたの
田舎へ、山里女子
8人の話

「おいでんさんそ
んセンター」
のパンフレット



野外保育とよた 森のたまご

調査団体名 : 野外保育とよた 森のたまご
 設立年 : 2010年
 団体URL : <http://blog.goo.ne.jp/morinotamago2010>
 活動拠点 : 豊田市の里山
 取材日 : 2015年12月15日

団体代表者名 : 遊佐美絵
 対応してくれた人の名前 : 遊佐美絵
 調査員 : 桑淳、溝口裕太、Siti Norbaizura Binti Md. Rejab
 レポート作成者 : Siti Norbaizura Binti Md Rejab

活動内容

森の中で一日を過ごす「森のようちえん」。2010年に設立され、現在3人のコアスタッフと週1回の親当番の協力で運営している野外のようちえんです。17人の3・4・5歳の幼児と4人の大人が毎日自然の中で自由に遊んだり、探検したりして、体を動かしながらさまざまなことを身につけます。木曜日と金曜日には同じ場所で活動を行います。それ以外の日には豊田市のいろいろなところで現地集合、現地解散という形のようちえんです。人数の少ないようちえんでみんな家族のように関わり畑で野菜を育てたり、川の生き物と触れ合ったり、餅つきやおまつり等の行事を行い、天気や季節に合わせて活動を計画します。晴れの日でも雨の日でも外で経験を通じて学んでいます。

キャッチフレーズ

ちいさなようちえん おおきなかぞく

会のモットー(何を大切にしているか)

自然の中で出会う一つ一つの体験が、満足感や達成感、迷い・悔しさに繋がる。

色んな想いを育てるために、また子ども同士の遊びや、ケンカの間わりの中で育つものを大切に、大人は答えを持たず、ただ子どもと子どもをツナグ役割をします。

大人の指示を持つ子ではなく、自分から考え行動する子になって欲しいと願っています。

小さな森のたまごだから、大人も子どももぶつかり合い育ち合う。

そして自分らしく生きる。一人一人が大切な家族。

設立から現在に至るまで変化したこと

子どもだけでなく大人も一緒に成長します。(例えば:野菜を育てるためにママたちが自分でいろいろと勉強し、年上の方からも学んで実行します。失敗しても勉強の過程として受けること。)

連携している団体・専門家・自治体など

森のようちえん てんとうむし、豊田市 とよた市民活動センター、森のようちえん全国ネットワーク

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

山村再生には直接つながっていませんが、森のたまごに通っている子どもたちは、時間はかかるけれど大きくなったときに、今自然の中で身につけたこと・経験したことを、大人になっても体のどこかで覚えていて生かすことができます。

現在直面している課題

- ・活動場所・建物がないこと
- ・行政からの援助・サポートが限られていること
- ・周りの認知度の低いこと

今後やってみたいこと

豊田市内にもっと森のようちえんを増やしたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

愛知県の森のようちえんのネットワーク。

チームオリジナルの質問

<質問内容>子どもたちが小学校に入学したら、教室内で授業を受けることに対しては抵抗ありませんか？

<答え>野外で自由に遊べた森のようちえんとちがって、学校に入学したら座って授業を受けることがはじめての経験となるので、その新鮮さを楽しんでほしい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>子どもたちが外で遊んだりするのに不審者などの心配は？

<答え>ありますが、情報発信のときに場所の特定や子どもの個人情報・顔などを特に気を付けます。

写真



いつも自由に元気に動いて、自分がやりたいことを自分で決めて行動してる子どもたち。

農村舞台アートプロジェクト実行委員会

調査団体名 : 農村舞台アートプロジェクト実行委員会 団体代表者名 : 伊丹靖夫、かとうさとる
 設立年 : 2010年 対応してくれた人の名前 : かとうさとる
 団体URL : <http://www.cul-toyota.com/>
 活動拠点 : 豊田市内農村舞台 (公財)豊田市文化振興財団文化部 調査員 : 桑淳、Siti Norbaizura Binti Md. Rejab、溝口裕太
 愛知県豊田市小坂町12-100 レポート作成者 : Siti Norbaizura Binti Md. Rejab
 取材日 : 2015年12月15日

活動内容

農村舞台アートプロジェクトは、豊田市内に点在する農村舞台群を地域の文化資源として活用し、伝統と創造をテーマに市民文化の創生を目指す市民プロジェクトとして発足しました。豊田市内に点在する農村舞台の活用を図るために、アートプロジェクト(個展形式の作品展)やライブプロジェクト(劇場形式のダンスやジャズなどのライブ公演)の開催や、農村舞台に関係する伝統文化の創造的な再生に向けた取り組みとして、小田木人形座の再生やアート・イン・レジデンスの試行など地域との協働を進めています。

キャッチフレーズ

農村舞台の保存と活用

会のモットー(何を大切にしているか)

<農村舞台の活用>

農村舞台は保存されたが、この舞台が人々から見向きもされなくなったということではいけません。地元の人が楽しくワイワイと使える場、たくさんの人が訪れる活気のある場となるよう目指しています。

<地域資源の活用>

各地域の財産である舞台を活用して開催されるアートやライブには、可能な限り地元で縁のあるアーティストを選んでいきます。地域の空気感を大切に、地域と溶け込めるアーティストが、地域を盛り上げることに長けていると考えています。

<伝統的な舞台と、新しいアートの融合>

伝統的な舞台で伝統的な歌舞伎や人形浄瑠璃を上演するだけでなく、新しいアートとコラボレーションすることも大切です。これまでに、コンテンポラリーダンスやオペラ、バレエなど、農村舞台とは相容れないと思われるアートとの融合を図り成功を収めることで、新しい価値を創造しています。

設立から現在に至るまで変化したこと

2010年に実行委員会が発立されて以降、豊田市内の農村舞台の調査を実施し「豊田市の農村舞台絵地図」に全84舞台の全容をまとめるなど、現状の把握を進めてきました。これに加えて、舞台を活用した作品の展示や、歌舞伎、ジャズのライブ上演など、軌道に乗っているプロジェクトが複数あります。また、伝統の創造的再生として小田木人形座の再生に取り組むなど、更なる舞台の活用方法についても模索しています。

連携している団体・専門家・自治体など

農村舞台を保有する各自治体、アーティスト、(公財)豊田市文化振興財団、NPO法人豊田加茂菜の花プロジェクト、小田木人形座準備会

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

豊田市内の中間山地に現存する使われなくなってしまった農村舞台の実情の調査や、調査結果を農村舞台絵地図にまとめるなど情報の集積を図っています。また、農村舞台を保存するだけでなく、これらの活用を目指した作品展示や、歌舞伎、人形浄瑠璃、オペラ「蝶々夫人ファンタジー」、ジャズライブの上演などを企画運営することで、市内に点在する84棟の農村舞台に対して、アートという側面から新たな価値の創造を目指しています。

これらの活動は、地域住民が農村舞台の価値を再発見する契機となったり、地域の伝統文化を再生する動きに繋がるなど広がりを見せています。

現在直面している課題

<更なる農村舞台の活用>

市内に84ある農村舞台は、これほど多くの農村舞台があるとインパクトを与える数字である反面、全てを平等に活用することが困難であることも事実です。したがって、取り組みが進んでいる舞台がある一方で、活用が進まない舞台もあることから、全体の底上げを図っていく必要があります。しかしながら、少子高齢化が深刻な集落では個々人の農地を守るにも苦勞している現状があるなど、抱えている問題は農村舞台を有する自治区毎に千差万別です。その為、画一的な対策では、全ての農村舞台の活用を図ることは困難であり、各々の実態に即した対応策を丁寧に考える必要があります。

<プロジェクトの発展的継続>

様々なアート及びライブプロジェクトが企画運営されていますが、これまでの取り組みを継続しつつ、新しい企画を創り出さなければプロジェクトに新鮮味がなくなり、多くの人を魅了するプロジェクトを継続することが困難となる恐れがあります。今後も、地域の資源を大切にしつつ、ネットワークの充実を図ることで、新しいアートを創造していきたいと考えています。

今後やってみたいこと

実行委員会における、これまでの取り組みや反省点を網羅した「農村舞台アートプロジェクト白書」の作成や、アート及びライブプロジェクトの更なる充実、舞台に関わる伝統的な文化の再生、農村舞台群の市民利用の促進などに取り組みたいと考えています。

また、地元の農村舞台をネットワーク化するために連絡協議会の設立や、全国各地の農村舞台との交流を進めることで、農村舞台群として日本遺産への登録を目指すなど、多くの可能性を模索しています。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

様々な団体の様々な取り組みについての情報が蓄積される必要があり、各主体において積極的に進められている状況であると思います。これに加えて、複雑な情報をまとめてコーディネートできるような人材が必要だと考えています。

チームオリジナルの質問

<質問内容>農村舞台とはどういったものですか？

<答え>江戸時代後期から明治時代にかけて、年1度の余興を楽しむため各集落の神社境内に建てられたものです。この農村舞台は、農山村や漁村にある営業用ではない舞台の総称で、秋田から宮崎まで広く分布していますが、飛騨・東濃地域、南信地域、奥三河・豊田市東部/北部一帯には全国の約3分の1の舞台が集中しています。娯楽の乏しかった農山村では、舞台で開催される氏子の祭礼や奉納される地芝居、人形芝居は華やかな年中行事となっていたことが想像できます。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 農村舞台にはどのような装置がありますか？

<答え> 舞台によって大きく異なりますが、廻り舞台（床を回転させて芝居の場面を転換させる）、せり（役者を舞台上げたり、下げたりする）、太夫座（三味線を弾いたり語りをする場所）、下座（芝居に合わせて囃子を演奏する場所）、バッテリー（舞台を広くする装置）など、歌舞伎などを上演するために必要な装置が整えられている舞台があります。しかしながら、市内にある農村舞台の全てに十分な装置があるのではなく、建築当時の各々の地域の実情が反映された、個性的な農村舞台がそれぞれの地域に残っています。

その他、伝えたいこと

プロジェクトの実現には、行政などの支援は欠かせません。しかしながら、様々な主体の支援を受けることを前提とするのではなく、自治区のみなさんや、アーティストのみなさんと一緒になって、プロジェクトを成功させる為にやれることは何か考えることが大切であり、お互いのコミュニケーションから素晴らしい解決策が見出せると信じています。

写真



深見農村舞台



取材の様子(かとうさとる氏)



農村舞台の構造(提供:かとうさとる氏)

稲武山里体験推進協議会

調査団体名	: 稲武山里体験推進協議会	団体代表者名	: 大内政春
設立年	: 2005年	対応してくれた人の名前	: 村瀬登美
団体URL	: http://inabu-kankou.com/don_howto.html		
活動拠点	: 愛知県豊田市武節町針原15番地	調査員	: 宇野利幸、Siti Norbaizura Binti Md. Rejab、溝口裕太
取材日	: 2015年11月16日	レポート作成者	: 溝口裕太

活動内容

稲武山里体験推進協議会は豊田市稲武どんぐり工房を拠点に、こだわりを持つ地域のインストラクターと稲武を訪れる人々との出会いの場を体験プログラムを通じて提供している。ここには、自然体験(面ノ木原生林ハイキング、川遊び)、農業体験(いも掘り、米作り)、工芸体験(竹細工、木端細工、ストラップ作り)、味覚体験(五平餅作り、そば打ち、こんにやく作り)など様々な体験が準備されており、訪れるグループ、団体、家族の希望に応じてコーディネートすることでニーズに沿った体験プログラムを提案している。

キャッチフレーズ

稲武を訪れた人と地域の人との出会いをコーディネート

会のモットー(何を大切にしているか)

稲武を訪れた人に、稲武の風を感じてもらうことを大切にしている。そして、訪れる人のニーズに合ったプログラムを準備すると共に、工夫とこだわりを持つインストラクターとの出会いの場を設けることで、訪れた人と地域の人がお互いに素敵な時間を過ごせるお手伝いをする。

設立から現在に至るまで変化したこと

設立当初は他では出来ない本格的な体験(炭焼き)や、小中高校生を対象とした教育旅行を念頭にプログラムが開発された。こういったプログラムは、モニターツアーが開催されるなど旅行会社の関心を引くことはできたものの定着には至らなかった。そこで、道の駅(どんぐりの里いなぶ)に立ち寄った方が数時間で体験することが出来る体験を増やすなどプログラムの大幅な見直しと、訪れる団体や家族のニーズに沿った体験をコーディネートするようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田市(稲武どんぐり工房を所有)、いなぶ観光協会(稲武どんぐり工房を管理)

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

稲武地域の里山資源の掘り起こしと、山村再生に欠かすことができない都市部の人々にこの地域を好きになってもらうことが活動の中心である。普段から各家庭で作られている五平餅やこんにやく作りを訪れた人に体験してもらうことが、稲武地域の人や農産物の掘り起こしに繋がっている。大切なのは、稲武には大切な里山の資源が豊富に眠っているということ、地域の人が自覚することである。また、体験プログラムを通じて稲武の風に触れた人々の中から、稲武に移り住んでくれる人や、頻りに遊びに来てくれる人が増えることが、山村再生に不可欠だと考えている。

現在直面している課題

今後も体験プログラムを維持し、拡大するために地域のインストラクターやかかわる人を増やさないといけない。また、インストラクターやかかわる人を増やすことが、この体験プログラムの認知度を高め、訪れる人を増やす結果に結びつくと考えている。

今後やってみたいこと

比較的短時間で体験できるプログラムのニーズが高まっていることから、新しい体験プログラムを開発し充実を図りたい。いまのところ、道の駅(どんぐりの里いなぶ)を訪れた人が、簡単に稲武の味覚や工芸に触れ合う機会が十分でないことやリピーターを増やすために、短時間かつ少人数(家族連れ)で体験できる石窯料理(ピザ作りや道の駅で購入した食材を調理して食べるなど)の企画を考えている。こういった取り組みが稲武の滞留人口を増やすことに繋がると考えている。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

今後も地域を訪れる人を維持し増やしていくには、魅力的な体験を準備することが不可欠である。その為のアイデアは地域の中に眠っており、地域文化の発掘が大切となる。しかしながら、地域の魅力的な文化は地域住民が気づかないことも多く、地域外在住の人や高校生・大学生との交流の中から発見することも多い。したがって、稲武を訪れる人と地域住民との交流をいっそう加速させたい。

主体的に情報を発信し、人を呼び込む方法として旅行業への登録が考えられる。今後は、いなぶ観光協会といっそう協力することで、こういったアプローチの仕方も検討していきたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>どんぐり工房へ訪れる人の地域や、年齢層はどのくらいですか？

<答え>豊田市域の人が最も多く、名古屋市、浜松市という大まかな構成になっている。数年前は、祖父母と孫という組み合わせが多かったが、最近は近隣のキャンプ場などへのアクセスの途中で、工房へ寄ってくれる家族連れが増えている。また、トヨタ生協の会員や子ども会などの親子連れが1回に100名程度参加される体験プログラムも年2~5回ほど開催している。

チームオリジナルの質問

<質問内容>人気な体験プログラムや、リピーターが多いものにはどういったものがありますか？

<答え>人気がある体験プログラムのひとつとして名倉川や根羽川での川遊びがある。当初は子供たちの安全管理面で非常に神経を使ったが、現在では安全面やプログラムの進め方などを勉強し軌道にのってきた。子供たちは箱めがねやタモを持って、時の経つのを忘れて楽しんでいる。また、リピーターが多い体験にはピザ作り体験がある。本格石窯を使いロケーションのよい開放的な空間で粉から自分で作って食べるので、とても人気なプログラムとなっている。

その他、伝えたいこと

最近では、稲武の子供たちも自然から遠ざかっている。安全面から下校時は寄り道することなく自宅へ帰る。家に帰ると都市の子供たちと同じように黙々とゲームをしていると聞く。子供たちが自然とふれあうことから遠ざかってしまった。この体験プログラムは、稲武を訪れた人にとっては貴重な経験になるかも知れないが、自然と遠ざかってしまった住民が、子供も大人も地域の自然と文化を思い起こす大切な機会になると思う。

また、自然は人間の思い通りにならない。それは、畑に実っているとうもろこしの収穫体験でも同様である。旅行パンフレットには開催日や、もらえるとうもろこしの本数が記載されているかも知れないが、天候によって期待通りにならないこともある。もちろん、訪れる人の期待に即した体験プログラムになるように最大限の努力は惜しまないが、すべてが人間の思い通りになるわけでないことを知って貰うことも自然体験プログラムの醍醐味かもしれない。

まずは稲武の風を感じて欲しい。時間に余裕があれば稲武の文化を体験プログラムから知って貰いたい。そして、稲武を好きになってくれた人が、頻繁にこの地域を訪れてくれると嬉しいし、この中から稲武へ移り住んでくれる人が現れるのもっと嬉しい。

写真



豊田市稲武どんぐり工房
(明治12年の民家を移築)



取材の様子(村瀬登美さん)



どんぐり工房の内部



木端細工の見本

老人福祉センターぬくもりの里

調査団体名	老人福祉センターぬくもりの里	団体代表者名	永井晴彦(豊田市社会福祉協議会旭支所長)
設立年	2000年4月1日	対応してくれた人の名前	永井晴彦、下平枝里奈
団体URL			
活動拠点	豊田市旭地区	調査員	沖章枝、大森正昭、松井賢子
取材日	2015年12月5日	レポート作成者	松井賢子

活動内容

旧東加茂郡旭町が、平成12年に「旭町福祉センターぬくもりの里」を開館。旭町社会福祉協議会が管理、運営の委託を受ける。それにともないデイサービス事業を開始。また、平成17年度の市町村合併に伴い豊田市となり、「豊田市老人福祉センターぬくもりの里」と名称が変更される。平成21年度に「地域包括支援センター」が設置。

開館当初より「ぬくもり祭」を実施し、毎年旭地区のボランティア団体による出演・出店等の催しがある。また、平成23年度より「地域に開かれたぬくもりの里」を目指して、名古屋造形大学と提携し、「ぬくもりの里・やさしい美術作戦事業」を実施。廊下には利用者方の共同で制作した作品や、浴室にはモザイクタイルが展示されており、来館者の目を楽しませてくれる。さらに、地域の児童、生徒の福祉学習の場ともなっている。

平成26年度に開館15周年を記念し、マスコットキャラクター「ぬっくん」が誕生した。「ぬっくん」は、地元住民の多数の応募作品より選ばれた母子の共同作品であり、チャームポイントのつぶらな黒い瞳で、みんなに元気を与えている。

キャッチフレーズ

笑顔と支えあいのまち・ぬくとい旭（「地域に開かれたぬくもりの里～老いをオープンに～」）

会のモットー(何を大切にしているか)

「ぬくとい旭」を目指した地域づくり、また「豊田市老人福祉センターぬくもりの里」を地域に開かれた施設にしていくことに重きを置いている。また、ぬくもりの里デイサービスセンターの利用者方が有意義な一日を過ごすことのできる施設を目指している。

「ぬくもりの里・やさしい美術作戦事業」を展開していく中で、利用者の方たちが協力して美術作品を制作していく過程が職員と利用者、利用者同士のコミュニケーションとなっている。さらに、出来上がった喜びや自己肯定感を養い、利用者の能動的な取組みと笑顔につながっている。

設立から現在に至るまで変化したこと

当初は介護施設というイメージが強かったが、利用者、各世代の地域住民が参加する「ぬくもりの里・やさしい美術作戦」の取り組みにより、少しずつ当時のイメージを払拭し、地域の福祉拠点施設として認知されつつある。また、この事業を通して、関係機関との連携が密になってきている。

なお、平成27年度から、豊田市地域福祉活動計画に基づいて、地域福祉活動の推進に取り組んでいる。福祉特派員制度を創設し、地域住民と顔の見える関係づくり、さらには地域に親しまれる福祉施設となるように努めている。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田市・交流館・名古屋造形大学・中京大学・地元の小中学校・こども園・地域のボランティア団体等

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

唯一の旭地区福祉拠点施設のスタッフが、より質の高いサービスが提供できるように研鑽し、魅力ある施設となるように取り組んでいる。

現在直面している課題

人材不足・・・介護職員やボランティア等の福祉の担い手の不足。
社会資源不足・・・福祉施設や医療機関が限られている。
公共交通の整備が必要となっている。

今後やってみたいこと

- ①「笑顔とささえあいのまち、ぬくとい旭」を目指して、地域住民との協働による福祉のまちづくり。
- ②豊田市地域福祉活動計画しゃべりカフェぬくもりの充実を図り、地域住民の交流と憩いの場づくり。
- ③旭地区高齢者の生きがいとなっている農業の取り組みの充実。農業を通しての都市住民との交流の場づくり。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ①福祉に関するニーズの把握。地域住民との顔の見える関係づくりを行い、地域福祉に関心のある人材の発掘。
- ②地域住民への周知。
- ③旭地区の取り組み状況と都市住民のニーズの把握とマッチング。関係機関との連携。

チームオリジナルの質問

- <質問内容> あさひめくりの制作について。
<答え> 「ぬくもりの里・やさしい美術作戦事業」に関わったスタッフが有志によるチームを立ち上げて検討している取り組みである。ぬくもりの里としては、支援、応援していく。
あさひめくりとは、旭地区の伝統行事・ことわざ・郷土料理・ならわし等の後世に残したいことを日めくりにまとめる予定である。

チームオリジナルの質問

- <質問内容> ぬくといという言葉の意味は。
<答え> あたたかい。

写真



右から二人目が支所長の永井さん、その左が下平さん



おしゃべりカフェ
ぬくもり



皆さん楽しそうに過ごされていました



モザイク
タイル

あさひ森の健康診断

調査団体名	: あさひ森の健康診断	団体代表者名	: 藤谷常壽
設立年	: 2015 年	対応してくれた人の名前	: 鈴木辰吉
団体URL	: -		
活動拠点	: 豊田市旭地区	調査員	: 高橋 伸夫、田中 五月
取材日	: 2015 年 11月 12日	レポート作成者	: 田中五月

活動内容

豊田市旭地区で地域住民主体の森の健康診断を行う。矢作川森の健康診断をステップアップしたものとして取り組み、三つの特徴がある。

1、子ども達を含む地域住民主体の取り組み。2、調査密度が濃く、精度が高い。3、人工林だけでなく、天然林の調査も実施する。

調査は2015年より3年継続して実施し、80地点の人工林、9地点の天然林の調査を実施する。

キャッチフレーズ

森から始める持続可能な地域づくり

会のモットー(何を大切にしているか)

最終的な目標は地域コミュニティを残し、未来に引き継いでいくこと。それを考える切り口として農業や旭では面積的に非常に大きい森などがある。

森の健康診断でも「何とかしていくんだ!」というメッセージをこめて活動していく。

設立から現在に至るまで変化したこと

「やれる」という自信がついた。

実は第1回目の参加者募集では非常に苦労した。本番三週間前にも申し込みが都市の方を中心に30余名という状況で、一瞬「無理かな?」と感ずることもあった。しかし、その後の奮闘で約100人の参加があり、終了後には地元の方から「周りにも広げていく」という良い感触の感想を聞くことが出来た。

連携している団体・専門家・自治体など

矢作川森の健康診断実行委員会、豊田市、森林組合、旭木の駅プロジェクト、あさひ薪づくり研究会。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

活動は森の健康診断だが、それを子どもを中心とした地域住民で実施していく。

今年も子どもが参加できるようにと夏休みの後半に日程を設定したが、後から後から行事が重なり子どもは一人の参加にとどまった。しかし、来年は更に綿密に調査を行い、なんとか子どもを巻き込んでいきたい。

現在直面している課題

想像以上に森の健康診断の意義が地域に理解されていないので、この理解を広めていかなければならない。また、中心人物が皆とても忙しい。一人何役もこなしている状況のため、会議にもなかなか全員が参加することが出来ない。

今後やってみたいこと

森の健康診断の結果を、実際の森づくりに活かしたい。100年後、森をどうすべきかというランドデザインを行いたい。このために天然林の調査も行う。今は伐採した木を搬出出来ないような所まで人工林になってしまっている。これを針広混合林にしていく。一度人工林となってしまった森を戻すことが並大抵のことでないことは有識者の意見でもわかっているが、森林をどうしていくかは、旭にとって地域づくりをどうしていくかと同じ意味を持つ重要課題。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

森づくりに関する専門知識が必要。

しかし、森づくりに関しては、矢作川森の健康診断メンバーが協力してくれるはずで、これ以上ないというくらいのメンバーのため、専門知識についてはあまり心配はしていない。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

なぜ天然林の調査まで活動を広げているのですか？

<答え>

現状、木材を出せないところまで人工林を広げてしまっている。「ここは天然林のままがいい」という場所がある。森の未来ランドデザインを実行する上で、針広混交林を作るための調査材料となる。

その他、伝えたいこと

森の健康診断を行う背景のお話がとても印象的でした(田中)。
以下は鈴木さんの談です。

--

元々の想いは地域のコミュニティを何とかしたいということ。
私達の世代が子どもの頃には美しい田んぼや畑、手入れのされた山林があった。
のどかさや豊かさが感じられる美しい里山の風景があった。

しかし、高度経済成長期、みな豊田市の工場にマイクロバスで通うことが当たり前の生活となった。
豊田市に近いという立地、時代背景などがあったのだが、今見渡すとかつてあった田んぼや畑、美しい山林は荒れてしまっている。

このような状況の中で、今このあたりはムードが二極化している。

- ・どうにもならんぞ、なるようにしかならんだろうと日々を暮らす
- ・何とかしようと動き始める

後者、何とかしようと動き始めると切り口として、農業や森、農村文化といったことを選んでいる。
旭では土地利用の81%が森林である。多くの面積をもつ森に関心がありながらも、打つ手を模索していた時に矢作川森の健康診断から声がかかって取り組むことになった。

森の健康診断も最終的な目標は、地域を何とかする、という目標に向かっている。

森を切り口にして、皆の意識をあげていき起爆剤としたい。
森の未来ランドデザインは非常に難しいはずだが、やることで大きな活路になる。

--

写真



←取材風景



↓当日説明風景



←集合写真



←子どもも調査



↑来年はもっと子どもが増えるはず！

あさひ薪づくり研究会

調査団体名 : あさひ薪づくり研究会
 設立年 : 2014(平成26)年2月
 団体URL :
 活動拠点 : 豊田市東萩平町
 取材日 : 2015年12月5日

団体代表者名 : 安藤征夫
 対応してくれた人の名前 : 安藤征夫
 調査員 : 高橋伸夫、大森正昭
 レポート作成者 : 大森正昭

活動内容

あさひ薪づくり研究会は、旭木の駅プロジェクトによる間伐材の販売方法では採算が合わないため、もう少し付加価値の高いものをつくろうと、旭木の駅プロジェクトの中の10人でつくった。

旭木の駅プロジェクトは現在チップ販売だけで、市の補助があるものの採算的に苦しい状況となっている。このため、あさひ薪づくり研究会で間伐材を薪にして儲け補填している。平成27年からはストーブ販売も行っている。

薪の材は、旭木の駅プロジェクトから購入するものと、直接購入との2種類があり、自分達も忙しいため、直接購入する分については、玉切り済みならより高価に買い取る仕組みもつくった。

これらがあさひ薪づくり研究会のハード事業。

あさひ薪づくり研究会のソフト事業として、平成26年8月17日からツリーハウスづくりを一般公募し、30家族108名の親子と一緒にツリーハウスや遊具をつくりながら毎月2回の活動を行っている。

この活動は、小さい頃から森に親しむことにより、実体験として空気や水を育む森の大切さを分かってもらい、この子達が大人になった時、森の大切さや山の管理の大切さを理解出来るようにしている。

キャッチフレーズ

やる気があれば何とかなる。

会のモットー(何を大切にしているか)

山を自分自身が体感する。次世代のために森を維持する。

設立から現在に至るまで変化したこと

計画したことがスピード感を持って着実に進んでいる。例えば、平成26年の2月に会を設立しその年の9月から薪が売れ、百二十万の売り上げがあった。

販売先は、田舎では売れないので知立、岡崎、安城、春日井など都会への販売である。

ツリーハウスは、平成26年の8月に始め、既にハウスや園地・遊具も出来つつあり、順調に進んでいる。

また、子ども達の家族を対象にしたツリークライミングも年2回行っている。

連携している団体・専門家・自治体など

愛知学泉大が、平成28年からまちづくり活動の授業として、この地域の課題を一緒に解決していくことを単位として認め、1年生から3年生までの3年間かけて学習する仕組みをつくろうとしている。そのほかに名城大学、愛知産業大学や木の駅プロジェクトなど。「山村再生担い手づくり事例集」に載っている団体のほとんどみんな関係している。

また、ツリーハウスを造っている先生は、建築家の安井さん及びサツキとメイの家をつくった棟梁の中村さんで、月に一回来て頂いている。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

薪づくりは、間伐の推進を目的にしているため、針葉樹を優先している。従って8割が針葉樹で、広葉樹のみの薪が欲しいと言われる方には基本的には提供していない。

私は空き家を解消する活動をしており、今までに15軒50人ぐらいの世話をした。平成27年もこの近所の空き家を5月と7月にうめ、10月にも面接をし、22戸の集落で3軒の世話をした。

今、この自治体の定住促進部長として、こうした交渉の出来る人材を来年の4月までに10人は育てようと、毎月交渉術や空き家に関する法律などの勉強会を行っている。

現在直面している課題

「あさひ薪づくり研究会」から、研究会の文字をとって自立団体とすること。

今後やってみたいこと

荒れ農地の解消では、農地を農地として貸そうと思うと面積が広く、都会から来た人は機械がないと耕作出来ない。そこで荒れ農地を薪置き場として貸すことで、家族とともにここに来て木に親しみつつ山での遊びも出来、薪づくりを行えるように考えた。現在は畑2枚を薪置き場として無償で貸している。地主さんからは管理してもらえれば草刈りもせずにはすむと了解していただいている。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

日々アンテナを高くし、たくさんの情報を収集したい。どんな情報でも良い、何かの役に立つ。例えば後進地の視察でも、やってはいけなことが分かり勉強になる。また、多くの人と話すこと、それも自分の地域外の人と話すことで多くの情報が得られる。

チームオリジナルの質問

<質問内容>色々な取組をされていますね。

<答え>次の世代の森に係わる人を育成したい。

平成27年4月から始めた私塾「ガキ大将養成講座」は、座禅や山登りなどをつうじて、義理と人情のある子ども達を育てよう取り組んでいる。これには、名古屋、瀬戸、浜松などの街の子ども達が参加している。

さらに、名古屋の今池の子供会を呼び田植えや間伐をしてもらったり、また、ファミリー登山部をつくって、小学生を対象に年に数回の登山をしたりもしている。まだ退職前だが、仕事よりも忙しい日々を送っている。

その他、伝えたいこと

今は、自分の活動が流域圏としてみた時にどういう位置にあるのか把握出来ない。流域圏全体で顔の見える関係をつくっていくことが出来ないか。顔が見える関係になれば、山の人が海を汚してはいけない、海の人が山に木を植えたい、という気持ちが生まれるのではないか。

写真



右が「旭薪づくり研究会」と「あさひガキ大将養成委員会」の安藤さん



新築中の「さくら村ツリーハウス」



「旭薪づくり研究会」には、このような土場が5つある



「さくら村秘密基地」も増設中だ

有間竹林愛護会

調査団体名	： 有間竹林愛護会	団体代表者名	： 原田茂男
設立年	： 2011年4月1日	対応してくれた人の名前	： 原田茂男
団体URL	：		
活動拠点	： 豊田市有間町 竹ノ下地内	調査員	： 大森正昭、松井賢子、沖章枝
取材日	： 2015年11月26日	レポート作成者	： 沖章枝

活動内容：有間町竹ノ下地内の竹林を整備し、矢作川河畔の景観を良くし、河畔の散策ができる遊歩道を敷設して住民や来町者に安らぎと癒しの場づくりをめざす。

現在のハチク竹林は、昭和30年代まで畑だった。畑を耕作していた時は民家から川が眺められ、川風が家までとどいて心地よかった。畑を作らなくなったら竹が驚く速さで繁茂し真っ暗になって風も来なくなった。

平成23年、川岸の植生調査をした豊田市矢作川研究所の指導があって、会を立ち上げ竹林の整備を始めた。全体の整備計画を前期5年間、後期5年間に分けて、前期の4年が終わって、今年は、これまでの整備地の振り返り間伐をしている。

後期の5年間では、① 次の整備竹林の間伐 ② 遊歩道の整備 ③ 管理道路の敷設 ④ 竹林内の筍の採取と商品化を計画している。

豊田市のわくわく補助事業によって道路の整備や、平成27年3月には、林内に休憩所“ふれあいの小屋”が完成して作業の効率も良くなった。

間伐作業は、毎月第3日曜日を定例作業日にして、年間12回。ただし、町内会の作業を優先して変更する月もある。伐採竹は纏めて豊田市の焼却場へ運んで燃やしてもらっている。最近では、伐採竹の利用を考える会社（豊田バンブー株式会社）が聞きつけて来られ、機械を運んできて一部竹チップにされている。粗いチップやパウダー状にして、肥料や公園等の遊歩道に敷き詰めるなどさまざまな試験を始められている。

ボランティア学生さんの協力もある。間伐は会員で、ボランティアの方には搬出をさせていただいている。

設立時の会員18人。2人増え、1人引退され、現在は19人で内訳は50代1人、60代8人、70代10人。加えて、女性部（会員のつれあい）が14人となっている。

キャッチフレーズ：

ただひたすら私たちは竹をきる

会のモットー（何を大切にしているか）：参加することも、作業も無理をしない。慌てず、ゆっくりと。

作業に参加するときも体調に合わせて、無理強いはいらない。

曲がった竹は切ると、倒れる時に縦に裂けやすいし、長いので倒れた先に人がいないことを確認するなど、怪我のないように気を付けている。お陰でH23年から今まで怪我をした人が一人もいなかった。

設立から現在に至るまで変化したこと：

①みんながやる気満々になってきた気配を感じる。家でブラブラしては体に良くないから会に入れて欲しいという人もでてきた。会員の連れ合いの14人の女性が加わった影響も大きいと思う。

②14人の女性で女性部を作り、筍が生育する5、6月に採取して、皮を剥いて、小渡の商店街に出荷している。瓶詰めにし、“夢たけのこ”の商品名で販売している。ただ、有間竹林愛護会としては皮をむいた生の筍を出荷するまでを担っている。

③女性部の会員で“たけのこ屋”というグループをつくって、販売の許可をとって筍ごはんの弁当をイベント会場で販売をするようになった。

④H24年からは、ただ竹を伐採し5、6月に筍を出荷するだけでは能がないのではと考え、集落全員参加で“初物の会”を催すようになった。整備した竹林のなかで、採れたての筍ご飯を炊いて、味わい楽しんでいる。

連携している団体・専門家・自治体など:

豊田矢作川研究所、おいでん・さんそんセンター、豊田バンブー(株)、矢作川愛護の18団体(情報交換をしている)

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など):

現在活動中のすべての事柄が該当するように思いました(取材者)

現在直面している課題:

竹は直ぐ生えてきて、油断すると直ぐ繁る。タケノコの間には採取、伐採するのが効果的と考える。生育の期間は女性部が筍を担当している。

H26年、27年連続で相山女学園大学の食品・栄養学専攻の学生や小渡こども園の園児、今年は小渡小学校の1、2、3年生も筍採取体験に来てくれた。採った筍を土産に持って帰ってもらっているが、筍を活用した新たなレシピの研究開発があるとよいと思う。

今後やってみたいこと:

- ①安らぎと憩いの場を求めて地域の外からの人にも来てもらいたい(そんな場を作りたい)。
- ②遊歩道が完成したら、竹林内の案内板を設置したい。
- ③竹林の下流の川岸に、土地の人が昔から水神さんと呼んでいる大きな石があるので祠を建てたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か:

広報の仕方やアイデアがあれば頂きたい。

チームオリジナルの質問:

<質問内容>竹林の整備地の所有者と地目はどうなっているのか。

全て民有地で畑。

整備計画地55,000㎡が有間竹林愛護会に委託されている。

その他、伝えたいこと:

整備を急ごうとすると積極的にボランティアの募集を願うことになるが、それも“急がずゆっくり”、と思っている。

写真



竹林ふれあいの小屋(H27年3月完成)



原田 茂男代表



整備した竹林

こども園児がたけのこ採り体験

6月4日(水)、小渡こども園児がたけのこ採り体験に訪れました。11名の園児と先生・保護者のみなさんが竹林を見学しながらたけのこの採取を楽しみました。竹林愛護会の会員に採り方を教わり、たくさんなたけのこを持ち帰ってもらいました。



集落全員参加で初物の会(筍ごはん)

“有間竹林愛護会だより”より

あすけ聞き書き隊

調査団体名	: あすけ聞き書き隊	団体代表者名	: 河合友理
設立年	: 2010年	対応してくれた人の名前	: 河合友理
団体URL	: http://asukekikigaki.boon-log.com/		
活動拠点	: 豊田市足助地区	調査員	: 今村豊、洲崎燈子
取材日	: 2015年 12月18日	レポート作成者	: 洲崎燈子

活動内容

豊田市足助地区に住む70代以上のお年寄りから、主に仕事について話をうかがい(最低2回)、記録に残す。1年間かけて取材と書き起こし、編集を行う。発起人は旧足助町役場に勤め、足助の地域振興に関わってきた、去年までの代表者の井上美知代さん。足助地区に受け継がれてきた山里の伝統や文化を、次世代に語り継ぐのが自分たちの使命だと感じたことがきっかけだった。

2010年に開始し、毎年1冊発行して、現在6冊目を作成中。自分は初回から参加している。スタッフは、「まだ話を聞きたい人がいっぱいいるので続けたい」と言っている。毎年、なるべく足助地区のさまざまな場所に住むお年寄りからお話を聞くようにしている。

取材者は愛知県内各地から集まっていて、他にも初回からの参加者がいる。年代は30～50代位だが、以前中学生が親と一緒に参加したこともある。

キャッチフレーズ

昔の暮らしから今の暮らしを見直す

会のモットー(何を大切にしているか)

話し手の言葉を大事にする。本人の話した言葉のみを使い、本人の口調で文章を作る。当たり前前の生活の大切さを伝える。

設立から現在に至るまで変化したこと

第1集と第2集は豊田市の「地域予算提案事業(取材者注:効果的に地域課題を解決するため、地域住民の提案を市の予算案に反映させ、地域の課題解決を進める事業)」を使って発行した。第3集以降は同じく市の「わくわく事業(取材者注:地域資源を活用し、地域の課題解決や活性化に取り組む団体を支援する地域活動支援制度)」を用いて配布分(200部)の冊子を印刷し、他にお金を出し合って販売分(200部)を印刷している。わくわく事業の助成はいつまで受けられるかわからないので、ゆくゆくは自前で発行できるようにしたい。10集は発行したい。

第3集を発行したときに交流館で発表会をした。第4集以降はより地域の人とのつながりを意識して、足助病院で発表会をしている。来年2月には朗読会も計画している。お年寄りには字が小さいようなので(フォントサイズ10)、朗読を聞いて聞き書きに触れてもらうのも一つのやり方と考えた。入院している人にもふらっと聞きに来てほしい。いずれは患者さんにも話を聞きたい。

連携している団体・専門家・自治体など

NPO法人共存の森ネットワーク(聞き書きの指導)、豊田市役所足助支所、三河中山間地域で安心して暮らし続けるための健康ネットワーク研究会

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

昔の価値観を教わることで、今の地域をよくするきっかけになる。たとえば、昔は今と全く異なり、山との関わりが重要だったと知ることが、「間伐を進めて山に入りやすくしよう」と思うきっかけになる。また、地域の長所と短所が分かる。足助出身の自分としては、1ターンの人たちの活躍は嬉しいが、地元の若い人ももっとこういうことを知り、地域おこしに関わってほしい。

現在直面している課題

毎年続けることが課題。新たな聞き手の参加を増やすこと。

今後やってみたいこと

もっと若い人に読んでほしいし、聞き書きに参加してほしい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

足助地区に一つずつある中学と高校で呼びかけをして、取材者をリクルートするといいかもしれない。民俗学を専攻する大学生とつながりを作れるとなおいい。主婦にも声かけして、編集などの手伝いに関わってもらえるといい。主婦が昔の家事のことを聞くのも面白いと思う。

チームオリジナルの質問

<質問内容>聞き書きのコツを教えてください。

<答え>話を聞くときは自分が堅くならないように気を付ける。想像していたのと違う話が出てくることもあるので、話しながらインタビューされたいことを探る。予備知識のない若い人が話を聞いた方が詳しく説明してくれることがあるので、時には知らないふりをすることも必要。また、「大変だった」「印象がひどかった」と良くないイメージの言葉が続くこともあるが、インタビューを重ねて出た「それでもいい体験だった」という本人の言葉を生かすような編集次第で、読者が受ける印象が随分と変わる。戦争体験を沢山話される人が多いが、聞きたいのは仕事の話なので、バランスを考えて構成する。世間話になってしまうと文章にできないので注意する。

実際に話を聞くと、冊子には載せられないことが聞けるのが面白い。

チームオリジナルの質問

<質問内容>聞き書きを続けていてよかったと思ったことを教えてください。

<答え>お年寄りが家族に話せないことを話してくれることがある。話を聞かれるのが気晴らしにもなるようだ。「また来てね」と取材者と仲良くなったり、引きこもりがちだったおじいさんが外に出るようになったりしたこともある。

できあがった冊子を渡すと喜んでくれる。10冊ほしいという人もいる。

話を聞いているのと同じ世代の方が「懐かしい」と言って、毎年発行を楽しみにしてくれている。

毎年続けることで地域に普及し、応援してくれる人が増えた。

たとえば今、鍛冶屋さんに話を聞いている方がいる。一般的に刀鍛冶は有名で、ネットでも多くの情報が出てくるが、山や畑の仕事に使う道具の鍛冶についての情報は全くない。あるとしたら研究者の論文くらい。こういう情報が残せるのは貴重だと指導者の方に言われ、聞き書きでないと拾えない歴史があると再確認した。

その他、伝えたいこと

聞き書きを通じて分かった足助という地域の個性。足助に住んでいる人は香嵐渓を誇りに思っていると思う。町で商売をしている人はいろいろな仕事に次々チャレンジし、山間部に住む人は丁稚に出たりしてこつこつ頑張っているという印象を受ける。また、小さな集落の結束力の強さを感じることもある。足助の人は、美しい風景へのこだわりがある。山間部の人も、「草刈りしてきれいにしておかないといけない」という意識がある。自分たちも年を取ったら、「きれいな風景を維持できないとみっともない」と言えるようになりたい。今の荒れた山しか見ていない子たちにこういう思いを持ってもらうのは難しい。

写真



河合さんの本業は和紙を漉くお仕事です



第3集以降の表紙は河合さんが手がけています



聞き書き講座(2013年7月、足助交流館にて)

平成26年度 足助地区わくわく事業

あすけ聞き書きフェス
in 足助病院
南棟 講義室
2015年
3月22日(日)
午後1時30分～4時まで

☆あすけ聞き書きフェス開催主旨&活動報告☆

☆足助の聞き書き 第5集 完成報告&作品紹介☆

足助のお年寄りの生き様を話し言葉で綴った「足助の聞き書き」。吉野奈保子氏(共存の森ネットワーク事務局長)をコーディネーターに迎え、話し手と聞き手とのインタビューを交えて完成した第5集を紹介。

*駐車場は足助病院駐車場をご利用ください。

是非いらして下さい!!

お問い合わせ

090-8732-6308 (事務局 高木まで)

あすけ聞き書き隊 で検索!

ブログ: <http://asukekikigaki.boon-log.com/>

協力: JA愛知厚生連 足助病院
三河中山間地域で安心して暮らし続けるための健康ネットワーク研究会

聞き書きフェスのチラシ(2015年3月、足助病院にて)

山里センチメンツ

調査団体名	山里センチメンツ	団体代表者名	安藤 順 (中心スタッフ5名) (プロジェクト毎にスタッフが入れ替わります)
設立年	2013年(1月)	対応してくれた人の名前	安藤 順
団体URL	http://yamazatosentiments.booo-log.com/	調査員	洲崎燈子・今村豊
活動拠点	444-2802 豊田市田津原町惣作9番地の1	レポート作成者	今村豊
取材日	2015年12月15日		

活動内容

地域住民が余分な精神的ストレスを受けることなく生活でき、健やかに生きられるように、新しい概念である「モラルハラスメント」を地域に紹介している。設立時の平成25年から現在に至るまで「モラルハラスメント」についての学習会・講演会等を、豊田市の山間部で専門家を招いて5回開催した。グループ名で使っている「センチメンツ」という言葉は、人々が持つ気分、気持ち、心情、たたずまい、雰囲気、共感のことで、里山に住む人々の心や空間を健やかなものにしていこう、気持ちを言葉で伝えて心を置き去りにしない、という「山里の住民が持つべき健やかな心」を表している。

※モラルハラスメントとは

身体を傷つけずに、言葉や態度で心を傷つける嫌がらせやいじめのこと。目に見えず証拠に残りにくい。

キャッチフレーズ

「気持ちを言葉で伝えて 田舎を居心地の良い所にしていこう」

会のモットー(何を大切にしているか)

- ①モラルハラスメントをなくし田舎を住みやすくすること
- ②住みやすい田舎をつくる人を育成すること、
- ③山村における「子どもの人権」について認識を高めること
- ④子どもの自主性・多様性を育み尊重すること

設立から現在に至るまで変化したこと

設立当初(2013年1月)講演会開催費用等、資金面で悩んでいたところ、豊田市旭支所長さんが「旭地区わくわく事業活動助成金制度」を教えてくれ、今後の活動資金の調達について目途が立った。その後、「モラルハラスメント」についての学習会・講演会を重ねることで、豊田市旭地区の「モラルハラスメント」に対する認識度を高めることができた。こうした活動を通じて「山里センチメンツ」が理想としている、地域を超えた様々な方々がテーマを共有しながら連携して活動を展開していく「テーマ・コミュニティづくり」に結びついた。平成27年以降は大人が子どもを抑圧するのを防ぐこと、子どもが自殺しなくて済むようにすることに力のほとんどを注ぐ方針としている。

連携している団体・専門家・自治体など

愛知県厚生農業協同組合連合会足助病院、三河中山間地域で安心して暮らし続けるための健康ネットワーク研究会、おいでん・さんそんセンター、NPO法人 都市と農山村交流スローライフセンター、とよたプレーパークの会、野外保育とよた森のたまご、アルプスこども会(長野県駒ヶ根市)

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

山村に住んでいる大人や子供、山村に来たばかりの方、これから山村に来られる方々が、自分が暮らす地域社会を、人間関係においてストレスがなく、健やかな気持ちで末永く暮らしていける居心地の良い山村で良かったと実感できるように、「モラルハラスメント」の学習会・講演会等を実施している。これらの取り組みによって、山村における「人間関係の改善」という最も基本的な住民のメンタルな側面から、山村の再生と担い手づくりに貢献している。

現在直面している課題

子どものメンタル的な被害者を失くすため、教育関係者と連携した取り組みや、「教育の改革」等をテーマに活動を展開したいが、教育関係者の組織の壁は厚くなかなか入り込めないのが現実である。今後、効果的な取り組み方法について勉強を進めていきたい。また、こうした「モラルハラスメント」の概念を、さらにより多くの山村に定着させていくためにはどんな方法が良いか、そのひとつの方法として、自著による「取り組み成果の冊子化及び図書化」を検討している。

今後やってみたいこと

歪んだ子ども観を持つ大人から子どもへの心的虐待を予防するためのミニシンポジウム「あたらしい子ども観を学ぶ」を平成28年末に開催します。またその半年前に「みんなの学校」という映画の自主上映会を開催します。また、次の施設を訪ねます。フリースクール自分を生きる学校Mii(多治見市)、みんなのたまり場ちゃどかん(多治見市)、森のようちえん 自然育児 森のわらべ多治見園(多治見市)、森のようちえん てんとうむし(みよし市)、野外保育とよた 森のたまご(豊田市)、とよたプレーパーク(豊田市)、とよた子どもの権利相談室(豊田市)、子どもオンブズパーソン(兵庫県)

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

先にあげたグループと連携し合う他、自分たちのメンバー以外に毎回取り組むテーマごとに新メンバーの方々に加わってもらっている。従って、情報や人脈は学習会・講演会・シンポジウムを開催する度に、入手・拡大している。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

山村に「モラルハラスメント」の概念を定着させることに取り組む、そのきっかけとはどんなものだったのですか。

<答え>

- ①身近な知人に「いじめ」に会った方がいて、どうにかしなければいけないと感じたこと
- ②山村部においても「モラルハラスメント」の実態があることを強く実感し、いたたまれない気持ちになったこと
- ③そうした実態がありながらも、山村に「モラルハラスメント」の概念がなく、常態化していても気づきがないこと
- ④「モラルハラスメント」をなくすには、その芽とも言える子ども時代の「いじめ」を失くす必要があること
- ⑤そのためには「里山の自然環境」を活用した活動を通して、子どもの自主性・多様性を高めていくことが理想的である事例を知り、当地区でも実践したいと感じたこと
- ⑥本当に住みやすい山村をつくるためには、山村に関わるすべての人が「モラルハラスメント」の問題を絶対に避けては通れないこと

その他、伝えたいこと

山村に住む多くの方が人間関係や地域社会の中で「いじめられ感・疎外感」を感じていながら、なかなかその感情を言い出せなくて悩まれている。それは、健全な心の状態とは言えず、このことに地域社会は気づいて、対応しなければならない。こうした「モラルハラスメント」の概念を山村に普及し、また、その実態を気づかせて、山村に住む誰もが自分の気持ちを言葉で伝えられるような地域社会に変え、皆で田舎を居心地の良い所にしていきたいと思います。

写真



取材風景



テーマ・コミュニティ・ミーティング【いじめとハラスメントを語り考えるミーティング 2015 足助】
(平成27年10月30日に足助病院南棟講義室で開催)
今後、豊田市総合教育会議、豊田市教育委員会、定例会議、豊田市議会、豊田市地域会議(旭、足助など旧町村)を定期的に傍聴していく。

しもやま再来るプロジェクト

調査団体名 : しもやま再来る(サイクル)プロジェクト 団体代表者名 : 木下貴晴
 設立年 : 2012年(6月) 対応してくれた人の名前 : 木下貴晴・川合寿佳
 団体URL : <https://www.facebook.com/shimokuru>
 活動拠点 : 手づくり工房山遊里 調査員 : 大森正昭・高橋伸夫
 取材日 : 2015年12月05日 レポート作成者 : 高橋伸夫

活動内容

下山地区の活性化を目的として主に土日曜日、下山地区在住の主たるメンバー7名で下山地区をサイクリストのパラダイスとすることを目的に活動している。間伐材を利用した自転車ラック(スポーツ自転車の駐輪装置)を地区内の店舗等に設置することを考え、20台作製して店舗に設置してもらった。アンケートで得られたサイクリストやトライアスリートの需要「ごく軽い食事」や「短時間の休憩」等を提供するための「ちよい食べ企画」(おしるこ、おにぎりなどの販売、しもやま茶の試飲提供、冬場は薪ストーブでの暖提供等)を考えて実施中。他に下山地区の周辺で行われている自転車関係の行事へのお手伝い等も実施している。

キャッチフレーズ

「走りながら考えよう まずは行動」
 「エコフルタウン豊田市を車と自転車の町に！」

会のモットー(何を大切にしているか)

自転車乗りにも優しい地域づくりで下山へ再び来ていただくことを目指す。(これが会の名前の由来)

設立から現在に至るまで変化したこと

設立当初(2012年6月)は資金面で豊田市「わくわく事業」の補助金を考えていたが、条件が合わず断念。その後香恋の里しもやま観光協会と豊田市法人会の補助金の目処が付き2014年に申請、2015年に豊田森林組合に発注して自転車ラック20台を作製。地域の店舗には実費の半額程度で購入していただき、希望のあった店舗の前に設置していただいた。2015年4月18日他で当プロジェクトの記事が中日新聞に掲載されて、問い合わせなど多くの反響があった。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田森林組合・香恋の里しもやま観光協会・豊田市法人会・NPO法人チャリンコ活用推進研究会・(株)トライアスロステーション

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

間伐材を使用した自転車ラックづくり、自転車ラックの設置や「ちよい食べ企画」などの受け入れ態勢を作って下山地区へサイクリストの誘致など、全て根底には地域の活性化・地域興しがある。(他に同地区で実施しているわくわく事業では、竹藪の伐採など景観整備やベンチの設置を実施している)

現在直面している課題

最大の問題は活動資金の調達。まだ本格的な事業化まで達していない。
 その他には自転車文化の振興に対する行政等の関心不足・自転車のルールやマナー違反によるトラブルの発生。

今後やってみたいこと

自転車ラックの改良、自転車ラックを豊田市周辺中山間地へ普及させる、充実したサイクリングマップの作成、自転車マナー等の啓発(プロ等を講師に招いて正しい乗り方指導の講習会実施など)、自転車道路の整備および自転車用標識や案内板等を充実するため関係機関への働き掛け。

以上の他にも、地域の気象や道路状況などをリアルタイムの情報としてサイクリストへの提供ができないか、一般的な自転車ラックに使用されている樹脂製部品を木製で作製できないか、トヨタ自動車の新テストコースで自転車イベント(ジョギングやサイクリングイベント等)を実施させてもらえないか、三河湖の周辺に来訪者が楽しめるアート作品(佐久島の「おひるねハウス」のようなもの)の設置ができないかなど、やりたいことはたくさんある。「自転車といえば下山が有名だよ」となることを目指している。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

矢作川流域圏懇談会も情報・人脈を得る上で力になりそう?

チームオリジナルの質問

<質問内容>

山遊里の対岸上流部分が整備されているが、誰が行っているのか?

<答え>

「しもやま再来るプロジェクト」メンバーも参加している地元団体が豊田市「わくわく事業」の補助金を得て行っている別事業で、地域の景観整備を行っている。伐採した竹をチップにして地面に敷き(舗装効果と雑草防止効果がある)、テーブルやベンチを設置している。

その他、伝えたいこと

「エコフルタウン豊田市を車と自転車の町に！」を目標に行政(豊田市エコフルタウン)にバックアップしてもらえるような存在になりたい。

写真



取材風景



自転車ラック



ちよい食べ企画

コレカラ商店・コレカラ農園・コレカラご飯

調査団体名	コレカラ商店・コレカラ農園・コレカラご飯	団体代表者名	水澤孝司
設立年	2013年	対応してくれた人の名前	水澤孝司
団体URL	http://stillwate2.wix.com/korekara		
活動拠点	豊田市大阪町北ノ入47-1(コレカラ商店)	調査員	丹羽健司、浜口美穂
取材日	2015年12月21日	レポート作成者	浜口美穂

活動内容

●これまでの経緯

- ・神奈川県川崎市出身。
- ・自分のお店の開店資金をためるため、西表島で調理師として住み込みで1年ほど働く。
- ・青森県弘前市で5年ほどアジア料理の定食屋を営む。同時に六ヶ所村核廃棄物再処理場や原発への問題的提起の活動も行う。
- ・かねてから空き家バンクを通じて情報を入手していたが、東日本大震災をきっかけに2011年4月、妻と1歳半の子どもと一緒に豊田市小原地区に移住。
- ・様々な活動があったにも関わらず、原発事故が起き、住むところをなくした人もいた現実に無力感を覚え、その反動で移住後は某大手の会社で調理師として働く。・・・が、2時間で何千人もの食事を作り、「気持ちが入っていない料理だから一口食べて合わない」とすぐポイッと捨てられてしまう」という状況の中で自問自答。「本当にやりたいことは、自分で育てたもので料理を作って提供すること」と再確認し、3カ月で会社を辞める。
- ・2012年4月頃から1年間、豊田市栄生町の「みどりの里」で農業(自然栽培)研修を受ける。
- ・2013年に車の移動販売の許可を取り、各地のマルシェなどでお弁当販売をするようになる。小原の食材を使った菜食弁当。
- ・同時に元は桑畑だった畑を借りて無肥料、無農薬、固定種の種で野菜栽培を始める。
- ・同じく2013年に友人2人とイベントもできるスペースを借り、「419製作所」と名付ける。その一角の店舗で「自分で作る」ことを応援する商品(基本調味料、ビールキット、オーガニックコーヒーの生豆、各種スパイス、製麺機、湯たんぽなど)を扱う「コレカラ商店」を開業。
- ・2014年には、陸稲作り、畑に残っていた桑の木を活用して桑茶パウダー作りも行う。

●2015年の活動

- ・コレカラ農園・・・3年目で1反に増やしたが、夏に時間をかけられなかったら草に負け、イノシシに入られて、初心に戻る機会を得た。桑茶パウダーは小原地区に本社があるあいのう流通センターが半分ほどを買い取り、残りは手売りで完売。
- ・コレカラご飯・・・月に4つのマルシェ(豊田・green mamanの朝市、豊田・ストリート&パークマーケット、名古屋・東別院手づくり市、あま市・甚目寺観音手づくり市)で菜食弁当の販売をする他、オードブル・ケータリングの注文を受けている。
- ・コレカラ商店・・・現在は、419製作所でイベントをする時のみ開店。「自分で作る」「買い続けなくていいもの」を販売。

キャッチフレーズ

懐かしくて新しいコレカラの暮らし

会のモットー(何を大切にしているか)

●自分で作る暮らし

商店を始める時に、ビーフリーマーケットをやろうと思った。日本語に当てはめると何だろうと考えて「コレカラ」にした。「懐かしくて新しい」というのは、「自分で作る」暮らし。

与えられる(買う)ものだと思いついでいるものが、自分で作れることを知ると変わってくる。喜びも湧いてくる。個が変わると全てが変わると思う。

●目指すは、「農」「仕事＝料理」「暮らし＝家のこと」の3つのバランスがとれること。

設立から現在に至るまで変化したこと

コレカラご飯・・・最初は菜食メインの料理だったが、M-easyの戸田さんに「自分がやりたいことより、人がやってもらいたいことをやった方がずっと続くよ」と言われ、希望に応じて菜食以外の料理も作るようになったら、オードブルの注文が増えてきた。こだわりを捨てたら広がった。マルシェでは菜食弁当を販売しているが、それは「みんなが食べられる(食べられない人がいない)」から。欲しい人に欲しいものを作ってあげられるのがいい。

連携している団体・専門家・自治体など

大工集やまびこ、green mamanなどマルシェでつながった人・団体、M-easy、山本薫久氏、おいでん・さんそんセンター、他多数

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

- ・419製作所は、異業種の人たちが集まって何かを生み出せたらと思って借りたスペース。現在は音楽的なイベントや、水澤さんの妻をはじめとする女性グループが中心となって不定期で朝市を開催。これからここでどうやって利益を生んで活かしていくか考えている。
- ・地元の人から借りている畑は、元々桑畑でその後リンゴ畑になった後、セイタカアワダチソウがはびこっていたところ。それを開墾した。桑の木があったので活かしたいと思い桑茶パウダーを作った。今年は300袋？弱だったが、目標は1000~2000袋？。
- ・山の間伐材(ヒノキ)でなめこを栽培。
- ・稲作り・・・今年、妻の女友達も含め3人で田んぼを借りた。
- ・移住から4年経ち、今年は地域の組長をやっている。

現在直面している課題

まだまだ駆け出しなので、農と仕事と暮らしのバランスが取れないこと。ほんとは暮らしに必要な分だけ仕事(料理)をして、余分な仕事は断り、あとは農と家のことをやりたいが、まだ始めて2~3年なのでお客さんがいなくなる不安感から注文はすべて受けている。そうすると、2015年のように農に時間をかけられなくなる。

今後やってみたいこと

- ・ワンデーシェフを2015年は名古屋でやったが、もっと近いところで定期的にやりたい。
- ・419製作所の活用。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

地域でつながりづくり。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 青森でやっていた反原発運動などは今はやっていない？

<答え>

今は暮らしに落とし込めていて、依存しすぎない生活を心掛けている。井戸のポンプをソーラー発電で動かしたり、温水器、お風呂も薪ボイラー。「お風呂ってこんなに気持ちいいんだと思った」。このような暮らし方はわくわくする。東日本大震災の時、うちにはだるまストーブも薪ストーブもあって困らなかった。昔の人が使っていたものはすごいと思う。

その他、伝えたいこと

●都会と田舎

田舎には値段が付いていないものがたくさんある。自分が生まれ育った都会は、全部に値段が付いていた感じがする。バスや電車を待つ時も座る場所がなく、お金を払って店に入らないと座るところもない。田舎なら切り株にだって座れる。人が見向きもしないものがたくさんある。そこが楽しい。

●女性と子ども

子どもがいるから、地元の人に「こいつは何やっているか分からないけど、ちゃんとやっているんだろう」と思ってもらえる。信用される。

女性は暮らしの中で見栄も建前もなく、当たり前のことを当たり前に行っていてすごいと思う。女性は田舎暮らしのキーポイント。

●助け合う暮らし

419製作所は3人で借りているが、それぞれが自立して1となってはじめて、集まった時に3以上のすごいものが生み出せるのではないかな。一人前になっていないものが集まっても何も生み出せない。それぞれが自立することがまずは大事。その上で大変なことがあれば助け合っていきたい。

小さな助け合えるコミュニティがいくつもあって、それが大きくつながるのが理想。広くなるとイベントになって暮らしではなくなる。

写真



コレカラ商店にて、水澤さん



東別院てづくり朝市(名古屋市)にて
コレカラ弁当を出店



桑茶パッケージ

first-hand

調査団体名	: first-hand	団体代表者名	: 松島周平
設立年	: 2006年	対応してくれた人の名前	: 松島周平、松島知美
団体URL	: http://first-hand.jp/	調査員	: 丹羽健司・浜口美穂・吉橋久美子
活動拠点	: 豊田市御所貝津町尺丈4-5(カフェ+ショップ「ヒトキ-人と木-」は豊田市稲武町タヒラ8-1)	レポート作成者	: 吉橋久美子
取材日	: 2015年12月18日		

活動内容

1. 国産の無垢材を使った家具や暮らしの道具の制作。
2. カフェ+ショップ「ヒトキ-人と木-」
3. 豊田市産の材にこだわり、木の伐採から流通までを手掛ける家具ブランド「hitotoki」
(first-hand単独ではなく、「人と木をつなげるプロジェクト」として、8名のメンバーで実施)

コンセプト

やさしさと家族

会のモットー(何を大切にしているか)

「やさしい生活」。

家具工房やカフェ、暮らしの道具を扱うショップを通して、自分たちの考える持続可能なライフスタイルを発信すること。社会の最小単位である家族を大切にしたい。日々の営みの中で、“生きること”に不可欠な食や住まいについて、無理なく楽しみながら出来ることを提案していきたい。

設立から現在に至るまで変化したこと

- 2006年 周平さんが「first-hand」を立ち上げる。
 2008年 結婚して知美さんが加わり、夫婦二人の家具工房となる。
 2010年 稲武に引っ越し。
 2015年 仲間と家具ブランド「hitotoki」を立ち上げ、木を伐るところから流通までを扱うプロジェクトを始動。
 2015年 カフェ+ショップ「ヒトキ-人と木-」をオープン。5年後ぐらいと思っていたが早く実現した。

連携している団体・専門家・自治体など

カフェ+ショップ「ヒトキ-人と木-」は一般財団法人古橋会の協力を得てオープンした。
 hitotokiは建築士や製材業者らの仲間と進めている。hitotokiの活動には豊田市森林課が協力を申し出ている。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

①針葉樹の利用促進

2008年から安心して使えるものをお届けしたいと思い、家具製作に使用する木材は”国産無垢材“に限定した。
 2010年稲武に移住を機に、身近な木(スギやヒノキ)の利用を試みている。当初は材料調達の面で難しさもあった。

②カフェ+ショップ「ヒトキ-人と木-」

地元の木材や食材など地域資源を利用し、地域内外へ発信することで、地域がより活性し、山が良くなっていけば、という思いがあった。店の開業にあたっては、古橋会に力強い賛同と協力を得て、内装には地元の山の木を使うことが出来た。

③「人と木をつなげるプロジェクト」の活動

2015年、豊田市の森を知り、木に親しむ、そして流通をデザインする「人と木をつなげるプロジェクト」を仲間と立ち上げた。「hitotoki」という家具ブランドを立ち上げ、第1号となる杉のスツールを制作。2015年東京ビックサイトの「国際家具見本市」内での企画展にデザイナーとして選ばれ出展。会の活動は、同年「ウッドデザイン賞」を受賞した。

現在直面している課題

家具ブランド「hitotoki」は、豊田市内で育った木を伐り使っているが、将来的に製品を多く流通させるためには、分業が必要であると思う。豊田市内内の業者だけでは難しい面も出てくる可能性もある。また、販売は「ヒトキ-人と木-」を中心に始めるが、広く流通させるためには、販売店の開拓なども必要であると思う。

今後やってみたいこと

①針葉樹を使った製品作り

針葉樹を使った家具作りは始まったばかりだ。今後針葉樹の美しさや良さを国内に限らず、海外も視野に入れて商品展開をしていきたい。

②「hitotoki」の家作り

「人と木をつなげるプロジェクト」では、林業従事者、建築士、デザイナー、家具職人など様々な職種の人が所属している。豊田の木材を使って、“顔の見える”新しい家づくりの提案をしてみたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

そういったことを実現する為の、積極的にリサーチなどはしたりしない。いつ実現するかわからないが、その時期が来たらできる、というスタンス。すべてにおいて、無理せず流れの中でやっている。それが僕らに本当に必要になったときに情報や人脈などを得られると考えている。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

豊田産とおっしゃっておられるが、「豊田」は行政区切りでしかありませんよね。その辺はどう捉えていますか？

<答え>

「豊田発」で、材料としては「矢作川流域で」というイメージでやっていくというのがいいかもしれない。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

「hitotoki」で開発したスツールはどんなものですか？

<答え>

杉は“軽さ”も特徴の一つだが、柾目が大変美しく、他の木にはないと思った。そこで今回は、杉の柾目を活かしたデザインとした。木材の手配については、プロジェクトメンバーのおかげで思うものが手に入った。自動車の町を思わせるような金属フレームを入れたもの、板立てのもの、脚に枠組みを利用したものと3種類を作り、この中から1種類を製品化する予定だ。杉は広葉樹に比べて加工が難しい面もあり、制作には苦労した所もあった。

その他、伝えたいこと

2011年3月の東日本大震災があって、何のためにもものづくりをしているんだろう...と考えた。自分たちのものづくりが何か世の中で役立つといいなというのがあり、山の木を使うということで山を良くする“一役を担う”ことをしたいと思った。

息子が、「お父さんがやっていることが山を良くしていくことに繋がってる」と思ってくれたら嬉しい。そうなったら、子どもたちもいろんな希望を持って、生きてることにワクワクしてくれるのでは。

「お父さんみたいになりたい」と思えるような社会になっていったらいいと思う。希望ですけどね。(周平さん)

写真



カフェ+ショップ「ヒトキ-人と木-」



「hitotoki」で制作したスツールを6つならべたところ



取材風景

額田木の駅プロジェクト

調査団体名	額田木の駅プロジェクト	団体代表者名	鈴木啓允
設立年	2015(平成27)年	対応してくれた人の名前	唐澤晋平(実行委員会事務局長)
団体URL			
活動拠点	岡崎市千万町町	調査員	清水雅子、井上崇也
取材日	2015年12月3日	レポート作成者	井上崇也

活動内容

■沿革

- 平成26年10月 準備会設立
- 平成27年2月 実行委員会発足
- 平成27年5月 開駅式開催

■仕組み

- ・山から切り出された木を1トンあたり6,000円相当の地域通貨で買い取る。
- ・買い取った木は3,000円/tで岡崎市内のチップ業者へ販売し、差額は岡崎市の補助金より補填する(今年度は国の地方創生の交付金を使用)。
- ・出荷量は自己検尺で伝票に記入(末口×末口×長さ×0.75でトン数に変換)する。
- ・毎月1回、実行委員会を開き、出荷状況や地域通貨の利用状況についての報告や運用方法について協議する。
- ・換金は月末頃に事務局が登録店舗を回る。
- ・事務局手数料として出荷者から5%を徴収(発券時に差し引く)する。

■平成27年12月1日現在

- 出荷登録者数 85名
- 登録商店数 50店舗(額田地域及び周辺地域)

キャッチフレーズ

山も地域も元気に！

会のモットー(何を大切にしているか)

木の駅を通じて多くの人に山に関心をもってもらう。山を守る必要性を知ってもらう。

設立から現在に至るまで変化したこと

現在に至るまでといっても、5月に始まったばかり。ただ、当初考えていたより多く出荷されており、予算が足りなくなる可能性が高くなってきた。到底届かないと思っていた目標(年840トン)を超えそうな、額田地域の林業に対するポテンシャルの高さを実感でき、期待が高まっている。

連携している団体・専門家・自治体など

岡崎市林務課、額田林業クラブ、岡崎市ぬかた商工会、岡崎森林組合、森林ボランティア団体、近隣の木の駅

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

額田地域は現在も林家が多く、林業で成り立ってきた背景があり、こういった林業に関わる取組に対する反応が早い。木を切って出し、地域通貨を流通させる仕組みを作ることで、林や森に関わってきた人たちに、再びチェーンソーをもって山に入ってもらうきっかけづくりになればと思っている。実際に老夫婦がひと月で10トン近く出してくる例もある。

現在直面している課題

木の駅から出荷される材は製紙用チップとなっているが、補助金頼みの現状から抜け出すためにも少しでも付加価値の高い売り方を検討していかなければならない。

今後やってみたいこと

- ・地元の子供たちを対象に、子どもの木の駅ということで、間伐、出荷、その対価で買い物まで行う環境教育をしたい。
- ・薪などで木の駅材を地域内で利用する取組み。
- ・手入れのできていない森林と、山を持っていない木の駅の出荷登録者とのマッチング。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・学校関係者、間伐させてもらえる山に関する情報
- ・薪ストーブユーザーや薪ボイラーを使ってくれそうな施設

チームオリジナルの質問

<質問内容>唐澤さんが木の駅に関わろうと思ったきっかけは？

<答え>宮城県で環境教育を行うNPOに所属し、額田のような中山間地域で活動していた。そうした活動の中で感じたのが、環境問題は長期的なものだが地域の問題は5年10年の期間でどうにかしなければならないものであるということだ。そうした現状をどうにかしなければならない気持ちを強く持った。昨年額田へ移住したところ、ちょうど額田木の駅プロジェクトの準備会が始まり、良いチャンスと思い関わることを決めた。資本主義的な物差しでみれば田舎はいらないのかもしれないが、自分はそれだけでは測れない魅力が田舎にはあると思っている。

チームオリジナルの質問

<質問内容>宮城県からのJターン就職者という視点から見て額田という地域はどう映るか。

<答え>少子高齢化が進む自分たちの地域を本気で何とかしたいと思っている人がたくさんいると感じた。まだそれが形にはなっていないとも熱がたまっていけば、いつか火がつくのだろうと期待している。

その他、伝えたいこと

・額田は、もともと林業で成り立ってきた歴史があるので、今回のような木の駅プロジェクトに対する反応が早い。市の補助金の予算を840トン分つけていただいたが、当初はとても使い切れるほど木が出てくるとは思っていなかった。しかし、ふたを開けてみれば、予算が足りなくなることを心配するほど木が出てきた。そういった意味で、額田地域はポテンシャルが高いと言える。

・林業の衰退がそもそもの原因といえるが、木の駅プロジェクトだけではとても食べていけないので、木がどうしたら売れるかを考え、その仕組みを作ることができれば、山に興味を持つ若い世代は必ずいると思っている。山で生活していける、子どもを養っていけるような環境をつくるのが田舎を活性化させることにつながる。そのためにも木を切って、売れるというルールを作っていきたい。

・林業をしていくために長期的視点で考えると、材を出しやすいところは造林をしていき、利用を行うというサイクルを確立していくべきだが、今はとても材を出せない奥地にまでスギ・ヒノキを植えてしまった状態である。そういった奥地は、天然林に戻し、天然更新に任すべきである。山のランドデザインをもって取り組んでいけると一番いい。

写真



土場にて説明(左が唐澤さん)



地域通貨「森の健康券」



実行委員会の様子

日近太鼓

調査団体名	: 日近太鼓	団体代表者名	: 吉口照波
設立年	: 1994(平成6)年	対応してくれた人の名前	: 吉口照波、吉口和江
団体URL	:		
活動拠点	: 日近の里(岡崎市桜形町地内)	調査員	: 近藤朗、井上崇也
取材日	: 2015年12月5日	レポート作成者	: 井上崇也

活動内容

■「日近太鼓」の名称について

地元の旧額田町桜形町はその昔、一帯が日近という地名であり、奥三河の土着有力勢力であった奥平氏が築城した「日近城址」に由来。演奏では、奥平氏が後の徳川家康の軍勢と戦った「日近合戦」を太鼓の弾き語りで表現している。

■歴史

平成6年に5組の夫婦と3人の主婦で「日近太鼓研究会」として発足、「早川流やぐら太鼓」の先生に指導を受けていた。当初は形埜地区の神社から太鼓を借用し練習を行っていたが、翌年から県の補助金とメンバーによる林業収益により太鼓を購入した。その年に感謝祭として第1回「日近の里太鼓フェスティバル」を開催した。また練習場の駐車場や野外ステージを地元企業や川で遊ぶ会の協力により設置した。十周年を迎えた際に日近太鼓研究会から「日近太鼓」として早川流から独立し、その後も様々なイベントに出演した。平成27年2月に二十周年記念公演を開催するに至る。発足からその記念公演まで延760回の公演を行った。

■現在

大人15人、子ども5人の計20人。小学生から70代まで幅広く、高校生や20代30代も活躍している。演目も日近合戦太鼓やかおれの清流といった基盤曲から人気ドラマやアニメのテーマ曲まで数多く叩いている。チーム内にも演者の年代ごとにグループを作り、独自に出演もしている。

キャッチフレーズ

日近の里は人情厚き現代の別天地

会のモットー(何を大切にしているか)

楽しみ続けること！

活動には経費が掛かるが、義務的なものと思いつながりながらやるのではなく、カラオケのように楽しむための費用とらえて維持管理しながら楽しもうという精神。

設立から現在に至るまで変化したこと

当初は本当に太鼓がやりたいという気持ちで始まった。しかし、様々なイベントに参加し、活動していくうちにそれが結果的に地域おこしにつながっていった。根本の大事な部分として自分たちが楽しむということは忘れてはならない。

連携している団体・専門家・自治体など

早川流、杉浦太鼓店始め地元太鼓団体、城西高校

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

清流や澄んだ空気を生み出す豊かな緑の山々のある桜形町を歴史ある「日近の里」として、多くのイベントでの公演により広く市内外にPRしている。

現在直面している課題

設立当初のメンバーが高齢になってきている。立ち上げた人の前に立って自分が引っ張っていくんだという人がほしい。

今後やってみたいこと

小学生に対して、太鼓を通じて日近の歴史を伝えていきたい。できれば、日近に来てもらって直接様子を見てもらえれば印象にも残るのではないかな。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

教育委員会、太鼓に興味がある学校の教頭先生や校長先生

チームオリジナルの質問

<質問内容>メンバーに小学生がいるが、そういった子はどのようにして参加してくるのか。

<答え>日近太鼓が出演したイベントで見て聴いて、自分もやりたいと言ってくることが多い。地元の子ばかりではなく、岡崎市街から来る子もいる。

その他、伝えたいこと

■取材者から

日近太鼓は2015年に20周年を迎え、市民太鼓団体の先駆けとして精力的に活動されてきました。その原動力の根底にあったのは、何よりも自分たちが楽しみたい、やりたいという気持ちでした。日近太鼓の活動が受動的なものであったら20年以上も長く続くことはなかったのではないのでしょうか。魅力を見出して前向きな気持ちで活動できたことに中山間地域再生の鍵があると感じた取材でした。

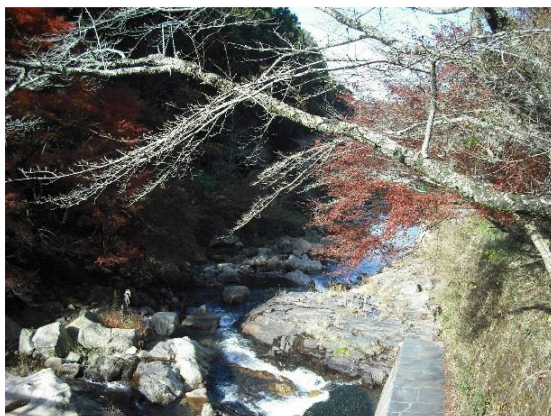
写真



元木材加工場を利用した練習場



吉口夫妻と取材者



日近の里の脇を流れるかおれ溪谷



平成28年1月1日 新年交礼会でのステージ
(岡崎市提供)

鳥川ホタル保存会

調査団体名	: 鳥川ホタル保存会	団体代表者名	: 松田直人
設立年	: 1994(平成6)年	対応してくれた人の名前	: 松田直人、片岡喜幸、今泉清、松下昭
団体URL	: http://www.oklab.ed.jp/tokkawa/	調査員	: 清水雅子、井上崇也
活動拠点	: ホタル学校(旧鳥川小学校)	レポート作成者	: 清水雅子
取材日	: 2015年12月3日		

活動内容

- ・ホタルの保護・育成活動(クリーン活動、森林整備など)
- ・名水百選である鳥川ホタルの里湧水群の維持管理
- ・水の源を巡る「ホタルの里の山歩き登山道」の整備
- ・ホタルまつり、山歩きイベントなど啓発イベントの開催
- ・炭焼きクラブなど、様々な活動が派生している

キャッチフレーズ

「(旧)鳥川小学校がある限り、コミュニティは永遠に不滅です!!!」

会のモットー(何を大切にしているか)

- ・地元の人たちの気持ちをくみ取って活動している。
- ・よそから来てくれた人を大切にする。
- ・自分たちのことは自分たちでやる!

設立から現在に至るまで変化したこと

- ・以前からホタルの保護活動をしていた鳥川小学校と共に、平成6年に鳥川ホタル保存会が発足。会には、鳥川地区の全57戸が参加している。
- ・その後、昔、使っていた山道を登山道として整備したり、ホタル祭りを行ったりと、活動が広がっている。
- ・鳥川小学校は閉校してしまったが、校舎は岡崎市の「ホタル学校」という施設になり、共に活動を行っている。
- ・やはり若い人は外に働きに出ていってしまっているが、町内の世帯数はあまり減っていないのが幸い。

連携している団体・専門家・自治体など

- ・平成22年3月に鳥川小学校が閉校したが、24年4月には校舎が岡崎市の「ホタル学校」となり、活動も岡崎市役所と連携して行っている。
- ・水守森(みまもり)支援隊、里山ハイキングの会等の方が、ボランティアで登山道整備や看板作り・設置をしてくれている。
- ・ホタル学校のホタルサポーターの方も、行事にお手伝いに来てくれる。
- ・今年のホタルまつりには、光ヶ丘女子高等学校合唱部の皆さんに来ていただいて歌を披露してもらった。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

- ・登山道整備を行い、道案内の看板も木で作ったりして、登山客に山歩きを楽しんでもらう。
- ・間伐を進め、森林の手入れを行っている。
- ・炭焼きクラブで、森林資源の活用もはかっている。

現在直面している課題

- ・登山道の整備など人手が足りないことがある。
- ・林業が衰退した今は、山が荒れていて、川の水量も減ってきているし、大雨の時に土砂が流れて川が埋まってしまう。山に入って、山の手入れをしていかないといけない。
- ・活動の中心は60~70代の高齢者であるため、次世代への引継ぎを上手くしていかななくてはいけない。(今の50代が定年になれば、やってくれると期待はしている)

今後やってみたいこと

- ・新たな山歩きコースを作りたい。
- ・山の手入れを進めていきたい。
- ・これからも楽しみながらやっていければいいと思う。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・山の手入れをするにしても、全体的に取り組んでいかないといけない。みんなで足並みを揃えて進んでいかないと。
- ・地籍調査を(行政に)行って欲しい。山の境界がわからなくなっているため、山の手入れも進みづらい。

チームオリジナルの質問

<質問内容> どうして鳥川小学校の活動に、地域で参加することになったのか？

<答え>

- ・昔は時期になるとホタルがいたるところで乱舞していたが、昭和30年代から40年代後半にかけてすっかり少なくなってしまった。また、魚も少なくなってしまった。水質汚染や農薬の影響もあったのだろう。
- ・鳥川小学校が昭和の時代からホタル保護活動を実施していたが、平成元年ごろから学芸会で発表するようになった。ホタルも少しずつ増えてきたので、小学校で子どもたちが頑張っているから地域あげて参加しよう、ということで、平成6年に会が結成された。
- ・鳥川小学校が地域の拠点となっていたので、自然とそういう流れになっていったと思う。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 地区の全戸が会員になっているとのことだが、活動に対して反対意見はないのか？

<答え> 意見は様々あるが、「反対」意見はない。会費も皆がちゃんと支払ってくれている。

チームオリジナルの質問

<質問内容> なぜ登山道の整備をすることになったのか？

<答え> ホタルの命は水であり、水は山から生まれるもの。だから、山歩きをとおして自然の大切さ、森林の大切さを感じてもらいたい。

その他、伝えたいこと

- ・鳥川地区の人は、自分たちのことは自分たちでやる、という気持ちが昔から強かった。洪水で川にかかる橋が流されると、皆で山の木を切って橋を架けたりしたものだ。
- ・山に囲まれた集落に学校が1つだけだったこともあったのか、学校行事のときは地域で参加し盛り上がった。今は学校がなくなってしまったが、「ホタル」の保護活動をとおして地域を連携させていきたい。
- ・平成20年に環境省の名水百選になった湧水など、鳥川の素晴らしい自然を多くの方々に触れて楽しんでもらいたい。
- ・市が閉校した小学校を「ホタル学校」として再スタートさせてくれた。大変素晴らしいことで、是非、多くの皆さん方に来て、学んでいただきたい。

取材者からひとこと

- ・こんなにコミュニティがしっかりした地域が、こんなに身近にあることを、取材するまで知りませんでした。
- ・以前に石徹白に取材に行ったときと同じような、とっても暖かい気持ちになりました。
- ・鳥川地区が素敵な地域であり続けていくこと、また、それを楽しみながら支えるヨソ者が集まることを、願うばかりです。

写真



取材に応じていただいた鳥川ホタル保存会の皆さんと、取材者の2人



ホタルの餌となるカワニナの養殖



一つ一つ手作りされた登山道の案内板



登山道の入り口

岡森フォレストーズ

調査団体名	岡森フォレストーズ	団体代表者名	南條清二
設立年	2013年3月	対応してくれた人の名前	南條清二(塚本実並、眞木宏哉)
団体URL		調査員	丹羽健司
活動拠点	岡崎森林組合	レポート作成者	丹羽健司
取材日	2016年1月12日		

活動内容

2013年3月、岡崎森林組合のアイドル樋口奈央さんの寿退職送別会で「いっぺんやるか」と一度こっきりのメモリアルバンドを急ぎよ結成して「奈央ちゃんに捧げる歌」を演奏したのがきっかけ。反応がよかったのでついその気になってしまって今まで続いている。

リーダーは南條清二さん(55歳)で作詞作曲、ボーカルとギター、ドラムは白井亮一さん、島田傭平さんがパーカッション、マンドリンは中村健太さん、ベースは甲田悠太さん、この4人は30代、紅一点はキーボードの塚本実並さん24歳、新人。全員現役または元岡崎森林組合職員で特殊伐採もこなすバリバリのきこりたち。リーダーは世界を回り仕事を変えながら現職で17年目。自宅もセルフビルドで額田の木で建ててしまった。メンバーの経歴も華々しく多彩で多才。元公務員や建築士、塚本さんは福祉から進路変更。昨年までのメンバー松ちゃんはタイに行ってしまった。山の自然や山仕事、山里暮らしの日常を明るく歌うライブを各地で展開中。

去年はイベントなどで11回公演、どこでも良く受ける。特に同業者に思いが通じる。

キャッチフレーズ

岡森フォレストーズの音楽は、山で強く伸びる桧、まっすぐ育つ杉、愉しく暮らすカメシだ！

会のモットー(何を大切にしているか)

山にこだわり村がらみの歌作りをしている。「山仕事も村暮らしも捨てたもんじゃないぞ、いいもんだぞ！」とメッセージを発信していきたい。明るさと生活感を大事にしている。

設立から現在に至るまで変化したこと

4人でやっていたが1人がタイへ行ってしまって1名減ったら、イケメン2人と美女1名増えた。ビジュアル的にも音にも厚みが出て華やかになった。

連携している団体・専門家・自治体など

豊橋のライブハウス「ハウス・オブ・クレージー」、岡崎森林組合、額田ふるさと祭り、岡崎市民祭り、FMおかざき

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

矢作川森の健康診断報告会や地域の結婚式、豊田いなかとまちの文化祭、などのイベントを盛り上げている。

現在直面している課題

オリジナル持ち歌は16曲あるが、全員で演奏できるのは6曲かな？もう少し増やさねば。練習は岡崎森林組合で、月に一度は豊橋のライブハウスで演奏。出演が近づくと一生懸命練習する、それがないとあまりやらない？

今後やってみたいこと

6人で演奏できる持ち歌と出演・公演機会を増やしていきたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

いろんなイベントに声をかけてください。

チームオリジナルの質問

<質問内容>エピソードを教えてください。

<答え>①手ぬぐいと地下足袋のいつものスタイルで路上ライブを豊橋でやったら、観客がやたら遠巻きになっていた、怖かったのかな？

②公演中南條がMCをやっていたら、オジサマが急に出てきて「君たちの歌は日常を歌っているからとても面白い」と言っておひねりをくれた。3000円入っていた。

その他、伝えたいこと

●眞木宏哉組合長談:

「山を愛し山で生きているものでないと出てこない、そんな言葉で綴られているのがいい。」

「しんどい仕事の中でも、楽しくやろうぜというソウルがピンピン伝わる」

「われら岡森の元気の源、誇りだ。テーマソングなんかそのまま組合の歌にしたい！」

●塚本実並さん談:

「岡森フォレストーズの一番好きなところ？南條さんのMC！

好きな歌ベストスリーは、①すてきな山ガール②山の神に感謝③カメムシの歌」

●歌詞抜粋

♪♪～岡森フォレストーズのテーマ～

山の斜面で転がり落ちて／立ち上がった時ふとひらめいた／川の源流は山の奥にあると／ならば俺たち最初の1滴になろう／

ギターぶら下げ、ジャンベかかえて山から下りてきた男達／少し調子の外れた演奏だけど／岩の間から湧き出したような／おかもりフォレストーズ

長生きの秘訣を教えましょう／やまで桜を育ててみましょう／何年もかかる大変な仕事／でもそのうち見上げるような長い木／

山の力を教えましょう／コンビニなければ自販機もない／とても不自由に思えますが満天の星空／

電気はないけど元気が出る／伐り株に腰おろし耳澄ませば／ほら聞こえてくる鳥のさえずり 男達の歌

* YOUTUBEで視聴できます→<https://www.youtube.com/watch?v=-MHQ9UJbDec>

♪♪～すてきな山ガール～

退屈なこの町いつも思っていたけれど／まんざら捨てたもんじゃない僕の住む町は／

曲がりくねった細い道も傾いたカーブミラーも／それぞれに愛着がある僕の仲間だ／

それに山がある山がある素敵な山がある／緑いっぱい溢れる楽しい山がある／

山ガール山ガール素敵な山ガール／

こんにちわと声かして振り返ったその瞬間に／僕の恋の風船は一気に膨らんだ／

こんな素敵な山がある町に私も住んでみたいとマジに言うので／

僕の風船ますます膨らんで飛行船になった／

ついに現れた僕の太陽 素敵な山ガール／笑顔いっぱい溢れる いとしの山ガール (後略)

* YOUTUBEで視聴できます→https://www.youtube.com/watch?v=UM_lepZtlLU

とにかく山が好きで、山仕事を愛し、山里暮らしを楽しむきこりミュージシャンたち、拍手！！

写真



岡森フォレストーズオールキャスト(左から、甲田、島田、南條、白井、中村、塚本、裏方さん)



南條清二さんの演奏と定番衣装



今夜は盛り上がるぜー！

← 矢作川森の健康診断報告会(2014.10.26)

↙ ↓ いなかとまちの文化祭(2015.12.6)
(撮影:久野ゆか氏)



「クサイクサイクサイ！カMEMシ♪」



蒲郡市漁場環境保全協議会

調査団体名 : 蒲郡市漁場環境保全協議会
 設立年 : 2009年5月
 団体URL : <http://www.hitoumi.jp/torikumi/aichi/2179.php>
 活動拠点 : 蒲郡市
 取材日 : 2015年12月3日

団体代表者名 : 伊藤幸昌(蒲郡漁業協同組合部長)
 対応してくれた人の名前 : 伊藤幸昌
 調査員 : 井上祥一郎、浅田益章
 レポート作成者 : 井上祥一郎(推敲)、浅田益章(作成)

活動内容

太平洋の波風をまともに受け止める三河湾の中央部に漁港がある。蒲郡漁業協同組合には竹島支所、形原支所、西浦支所があり、今回は形原支所(事務局)でお話を伺った。蒲郡市漁場環境保全協議会は漁業者、蒲郡漁協、三谷漁協、三谷水産高校、西浦小学校のメンバーで活動をしている。代表者の伊藤様に今昔と未来にかけのお話をお聴きした。主な活動は、(1)藻場の保全 (2)干潟等の保全 (3)漁村の文化を伝える活動である。

キャッチフレーズ

「なぎさはうみのゆりかご。なぎさは人と海との共生の場」

会のモットー(何を大切にしているか)

「藻場は多くの生き物を育てて、環境を守っています。」

また、蒲郡市漁場環境保全協議会が参加している「三河湾環境再生プロジェクト」(愛知県)では「よみがえれ！生きもの」の里“三河湾”を掲げて活動をしている。

設立から現在に至るまで変化したこと

協議会設立前から蒲郡漁協青年部のみなさんは、失われた藻場と干潟の再生に取り組んでいた。三河湾の漁獲量が激減していたからである。人工干潟が造成された1998年から2012年ごろにアマモの移植にチャレンジする。アマモを固定する方法もわからず試行錯誤を繰り返した。協議会設立によって民間会社や三谷水産高校、漁協の漁業者、職員が参加し大いに技術を高めた。今では地元の小学生も種まき作業に参加して体験を重ねている。

連携している団体・専門家・自治体など

- ① 三河湾環境再生プロジェクト推進委員会(学識経験者、NPO、漁業、流通、観光、レジャー関係者、愛知県顧問)
- ② 蒲郡市 農林水産課
- ③ 愛知県 環境部など

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

アマモ(甘藻)再生事業の推進

アマモとは、藻ではなく、海草である。花を咲かせ、実を結び、種子によって繁殖する植物で、生育したアマモは沿岸海域の汚染源を吸収分解し、水質を浄化する。アマモ場は魚介類の成育・産卵の場となる。

- ① アマモ種子の確保(漁業者が天然アマモ場より花枝、種子採取)
- ② 再生場所の調査(専門会社による水深調査)
- ③ 再生基盤「ソステラマット」の敷設(多数の漁業者参加)

現在直面している課題

- ① アマモ場の確保。(三河湾中央にある蒲郡漁協付近の海岸は太平洋からの波により砂の流失にさらされている。)
- ② 若手漁業者の育成。(蒲郡漁協は主に底引き網漁業である。三河湾内と沖合が漁場であるが漁業資源は年々減少している。魅力ある漁業により、地域ぐるみで若い漁業者を確保育てたい。)

今後やってみたいこと

①アマモ場の拡大と漁業資源の増殖:

アマモの草原は魚介類の産卵・育成の場となっている。増殖のためにワタリガニの放流。アサリ天敵ツメタガイの抑制と有効利用のレシピづくり。地場漁業資源を活用した観光・レジャー、暮らし方など地域の輪を広げたい。

②若手漁業従事者に魅力ある漁場づくりと漁業経営:

三河湾は豊富で多様な魚介類が育っている。地産地消の漁業資源を生かした付加価値の高い漁業に挑戦する。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

今は昔のように資源豊かな海に戻りつつある。蒲郡の漁業はこれから。若手の育成も、これからの課題である。漁師は苦勞することも多いけど、質の良いものが獲れる。蒲郡の漁業は魅力いっぱいである。

愛知県が主導する「三河湾環境再生プロジェクト」活動は産官学民の有益な情報、知恵が期待できる。

①都会と地域の交流:

情報:伊勢三河湾流域圏全体からみた蒲郡漁協の価値の再発見、ニーズの入手(第6次産業の視点)

②三河湾全体の理解共有。豊川河口の六条潟で生まれたアサリの回遊。矢作川の清流の三河湾水質の改善など。

チームオリジナルの質問

蒲郡市には大きな川が無い。漁場を豊かにするには背後の山からミネラルなどを運ぶ川が必要ではないでしょうか。(答え)

蒲郡市には大きな川はないけど小さな川がたくさんある。それらを通して、町や里山の栄養分が流れていると思う。また、豊川、矢作川の大きな川からほぼ等距離にある蒲郡漁協(竹島、形原、西浦支所)はアサリなど有名である。それらは三河湾全体の閉鎖系海域の恵みとして漁場を豊かにしている。

もっとも、アサリは六条潟からとってきたものも放流している。訪れるたくさんの潮干狩りのお客様の要求に足りる量と質を確保するため。六条潟のおかげである。

チームオリジナルの質問

<質問内容>蒲郡の名産。メヒカリについて。初めて聞く魚ですがどんな魚ですか。(漁港内市場で)

<答え>

蒲郡漁協でたくさん水揚げされる「アオメエソ通称目光」です。深海性の魚でキスぐらいの大きさ。この魚の名前は字のごとく目が光輝いているからです。この魚は太平洋側の沖合いに広く生息しています。白身で脂がのっている。大きいサイズは、刺身・開きにして天ぷら又は干物にすると美味です。これからは、この魚を「蒲郡メヒカリ」としてピーアールしてゆく所存です。

取材者からのひとこと

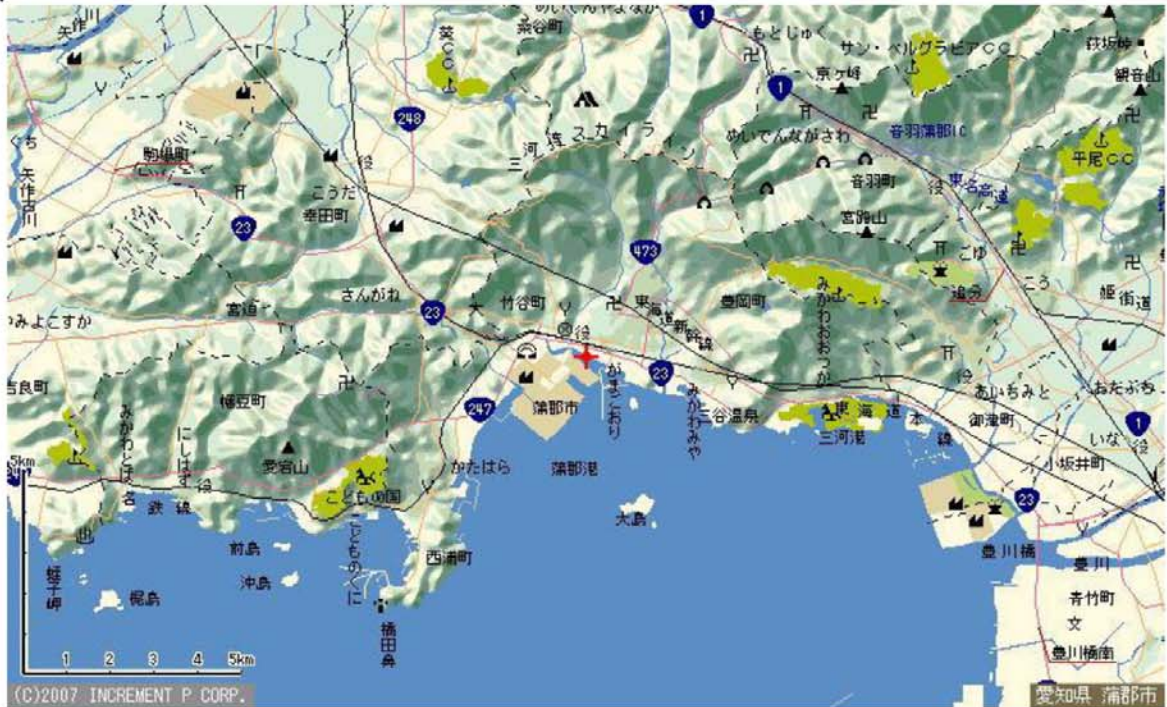
蒲郡市には温泉の観光名所が多い。三谷温泉、蒲郡温泉、形原温泉、西浦温泉。そして、ラグーナ。三河湾の海の幸がいただけるのは嬉しい。今回はゆっくりと味見はできなかったのでまた来たい。できれば、潮干狩り、人工干潟、アオモの茂る頃。海のお花畑を体験したい。

蒲郡漁協には三河湾の漁場を守りたいという強い熱意がある。観光地を控えるこの地域の三河湾の景観と漁業資源は大事な宝である。運命共同体と言える。喜んで漁業を継ぎたいという若者が増えることを祈念します。

アオモの藻場はびっしりと密集するだけでなく、ゆったりと点々と広がる藻場が良いとのこと。そこに住む魚たちがゆったりと産卵、生育するにはゆとりが大事ということを教えてください。(矢作川流域圏海部会で学びました。)

人も魚も共存共栄。それがこの三河湾ではできないのではないかと心強く思いました。幸いに矢作川流域懇談会、海部会のメンバーは三河湾環境再生プロジェクトにタッチしている有識者が多く。連携することで矢作川流域圏も良くなっていけると確信しました。矢作川とは河口、小川、道路、地下水脈、地域を通してつながっている。

写真



蒲郡市漁場環境保全協議会のお話を形原支所でお聞きした。三河湾の中央部蒲郡市の海岸沿いにある。右には豊川河口とその周辺の六条潟まで20km。あさりのアサリの稚貝を生み育てる場所。左には矢作川がある。国道23号線で行くと形原支所から20kmの距離。2つの川に挟まれたところにある。背後は山並み三ヶ根山があり、この漁場に大きな川はない。



① 拠点の蒲郡漁業協同組合 形原支所



② 表彰状。漁場環境保全活動。豊かな海づくり大会会長より



③ 漁港内市場。大漁旗と名産地魚販売



④ アマ藻の種取り



⑤ 再生したアマ場に稚魚が住む



⑥ 蒲郡メヒカリ 絶品。から揚げ最高。上品な味

島を美しくつくる会

調査団体名 : 島を美しくつくる会
 設立年 : 1996年
 団体URL : <http://www.sakushima.com/island/tsukurukai/index.php>
 活動拠点 : 西尾市 佐久島
 取材日 : 2015年12月 1-2日

団体代表者名 : 鈴木喜代司(会長)
 対応してくれた人の名前 : 鈴木会長、筒井副会長、杉山振興室主査
 調査員 : 井上祥一郎、浅田益章
 レポート作成者 : 井上祥一郎(推敲)、浅田益章(作成)

活動内容

「佐久島は何もないところ」。島の人はこう思っていたようだ。島の豊かな自然や景観はあたりまえのこととして気付いていなかった。島を訪れた人によって島の魅力を知らされることとなった。ならば、もっと美しい島をつつきたい。ありのままに美しくあれ。お話をいただいたみなさんからそういう思いが伝わってきた。それが実践されている島である。島を美しくつくる会とは島民および島を愛する人々の自主活動である。島民全員が会員である。4つの分科会がある。「ひと里分科会」、「漁師分科会」、「美食分科会」、「いにしえ分科会」。そのほかにさまざまな活動がある。

キャッチフレーズ

なんにもない島。自然のままとアートに癒される美しい島。

会のモットー(何を大切にしているか)

近代化の波にもまれることなくスローライフができるアートと自然があること。

設立から現在に至るまで変化したこと

設立2年後(1996年設立)、アートで島づくりに挑戦していた時。島民になじみのない現代アートを若者にまかせよう！島民漁師には思いつかない発想であった。島外の人の参加や佐久島を応援する人が多くなって今や全国的に訪れたいという人気の島である。

島めぐりをゆっくりとできる佐久島アートピクニック(島中に22カ所に作品)など、落ち着いた癒しの島である。

連携している団体・専門家・自治体など

- ①西尾市役所には「佐久島振興課」がある。佐久島についての広報担当窓口となっている。(今回の取材窓口)
- ②島民全員が会員(250名)であり、島外の応援ボランティアの方も多い。特定の企業や組織とのつながりよりも多様な個人、その道の専門家のつながりや連携が感じられる。マスコミの取材、新聞掲載多い。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

4つの分科会で多くの活動がされている。今回わずかな時間で現地現物を見て印象的だったことを紹介する。

- ①島外の訪問客がくつろいで佐久島の歴史を知ることができる弁天サロン(西港)。島民の集会の場でもある。
- ②小学生などが花植えをして育てている島の花壇は美しい活動である。未来につながる。
- ③佐久島の弁天様(島の中央の筒島にある)願掛けの「願い石」島の有志がここまで立派に整備したことに感銘。佐久島はいにしえからの古墳があり先進のアート造形形である。島全体がパワースポットといえる。

現在直面している課題

- ①漁業後継者問題: 島民漁師の高齢化や漁業経営の不安定性から新規漁業就業者の定住促進の環境整備が必要。
- ②伊勢三河湾の漁場環境の悪化、漁業資源の減少。基本となる漁業あつての佐久島である。豊かな海の幸を守ることが美しい島づくりに欠かせない。

今後やってみたいこと

- ①本当に島に来たい人が作る佐久島にしたい。
大手資本による島の観光化でなく、自然と人工のアートが調和して美しい島としたい。
今やっていることを地道に積み重ねることが島民のため、佐久島に来たい人のためになる。
- ②島への来訪者を平準化できればいい。土日曜日が多く、平日は少ない。4月―11月は多く、12月―3月は少ない。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ①行政と仲良くやっているところは少ない。西尾市と佐久島は町村合併以降役割分担を決めて、いい仕事と関係作りができている。今後も西尾市役所を窓口として佐久島の振興を図ってゆきたい。
マスコミ情報発信、広報など西尾市役所振興課を設けてやっていただいている。
- ②佐久島にある美しい景色、アート、海の幸など。佐久島に訪れるリピーターの方々。平日やシーズンオフの時期に来て喜ばれるような「美しい島づくり」の島民の活動、島外の応援者を増やしてゆきたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

島内でよく猫を見かけますが多いいですか？

<答え>

黒猫、ぶち、茶色の猫が多い。ひなたぼっこしている猫。猫は自給自足している。
漁港には猫が多いそうです。猫の写真で有名な動物写真家の岩合光昭さんが佐久島に8月に来て、猫を撮影して名古屋で写真展を行いました。佐久島の猫はアートです。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

去年は佐久島の「Oyaoya cafeもんぺまるけ」取材し、事例集に載せました。私もお邪魔しましたがいいお店ですね。？

<答え>

もんぺまるけの神谷さんも「美しい島をつくる会」の会員、リーダーです。島外からの定住者ですがいろいろと工夫して島のお店の魅力づくりをしている。佐久島を見つけて移住を決めた。やりたいことを自由にできる生き方。

取材者からのひとこと

取材の日は、一色港から渡船で佐久島西港に着いた。井上さんと二人で歩いて近くにある弁天サロンでお話を聞きました。そこに、関東方面から見えたという女性の方が見えました。一緒に話を聞きたいようでしたが遠慮して出かけたようでした。

取材と島内案内を終えて宿のさざ波さんへ落ち着いたら、その女性が宿泊してた。三日ほど島に居てあちこち歩き訪ねるとのこと。この島には、そんな多くのポイントがあるのかと驚いた。一つひとつの箇所が味わいあるのだろう。癒しの島であることを実感した。

所詮、一泊の取材では十分に「美しい島をつくる会」を知り得ない。島の魅力でもある。私も来ようと思った。これからのんびりと何回も。平日やシーズンオフの時期にも来たい。なごや大府から本当に近い所である。

幸いに私の友人が黒壁集落を越えた石垣古墳近くの森の中に一人暮らしの別荘を建てて定年後の生活を楽んでいる。気の合った友人と「何にもない島」で話し明かすのも楽しみです。

佐久島は矢作川流域圏の海の天国。ここから矢作川源流の根羽村のことや矢作川流域圏の人たちのなりわいや伝統文化のことを思い浮かべました。伊勢三河湾流域圏に住む幸せを感じた佐久島でした。

写真



① 西港 弁天サロンでお話を聞きました。



② 佐久島アートピクニック。癒しの島めぐり



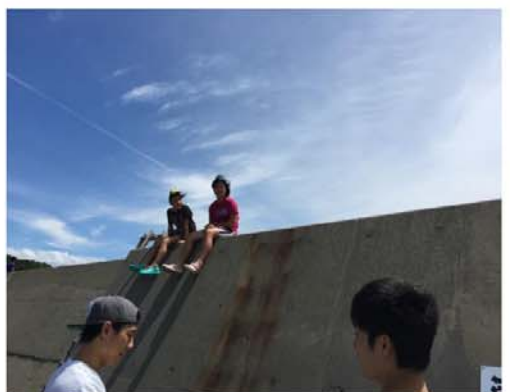
③ 願い石奉納の弁財天(筒島を訪ねる)



④ 願い石に思いを込めて。また来たい。



⑤ 佐久島には猫が多い。宿泊宿のポスター



⑥ 佐久島の子供達。島が大好きと笑う。



⑦ 石垣古墳。いにしへの歴史ある島。



⑧ もんぺまるけ。島を美しくつくる会の会員。

(写真注;①-⑤は2015年12月1日撮影。⑥-⑧は2015年6月27日撮影しました。(浅田)

取材者名

浅田益章

石原 淳(アジア航測)

井上祥一郎(伊勢・三河湾流域ネットワーク)

井上崇也(岡崎市役所)

今村 豊(根羽村森林組合)

宇野利幸(国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所)

大森正昭(国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所)

沖 章枝(水と緑を守る会・岡崎)

桑淳(国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所)

近藤 朗(愛知・川の会)

Siti Norbaizura Binti Md. Rejab(中部ESD拠点)

清水雅子(愛知・川の会)

洲崎燈子(豊田市矢作川研究所)

高橋伸夫(西三河野鳥の会)

田中五月(一般社団法人 ClearWaterProject)

丹羽健司(地域再生機構)

浜口美穂(ライター)

松井賢子

溝口裕太(名古屋大学大学院)

吉橋久美子(豊田市矢作川研究所)

(五十音順)

表紙デザイン・こいけやクリエイト

(余 白)

2. 森づくりガイドラインについて
平成27年度 豊田市森林行政関係施策

1 平成27年度の予定数量

項目	予定数量		第2次基本計画との比較	
	27年度(a)	26年度との比較	H27計画値(b)	比率(a/b)
間伐事業量※1	1,117ha	▲51ha	1,600ha	70%
市関連(補助、市有林)	502ha	▲51ha	950ha	53%
あいち森と緑づくり事業	415ha		415ha	
治山(保安林)	200ha		200ha	
森づくり団地面積	1,200ha	0ha	1,200ha	100%
路網	14,969m	▲3,770m	25,000m	60%
林道(林業専用道含む)	1,961m※2	▲478m	3,000m	65%
作業道(中核作業道含む)	3,835m	35m	7,000m	55%
搬出路	9,173m	▲3,327m	15,000m	61%

※1 間伐事業量は、県有林、公社等を除く、第2次基本計画の対象面積における間伐面積である。

間伐事業量のうち、あいち森と緑づくり事業と治山(保安林)事業は、愛知県が執行する事業。

※2 県代行林道 平成27年度分(799m)を含む。

2 主な事業(継続)

- ① **間伐促進プロジェクト関連** ・市が予算で関係する間伐面積・・・502ha
- ② **団地化促進プロジェクト関連** ・団地計画樹立面積・・・1,200ha
- ③ **林業労働力確保プロジェクト関連** ・団地化推進員・・・8名分
・とよた森林学校…人材育成コース
- ④ **林業用路網整備プロジェクト関連** ・整備延長・・・14,969m
- ⑤ **素材生産の効率化・低コスト化プロジェクト関連** ・高性能林業機械導入補助・・・2台
- ⑥ **木材利用促進プロジェクト関連** ・地域材需要促進の啓発活動等

3 主な事業(新規)

- ①地域材加工流通体制整備
- ②水源かん養機能モニタリング調査
- ③水道水源林間伐促進費補助金
- ④森づくり構想リニューアルプロジェクト
・人工林現況調査業務、優良事例調査
- ⑤とよた森林学校開校10周年記念イベント

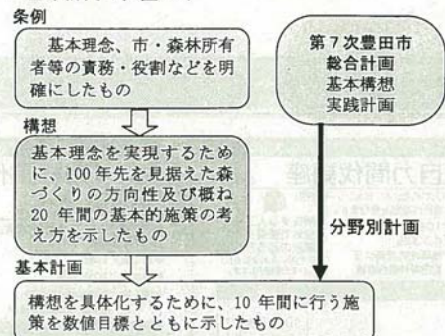
第2次豊田市森づくり基本計画（概要版）

■豊田市森づくり基本計画について

豊田市は、「豊田市森づくり条例」（以下「条例」という。）第17条に基づき、「豊田市100年の森づくり構想」（以下「構想」という。）を平成19年3月に策定しました。続いて、この構想の実現に向けて平成19年10月、おおむね10年間に亘る具体的な施策をまとめた「豊田市森づくり基本計画」（以下「第1次基本計画」という。）を策定しました。（条例第18条。）

条例では5年ごとに計画を見直すものとしており（条例第18条第2項）、第1次基本計画策定から5年を経過するにあたり、内容を見直し、「第2次豊田市森づくり基本計画」（以下「第2次基本計画」という。）を策定するものです。

□基本計画の位置づけ

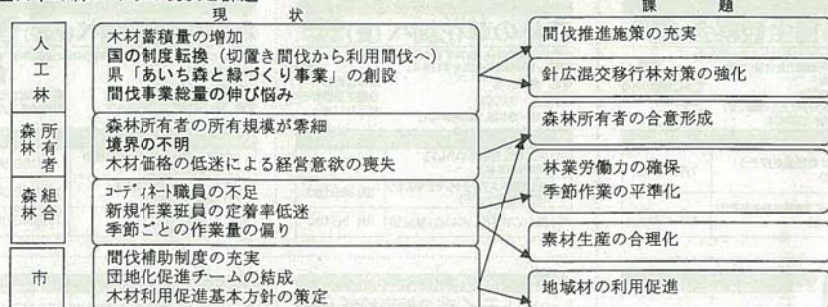


<100年の森づくり構想>

森林区分とそれぞれの施策方針に基づき、間伐の推進により平成39年度末までに過密人工林を一掃して、森林が本来持っている公的機能を十分に発揮することを目標と定めています。これにより、林業が成立するとすると、そうでないところを区分し、それぞれ「林業経営林」と「針広混交林」に誘導します。



■豊田市の森づくりの現状と課題



<改正の背景>

市は第1次基本計画に基づき、10年間で25,000haの間伐実施を達成すべく、手厚い間伐補助制度の創設、森林組合職員「緑のコーディネーター」への助成、森林課と森林組合との連携による団地化促進チームの活動など、様々な施策を実施してきました。しかし、平成20年度から4年間の間伐実績は計画値に対し72%であり、今後更に計画量との乖離が広がる可能性があることが分かってきました。

その内容を課題として検討したところ、第1次基本計画では、市内のスギ・ヒノキの人工林面積約30,000haを間伐推進計画の対象としており、市の意向だけで、間伐事業地の拡大に繋がらない県有林や県農林公社等が管理する人工林と、間伐の必要がない高齢級の人工林が含まれていること、平成21年12月には国が「森林・林業再生プラン」を発表し、これまで切置き間伐中心の政策から事業地の集約化と利用間伐中心の政策に転換されてきたことなどが影響していると考えられます。また、県による「あいち森と緑づくり事業」が平成21年から事業化され、作業性の悪い森林を強度間伐する施策を導入しており、市の間伐促進事業との整合をはかる必要がでてきました。

このような状況の中で、現実に即して実行可能な施策となるように本計画を策定しました。

切り替え時代 → 利用時代

■基本計画の目標

構想の目標である平成39年度末までに過密人工林を一掃するために平成25年度から平成34年度の10年間で第2次計画期間とし、基盤整備（体制づくり、人材育成、林業用路網整備等）を進めるとともに、森林区分に従って、間伐を強力に推進することにより、計画対象人工林のうち健全化する人工林の占める割合を平成29年度末までに68%に高めようとして、平成34年度末には80%に高めます。

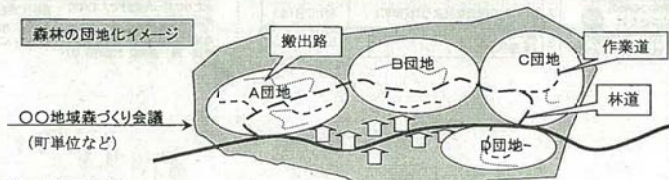
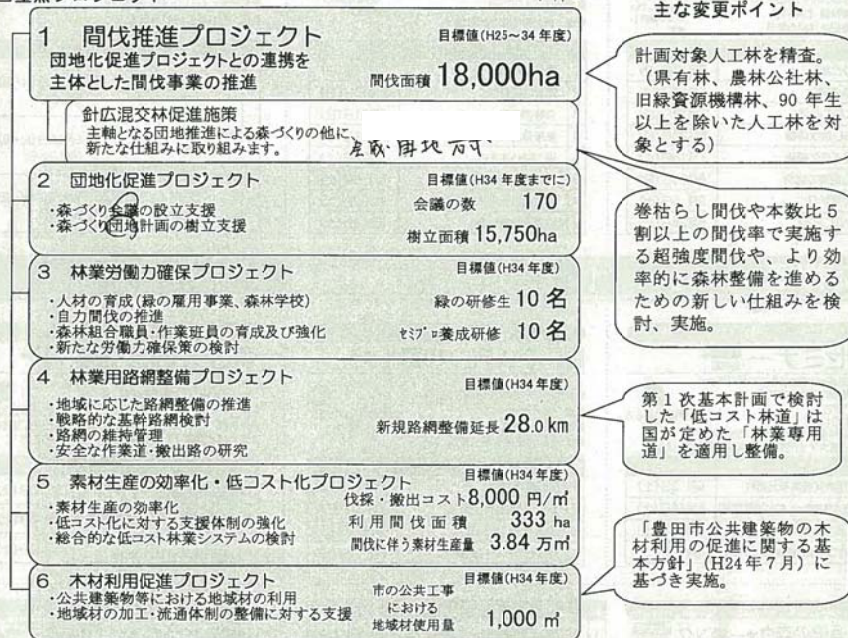
■基本的施策

豊田市内30,000haのスギ・ヒノキ人工林のうち、市の事業施策の及ばない人工林、間伐の必要ない人工林を除いた25,000haを計画対象人工林とします。このうち、21,000haについては、第2次基本計画期間において18,000haの間伐を実施します。また、残る4,000haについては、針広混交林への誘導を加速する施策として、巻枯らしや新たな森林整備の方法を検討しながら森林の健全化を図っていきます。

■具体的施策

現状と課題から、構想を実現化させるため、6つの重点プロジェクトを重点的に実施することとしました。

□重点プロジェクト



□その他の主要な施策

森林の現況把握に関する施策／木材以外の森林資源の活用に関する施策／よた森林学校に関する施策／山村地域の活性化と文化の伝承に関する施策／NPO・森林ボランティア等との共働による森づくりに関する施策／事業評価に関する施策 等

山主さん、森についてちゃんと学んでみませんか?

楽しい山づくり入門講座 (全8回)

所有している山林をどのように管理したらよいか、そのノウハウを学びます。
 ●定員/10名
 ●参加費/8,000円(別途第5回の材料費)
 ●講師/森林課 北岡明彦
 ●監修/豊田森林組合職員

森林所有者
 ※市内に森林を所有している方を優先します。

回	内容	開催日
1	森林の仕組み	5月 3日(日)
2	間伐の必要性	5月17日(日)
3	山づくりの心得	6月14日(日)
4	豊枯らし間伐体験	6月28日(日)
5	原木マイタケ栽培	7月18日(土)
6	集約化施策の実例	8月23日(日)
7	持ち山見学会	9月 5日(土)
8	楽しい山づくり	9月26日(土)

一緒に森林観察会を開きませんか?

森林観察リーダー入門講座 (全8回)

森林自然観察活動のリーダーとして必要な知識を実践的に学びます。
 ●定員/10名
 ●参加費/8,000円
 ●講師/森林課 北岡明彦

観察会への参加経験のある方

回	内容	開催日
1	森林の仕組み	5月 3日(日)
2	間伐の必要性	5月17日(日)
3	森林の植物	5月31日(日)
4	東海地方特有の植物	6月21日(日)
5	森で暮らす昆虫	7月25日(土)
6	森林観察会の運営方法	8月 8日(土)
7	森林観察会の模擬体験	8月29日(土)
8	模擬森林観察会	9月19日(土)

チェンソーを使った安全な間伐方法を覚えよう!

間伐ボランティア初級講座 (2泊3日)

間伐の理論とチェンソーを使用した安全な作業の方法を学びます。
 ●定員/20名
 ●参加費/10,000円(別途宿泊費)
 ●講師/豊田森林組合職員 ほか

人工林の間伐に興味のある方

回	内容	開催日
1		9月21日(月・祝) 敬老の日
2	森林塾 (間伐研修 2泊3日)	9月22日(火・祝) 国民の休日
3		9月23日(水・祝) 秋分の日

山主さんが、安全に自分の山を間伐しましょう!

山主自力間伐講座 (全4回)

所有林の手入れのために、チェンソーを使用した安全な間伐作業等を学びます。
 ●定員/10名
 ●参加費/4,000円
 ●講師/指導員 安藤久氏
 ●監修/豊田森林組合職員

所有する人工林を自分で整備する意欲のある方
 ※市内に森林を所有している方を優先します。

回	内容	開催日
1		10月 3日(土)
2	間伐研修	10月 4日(日)
3		10月24日(土)
4		10月25日(日)

森林作業を仕事として学びたい方へ!

セミプロ林業作業者養成講座 (全10回)

林業就業を視野に入れ、間伐作業に必要な知識や技術を学びます。
 ●定員/10名
 ●参加費/10,000円
 ●講師/豊田森林組合職員
 ●監修/森林課 北岡明彦 ほか

林業に就業するための技術を身に付けたい方



回	内容	開催日
1	間伐の必要性	10月31日(土)
2	道具の紹介と使い方	11月15日(日)
3		11月29日(日)
4		12月 6日(日)
5		12月13日(日)
6	間伐研修	12月20日(日)
7		平成28年 1月10日(日)
8		1月17日(日)
9		1月24日(日)
10	豊田市の山づくり	2月 7日(日)

このマークが付いている講座は、市内の集合場所からマイカーのみで参加します。
 ※集合場所を決定できず、受講者にお知らせします。

森林学入門コース 初めての方におすすめ!

森林セミナー (全4回)

森林の自然環境や、過去と現在の状況等から、今後の森林管理のあり方を考えます。
 ●定員/40名
 ●参加費/2,000円
 ●講師/森林課 北岡明彦 ほか

森林に興味のある方

回	内容	開催日
1	森林の自然(旭高原元気村)	5月 2日(土)
2	ブナの巨木林ウォーキング(飯沼原)	5月16日(土)
3	空から森林観察しよう(香蓮湖)	5月30日(土)
4	森林の持つ公益的機能(東大瀬原林)	6月13日(土)

間伐材の活用方法を学びます

間伐してベンチをつくり寄付しよう (全4回)

人工林の間伐材と、木材からベンチができるまでの全工程を自分たちで行い、完成品を公共施設に寄付します。
 ●定員/10名
 ●参加費/4,000円
 ●講師/豊田森林組合職員 ほか

森林や木材利用に興味のある方

回	内容	開催日
1	間伐と出材	5月10日(日)
2	製材(簡易製材機講習)	9月27日(日)
3	墨入れ・切断・組立て	10月11日(日)
4	仕上げ(ヤスリ・塗装)	11月 1日(日)

森と人が紡いだ道を巡ろう

森と人の文化史 (全3回)

豊田市の森づくりの歴史やモデル林を見て、これからの山づくりを考えます。
 ●定員/20名
 ●参加費/3,000円(別途第3回の交通費)
 ●講師/森林課 鈴木春彦 ほか

森林や地域の歴史に興味のある方

回	内容	開催日
1	修羅(しやら)で木を運んでみよう (御内市有林)	5月23日(土)
2	木を運んだ「川の道」を巡ろう (百々野木場ほか)	6月 6日(土)
3	木曾に「牛の美林と森林鉄道」 (長野県赤沢自然体験林)	6月20日(土)

自然の楽しさを満喫しよう

夏休み昆虫観察会 (全2回)

森林にすむいろいろな昆虫たちの生活を過ごし、自然の楽しさや不思議さを体験します。
 ●定員/20名
 ●参加費/2,000円
 (大人も子どもも同様です)
 ●講師/森林課 北岡明彦

昆虫に興味のある親子など
 ※小学生以上

回	内容	開催日
1	ブナ林にすむ昆虫を探そう! (面の木峠)	7月26日(日)
2	きれいな水にすむ生き物を探そう! (御内市有林)	8月 9日(日)

これから草花の名前を見たい方におすすめ!

森林の草花調べ(夏) (全3回)

矢作川流域の森林に生育する草花を現地専門的に観察し、草本植物の見方を学びます。
 ●定員/20名
 ●参加費/3,000円
 ●講師/森林課 北岡明彦 ほか

草本植物の分類を基礎から見たい方

回	内容	開催日
1	人工林にも草花はいる (御内市有林)	8月12日(水)
2	野生植物ミヤマツチノモチを探そう (死木村アデヒ平)	8月26日(水)
3	低山にも草花はいる(標取山)	9月 9日(水)

垂直分布の不思議さを体験しよう

森林の不思議調べ(その2) (全3回)

帯層によって森林や植物の種類が変わることを観察します。
 ●定員/20名
 ●参加費/3,000円
 ●講師/森林課 北岡明彦 ほか

森林の成立に興味のある方

回	内容	開催日
1	クロベ・ウラボシモミ林の観察 (赤木村アデヒ平)	9月15日(火)
2	ブナ・ミズナラ林の観察 (稲武町面の木峠)	10月 6日(火)
3	シイ・カシ林の観察 (広輪町八幡宮)	10月20日(火)

平日に矢作川流域の森と出会うチャンス

矢作川源流の森ウォーキング (全3回)

源流の森を歩きながら動物を観察し、清流の森の様子を知る機会です。約40分程度の山歩きです。
 ●定員/20名
 ●参加費/3,000円
 ●講師/森林課 北岡明彦 ほか

森林に興味があり、登山山主の方

回	内容	開催日
1	豊田市最高地点をウォーキング(稲武町)	5月13日(水)
2	岩伏山で源流を見よう(設楽町)	5月27日(水)
3	瀬戸との境、折平山をウォーキング(北豊木町)	6月10日(水)

山に行くと森の手入れをしてみよう!

レットトライ 木こり体験 (全2回)

木こりになった気分人工林の間伐体験をします。
 ●定員/20名
 ●参加費/2,000円(大人も子どもも同様です)
 ●講師/森林課 北岡明彦 ほか

森林での活動に興味のある方
 及び親子 ※小学生以上

回	内容	開催日
1	豊枯らし間伐を体験してみよう	8月 1日(土)
2	手ノコ間伐を体験してみよう	8月22日(土)

NEW! 夏の健康診断 森林学校

レットトライ 森の健康診断 (全3回)

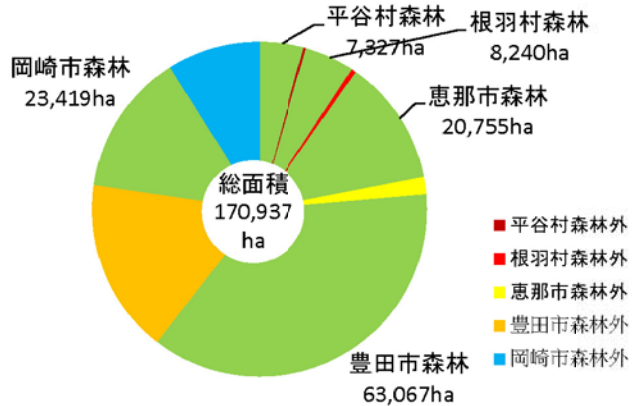
間伐をしないと人工林はどうなるのか考えよう。
 ●定員/20名
 ●参加費/3,000円
 ●講師/森林課 北岡明彦 ほか

森林に興味のある方

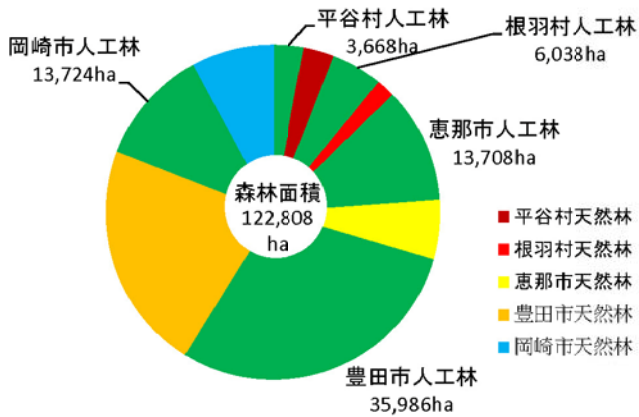
回	内容	開催日
1	適正間伐人工林の健康診断(木湖市有林)	10月11日(日)
2	間伐の遅れた人工林の健康診断(三ツツ市有林)	10月25日(日)
3	東海豪雨の被災跡地の回復調べ	11月15日(日)

データでみる 矢作川流域の森

★矢作川流域の72%は森林です。流域の森林に降る雨が集まって矢作川の水の流れになります。森林面積は1970～2000年の30年間でほとんど変化していません。

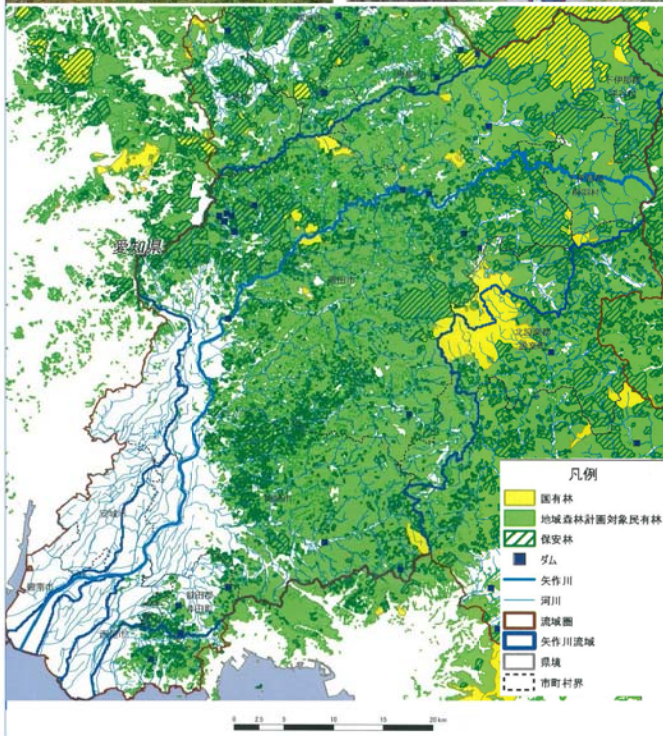


★矢作川流域の森林のうち59%が人工林です。人工林面積は1970～2000年の30年間で1.2倍に拡大しました。



2000年世界農林業センサスより、洲崎燈子氏のデータによる

矢作川流域の森



矢作川流域の森づくり

★矢作川流域の市の森づくり計画

☆岡崎市： 2040年までの30年間に、放置人工林5,000haをゼロに、総間伐実施量12,500haに。100年後には、人工林率を60%から40%に。人工林の1/3は天然林化する

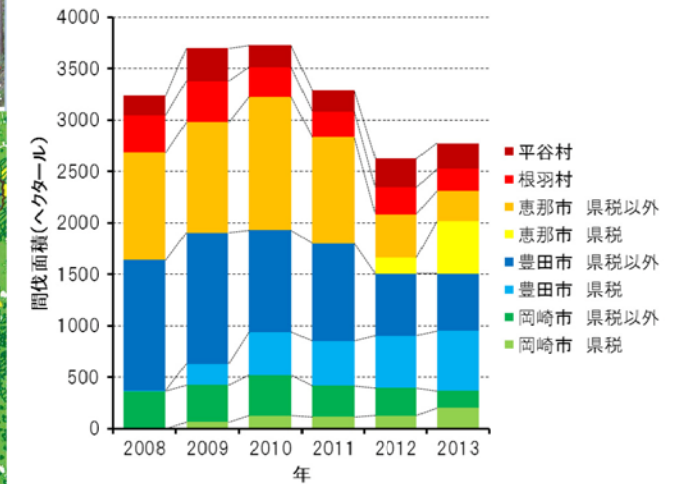
☆豊田市： 2027年までの20年間に、過密人工林20,000haをゼロにする。100年後には、人工林率を50%から25～35%に。人工林の半分～3割を天然林化する

☆恵那市： 2015年までの6年間に、過密人工林6,900haを間伐

★過去6年間の間伐面積の実績

2010年をピークに減少傾向。2009年に民主党政権の「森林・林業再生プラン」により、国庫補助金をもらうには搬出が義務付けられたため、面積が減少した。

愛知県、岐阜県では森林環境税による所有者負担なしの伐り置き間伐への依存度が年々高まりつつある。



岡崎市、豊田市、恵那市、根羽村、長野県提供のデータによる

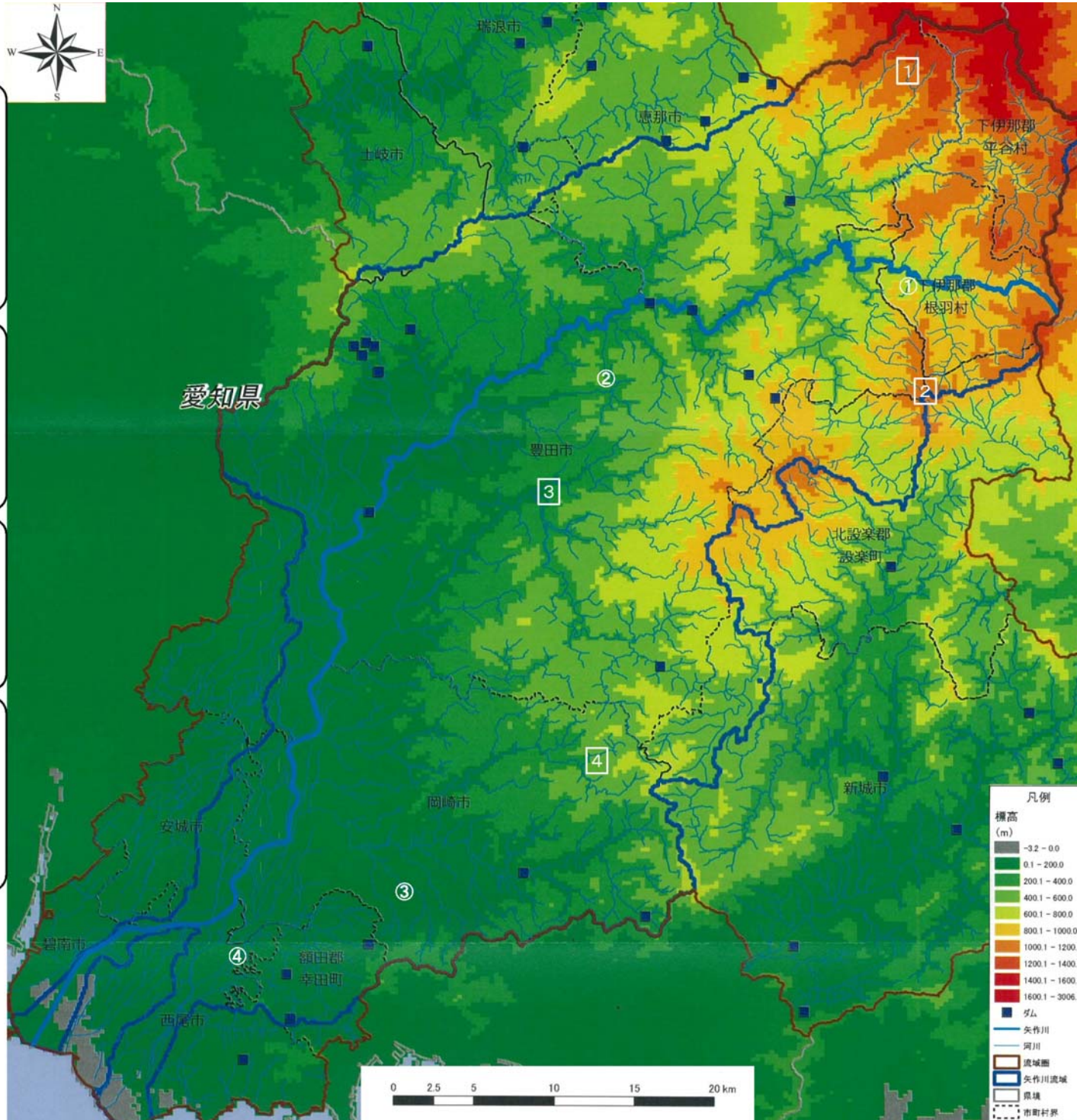
矢作川流域の 特徴的な森林

① アライダシ原生林

② 面の木峠ブナ林

③ 飯盛山の混交林

④ 長坂の高齢人工林



矢作川流域の巨木

① 月瀬の大杉
樹高40m、幹廻り約14m、樹齢約1800年。昔から虫歯に病む者が祈願すると霊験が著しく、また大事象がおこるときには前兆として大枝が折れると語り継がれている。旧月瀬村の産宮のご神木として古来から尊崇され、地区民の手で保護されて来た。

② 杉本の貞観スギ
胸高幹回り約12m、根周囲約15m、樹高45mを超える大きさを誇り、今なお成長を続けている。神明神社の創建が、貞観年間(859～876)と伝えられ、創建当初に社頭に植えられたと伝承されている。

③ 藤川の松並木
藤川宿は東海道五十三次の37番目の宿場として栄えていました。約1kmの間にクロマツ約90本がそそり立ち、中には根まわり約2m、樹高約30mという巨木もあります。

④ 神明社の大シイ
樹齢約1000年と推定される巨木で、樹高8m、根囲20m、胸高囲7mもある県下最大のスタジイの老樹。主幹は伊勢湾台風で倒壊、枯死したが、胸高囲1メートル前後の2本の枝幹が天高く枝を広げています。

本研修はスイスのフォレスター、ロルフ・シュトリッカー氏の現地と室内での講習を、スイス近自然学研究所所長の山脇正俊氏が通訳する形で進められた。参加者は奈良県の林業関係者を中心とした約 30 名だった。ロルフ氏はエコノミー（林業の経済面）に傾きがちだったスイスの森林管理にエコロジー（生物多様性や持続利用など）の新しい概念を持ち込んだ「近自然森づくり」のパイオニアで、「グリーン・フォレスター」と呼ばれている。

・森づくりは観察から

現在の森の様子（樹齢、樹種、成長具合《形状比が高いと不安定になる》、密度、樹冠、傾斜角、斜面方位、土壌条件、標高、気候、主な風向、積雪の有無）をよく観察・調査する。樹冠は樹高の 1/3 が理想で 1/4 以下だと厳しく、1/5 以下になると成長を期待できない。林床植生から地力が判断できる。この森がどのような経緯（施業）で現在の状況になったか、手を入れなかったら、あるいは入れたら 20 年後どうなるか予測する。



・森づくりの目標

林業の目標は、いいクオリティの森が大きく成長すること。そのために、残したい「育成木」（ドイツでは「将来木」）を決める。最終的には、殆ど何もしなくても太い木を収穫できる「恒続林」をめざすが、その途中の過程でも収入を得ることをめざす。恒続林は多種多齢多層の天然更新する針広混交林で、その育て方は土地や標高等の条件で異なる。単一種の林にすると、その樹種が流行しなくなったときに収益が上げられなくなってしまふ。完結した恒続林は芸術品で、収穫以外は殆ど何の管理もしなくていい。育成木は成長の過程で木のクオリティが落ちる前に順次伐採する。一番大きな木を伐ると何年か後に次の木が育ち、収穫できる。育成木の伐採が天然更新するギャップを作り出す。

いい木でも台風で倒れてしまつてはおしまいなので、林の安定性を維持することも大事。また、自然の摂理に従えば、森の成長にお金は掛からないが、時間はかかる。摂理から離れるとお金がかかるので、摂理に沿った森づくりをめざす。常に作業の検証を行い、コストと効果のバランスを考える。パーフェクトな作業をしようとするコストがかかる。低木の伐採、頻繁な伐採もコストがかかる。単層林で強度の手入れをするとドミノ効果で風倒木が発生するという悪影響があるが、複層林なら強度の手入れが可。

・育成木を育てる

安定していて活力があり、材のクオリティが高く将来お金になる木を育成木に選ぶ。不安定な土地や林縁（隣の山からプレッシャーがかかる）、道沿い（傷つきやすい）の木は避ける。まず根元か

(1)

ら見て、根張り、根元の傷や腐れの有無、幹がまっすぐか、枝下高、樹冠を見ていく。育成木同士が将来競合しないようにする。広葉樹だとかなり間隔があくこともあるが、針葉樹だと近い場合もある。樹幹にテープを巻くのはよくない。山側と谷側にスプレーやペンキで印をつける。

育成木の斜面下側の木はサポーターなので伐らない。上側の木、平地なら南側の木はライバルであることが多い。樹冠に触っている木は伐る。周囲の木はむやみに伐らない。やり足りないのは修正できるが、伐りすぎたら修正できない。大木、天然更新しにくい木の若木は傷つけないよう気を付ける。100年後、200年後の森の姿を考える。最小のコストでクオリティの高い木を育て、最終的には自力で育つ恒続林に導く。

・木を売る

消費者は向こうから来るわけではない。自分から探しに行かないといけない。自分は製材所にも行く。スイスの高い木は楽器や突き板、高級家具に使われ、海外に行くものも多い。特注品に応じる手もある。よくある間違いは材をいつも同じところに売ること。要求は変わると思った方がいい。思い込みは危険であり、たまに修正が必要。

・林道、作業道

林道、作業道を造ることは森に大きなダメージを与えるし、道が延びるほどコストもかさむので、慎重にプランを立てなければいけない。道が必要になったらその都度造るのではなく、まず全体のプランを立てること。道に投資するなら長期間効果があるようにしないと損をする。

【林道の区分】

1. 舗装道
2. 路盤材を使った機械道
3. 砂利のない機械道。大型林業機械、トラックが通れる
4. 搬出路（土木工事なし）

【表面の水はけの工夫】一番注意しないとけないのが水。降った雨がなるべく早く道から外れるようにする。

1. 片勾配 片方を低くする。長所…山側に水路がない。 短所…単位面積あたりを流れる水量が増える。凍結すると滑る。
2. 山型 長所…水が加速しない。 短所…山側に水路が必要。定期的に水を落とす必要がある。

岩がある急斜面では架線集材を行う。

急斜面の林道では道の横断方向に溝を切る。勾配が急なほど頻繁に溝を切る必要がある。溝は正しく配置すれば埋まらない。



山型の林道の説明

・コミュニケーションの重要性

フォレスターの提案と山主の意見が異なるときは、山主の話をよく聞くこと。フォレスターは山

主の人となりや仕事、家族、人生をよく知り、興味を持たないといけない。自分はプロだから従いなさい、と言うのではだめ。相手の意見の後ろ側にある理由を考える。理由が分からないまま話合ってもだめ。例えば山主がある木を伐りたい（が、フォレスターはその木をもっと育てたい）場合で、伐りたい理由が誰かに「この樹種はこの大きさになったら伐らないといけない」と言われたことだったとする。そうしたら、「自分はプロとしてこの木はx年待てば今伐るよりy円高くなると思う」と伝える。また、山主が「すぐお金がほしい、自分はx年後まで生きていられないだろう」と言うのなら、これ以上待っても今より材価が上がらない他の木がないか探してみる。「この木を伐れば周囲の若木の更新につながる」と言うなら、その若木は本当に今光が必要なのか、必要ならなら他の木を伐って光を入れられないか考える。山主の希望を叶えつつ、森の価値を高めていく手段を考えることが重要。そして最終的に意見が折り合わなくても、次の機会に期待すればいい。

また山主だけでなく、フォレスターの指示で作業する森林作業員の意見も聞き、一緒に考えていくべきである。

命令を受けたら復唱するのはスイスの基本。聞き返して真意を確認するのもスイスの基本。

<コミュニケーションのレッスン>

フォレスターになる試験に「言われたことを自分の言葉で表現し直す」という項目がある。当然、この試験に受からないとフォレスターになれない。「この人は何を言いたいのか?」とよく考え、周囲を見て状況を判断するというので、言った側と言われた側双方の「気づき」を促す。言った側の注文が複雑なほど、このやりとりが重要になる。

「言い直し」の例

例1

A「チェーンソーのメンテナンスをしなさい」

B「はい、私はこのチェーンソーをすぐ使えるように整備しておきます」

例2

A「あの木の枝を剪定して下さい」

B「あの木の下若木に陽があたるように、鉋で枝を切っておきます」

コミュニケーションによって技術、知識、経験をより生かせるようになる。



「言い直し」のレッスン

【受講後の感想】

・スイスの近自然森づくりの「自然の潜在力を最大限に引き出す」という考え方と、そのために担当者が異動せず、担当地域について熟知しているという体制は、近自然河川工法と共通するものだと感じた。ただ森は川と違い所有者がいて、木を育てて高く売らなければならないため、森づくりの方法と木材の価値をよく見極めることと、山主と緊密なコミュニケーションを取る必要がある。そのコミュニケーション力を上げるためのレッスンは非常にユニークなもので、森づくりだけでなく人が生きていく過程で普遍的に必要な能力を培うことに通じると思った。持続可能な国づくりのため徹底した人材育成を行うスイスの底力を感じた。

・ 冷涼なスイスでは極相が落葉広葉樹林～針葉樹林となるが、日本のおよそ半分かつ矢作川の水系の大部分は極相が常緑広葉樹林なので、スイスで目標とされているような林相をめざすのは非現実的と考えられる。日本で、矢作川水系で「恒続林」は可能なのか、それはどんな林になるのか、十分な検討が必要である。また、スタート地点が間伐遅れの人工林であれば「恒続林」への道のりは更に遠くなるのではないかと考えられる。

額田木の駅プロジェクト概要

平成27年8月1日現在

■事業主体

額田木の駅プロジェクト実行委員会

委員 : 額田林業クラブ、ぬかた商工会、森林組合、岡崎市など

実行委員長 : 鈴木啓允(林業家、旧額田町町長)

■沿革

平成26年10月 準備会を開始

平成27年2月 実行委員会発足

平成27年5月 開駅式開催。原木の受付と地域通貨の流通を開始

■現在の仕組み

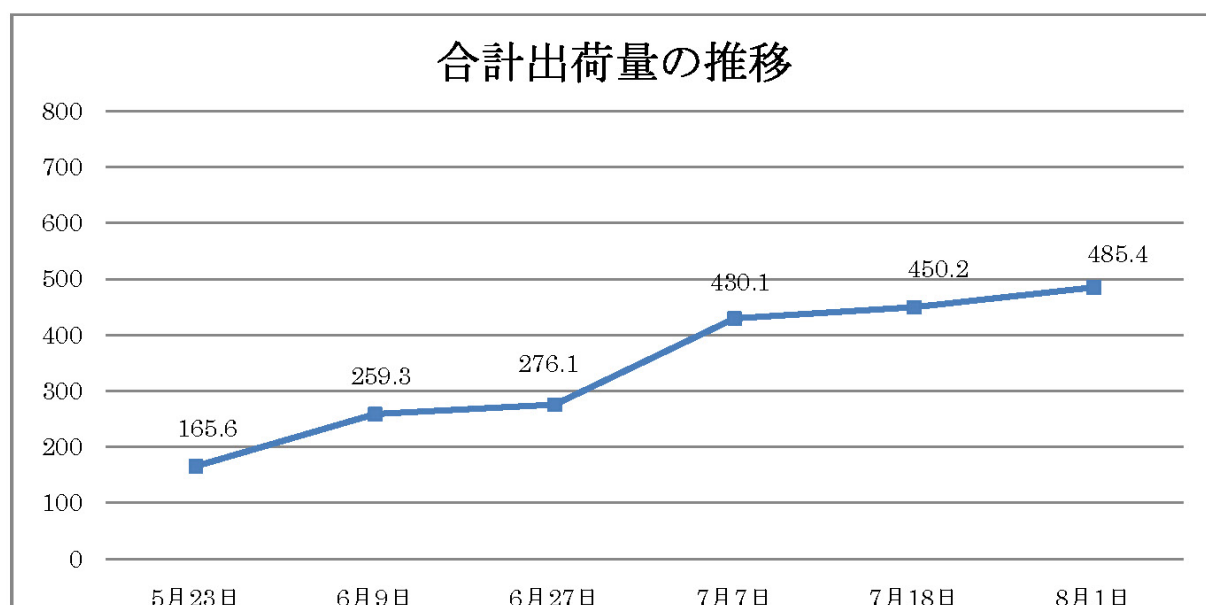
- ・ 1tあたり6,000円相当の地域通貨「森の健康券」で買い取り。
- ・ 原木は3,000円/tで岡崎市内のチップ業者(ヤマガネ商事)へ販売。
- ・ 不足分の3,000円/tは岡崎市より補てん(今年度は国の地方創生の交付金を活用)。
- ・ のぼり、チラシ等も今年度は交付金を活用。事務局人件費は手数料や寄付から充当。
- ・ 土場は額田地域内に8か所。トラック1台分(6t程度)が溜まれば業者が直接回収。
- ・ 出荷量は自己検尺で伝票に記入。末口×末口×長さ×0.75でトン数に変換。
- ・ 個人でトラック1台分を集められる場合は直接業者が回収に行くことも可能。その場合は業者のトラックスケールで計れるため、検尺不要。
- ・ 毎月1回実行委員会を開催。1週間前までに事務局へ出荷伝票を提出しておけば、その際に森の健康券を発券。(7月までは月2回発券窓口を設けて、その場で伝票を受付して発券)
- ・ 事務局は1ターン者3名。
- ・ 換金は月末頃に事務局が各店舗を回る。
- ・ 事務局手数料として出荷者から5%を徴収(発券時に差し引く)。

■出荷登録者数 80名

■登録商店数 46店舗(額田地域 および 周辺)

■木材出荷量および森の健康券発券状況

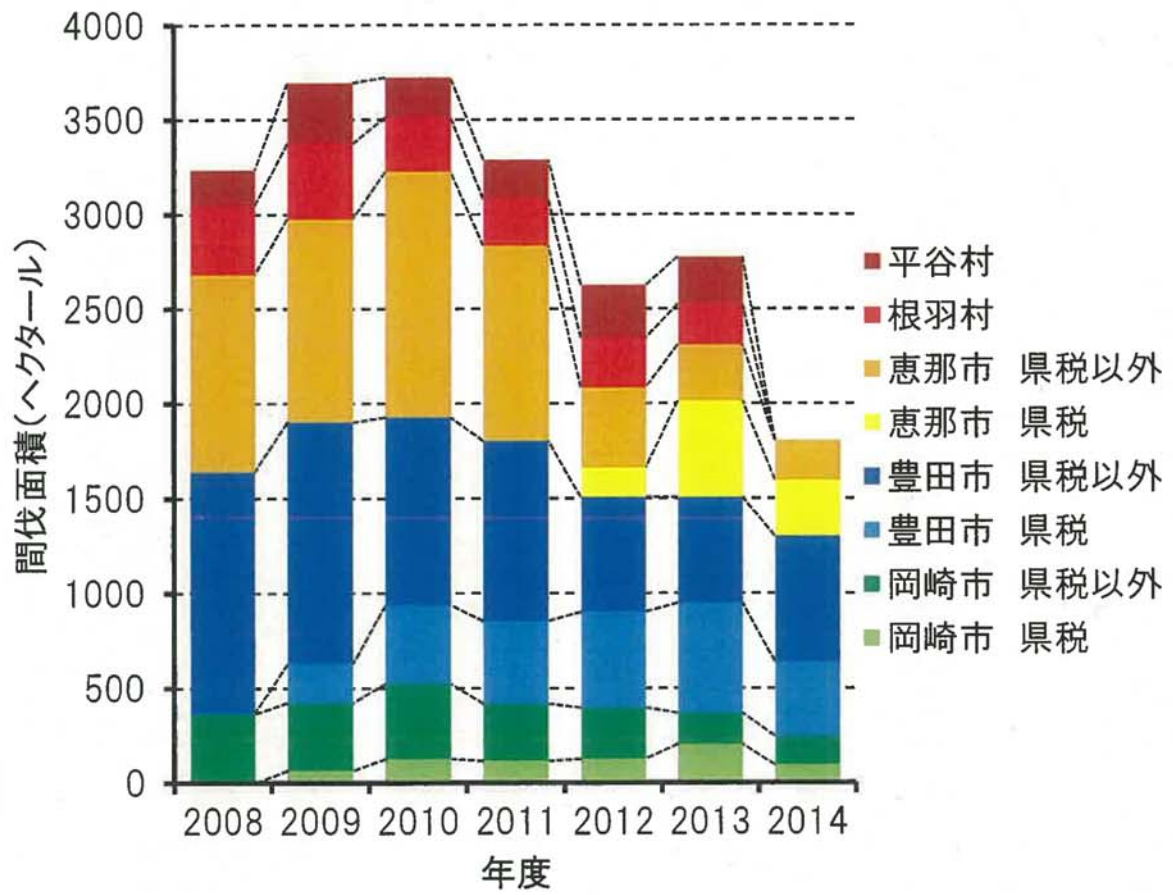
受付日	5/23	6/9	6/27	7/7	7/18	8/1	のべ
出荷人数	17	19	13	8	4	4	65
出荷トン数	166	93	17	154	20	35	485
森券発券量	940	530	90	878	132	200	2770



■ 今後の課題

- ・出荷者の偏り(素人山主へのフォロー、ボランティアグループとの連携を模索)
- ・販路の開拓(短材の受け入れでハードルを下げる。また、薪利用、建材利用などより高く売れる出口づくり)

間伐実績



岡崎市水循環推進協議会「緑のダム部会」について

1 岡崎市水循環推進協議会

岡崎市では「岡崎市水を守り育む条例」に基づいて健全な水循環に関する基本方針、目標を定めた水循環総合計画として「水環境創造プラン」を策定しており、その進捗管理や健全な水循環に関する市長諮問について調査、審議するための機関として「岡崎市水循環推進協議会」が設置されている。委員は学識経験者、各種団体の代表者、公募市民で構成され、現在14人の委員が委嘱されている。

2 岡崎市が抱える課題

- (1) 乙川水系では国産材の需要低下等の理由から放置された人工林が増加し、森林が本来持つ水源涵養機能の低下が懸念されている。

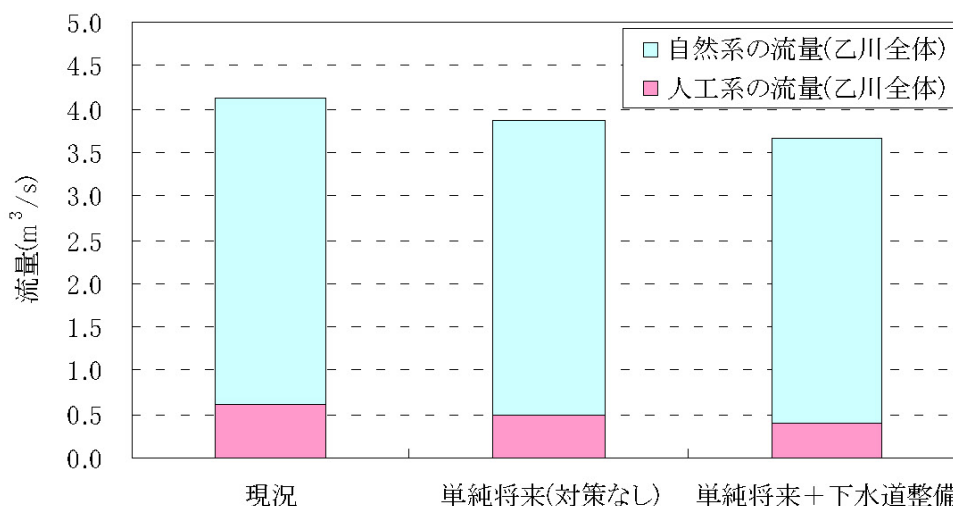
(参考) 岡崎市の人工針葉林の面積と森林蓄積量の推移(資料: 岡崎市林務課)

区分	人工針葉林					
	スギ		ヒノキ		マツ	
年度	面積 (ha)	蓄積 (千 m^3)	面積 (ha)	蓄積 (千 m^3)	面積 (ha)	蓄積 (千 m^3)
21	2,322	776	8,393	1,608	2,636	448
25	2,321	810	8,385	1,701	2,619	464

※ 森林蓄積: 森林を構成する樹木の幹の体積

- (2) 岡崎市が使用する水の約5割は乙川水系からの水源に依存しているが、放置人工林対策を施さない場合、今後水量の減少が予測される。

(図) 将来の乙川下流での流量の予測(出典: 岡崎市水環境創造プラン)



- (3) 現在、「岡崎市水環境創造プラン」では、水量の維持に関する重点施策として間伐支援を始めとした森林保全施策を水源林の保全に資するものとして挙げているが、それらは「林業」としての利益追求の副次的な要素としての性格が強く、水源涵養機能の保全を主目的とした施策は実施されていない。

3 部会設置に至る経緯

- (1) 岡崎市水循環推進協議会に対し、「水環境創造プラン」の中の水量に関する重点施策の「再構築」について、市長から諮問された。
- (2) 本年6月24日（水）開催の水循環推進協議会で諮問に対する検討部会として「緑のダム部会」を設置し、当該諮問を付託した。
- (3) 部会員は8名。学識経験者、市民公募委員等で構成されている。
部会長は蔵治光一郎氏（東京大学准教授）

4 部会の目的

- (1) 岡崎市が現在行っている間伐支援を始めとした森林保全に関する施策と、水源涵養林の保全のために必要な施策との違いを明確にすること。
- (2) 間伐の実施量と河川に流入する水量との関係における科学的な検証を基に、水量維持のために必要な施策について、その費用対効果も含めて提言を行うこと。

5 部会の活動予定内容

- (1) 平成27年度、28年度の2年度にわたって年間3回の部会を開催していきたい。
- (2) 平成27年度は市担当課からの事業説明や額田地区の森林の視察等を通して現状の把握と課題の抽出に努める。翌年度において具体的な施策の検討を行いたい。
- (3) 平成29年2月頃開催の水循環推進協議会に答申案を報告したい。

<活動予定の整理>

開催予定時期	水循環推進協議会関連	緑のダム部会
H27.6	【重点施策進捗状況確認】 【部会の設置】	
H27.7		第1回【現状把握】
H27.9		第2回【現地視察】
H28.1		第3回【課題の抽出】
H28.2	【部会報告】	
H28.6	【重点施策進捗状況確認】 【部会の報告】	
H28.7		第1回【施策の検討】
H28.10		第2回【施策の検討】
H29.1		第3回【施策案の取りまとめ】
H29.2	【施策のとりまとめ】	

森林の緑のダム機能の維持及び向上は可能か

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林生態水文学研究所 蔵治光一郎

1. はじめに

2014年4月2日に公布され、7月1日に施行された水循環基本法では、基本理念として、水が国民共有の貴重な財産であり、公共性の高いものと定められた（第三条）。また基本的施策として、国及び地方公共団体は、流域における水の貯留・涵養機能の維持及び向上を図るため、雨水浸透能力又は水源涵養能力を有する森林、河川、農地、都市施設等の整備その他必要な施策を講ずるものと定められた（第十四条）。森林の雨水浸透能力又は水源涵養能力の整備について施策を講ずることが法的に位置づけられたのはこれが初めてであろう。

本稿では、水循環基本法第二条が定義する「健全な水循環」（人の活動及び環境保全に果たす水の機能が適切に保たれた状態での水循環）の一構成要素である森林の雨水浸透能力又は水源涵養能力（＝緑のダム機能）の歴史的経緯と現状認識を整理する。また森林の水循環に関する科学的知見の到達点を示し、森林における健全な水循環の維持および向上の可能性について、水循環基本計画（原案）平成27年4月版に基づき検討する。

2. 森林の過剰利用による緑のダム機能の劣化（蔵治（2014）をもとに改変）

流域単位の森林づくりの考え方は、下流の人々の生活と上流の森は、河川によってつながっており、河川がもたらす恵みである水資源や、災いである水害や水不足は、上流の森林の過剰利用によって悪化する、という論理に長い間、支えられてきた。

森林を流域単位で管理しなければならないという考え方は、日本では飛鳥時代にさかのぼる。壬申の乱の勝利により政権を掌握した天武天皇は、676年に飛鳥川の水害対策として、上流の南淵山、細川山の伐採禁止令を出した。これは政府として正式に災害防止を目的に森林の伐採を規制した最初の制度と言われている。江戸時代の1666年には4老中連名で諸国山川掟が出された。これらの制度は、上流の森林の過剰利用により土砂が河川へ流出し、河床が上昇したことにより洪水時の水位が上昇し、水害の頻度が高まったことが背景にある。下流の水害を減らすために、流域単位で森林の過剰利用を抑制しなければならないという考え方である。この考え方は江戸時代、熊沢蕃山や河村瑞賢らによって思想の段階まで高められ、「治山治水」という言葉が社会に定着した。この思想は明治時代の1897年の森林法制定に伴う水源涵養・土砂流出防備保安林の設定によって法的に位置づけられ、現在に至っている。

次に生まれた考え方は、下流に清浄・豊富・低廉な水を供給するため、上流域の森林の過剰利用を抑制しなければならないという考え方である。この考え方に基づき、水源林という言葉も生み出された。まず平安時代の821年に、わが国初の水源林保護制度といわれる水源禁伐の官符が出された。この官符の背景にあった考え方は、大河川の水源地は鬱蒼とした森が茂っており、小河川はハゲ山の丘陵から流れているので、もし森が伐採されてしまうと河川の水が涸れてしまう、という認識に基づいたものであった。この認識は前述した「土砂流出による水害の激化」と結び付けられ、社会に広く認識されるに至った。明治後期には庄内赤川（鶴岡市、1908～、1319ha）・青竜寺川（鶴岡市）・明治用水（矢作川流域、1908～、525ha）・鹿妻穴堰（雫石町、233ha）などの農業用水団体が水源林を購入する動きが起きた。このうち明治用水は矢作川上流の森を購入したが、その際の合言葉は「水を使う者は自ら水をつくれ」であった。また東京府は清浄な水道水を得るため、1901年に多摩川上流でありながら東京府の権限の及

ばない山梨県内の森林（現在の面積は 21,629ha）を水源林として購入した。その後も全国の多くの水道事業者や自治体が水源林を購入し、現在に至っている。

まとめると、およそ 1300 年前から 100 年前までの間は、日本の森林は人間による過剰利用によって水循環が不健全な状態になり、下流域に水害や水不足をひきおこす原因の一つとなっていたが、およそ 100 年前に化石燃料を使うようになって森林への利用圧が緩み、森林法等に基づいた政府の諸施策も功を奏し、ハゲ山が森林に回復し、水循環も不健全から健全へ回復していった。

3. 森林の過少利用による緑のダム機能の劣化（蔵治（2014）をもとに改変）

それに対して近年、流域単位の森林づくりの新しい考え方が芽生えてきた。その背景には、木材の需要が減少し、価格も下落し、木材生産を目的とした森林伐採が不活発になり、森林の過少利用とでもいふべき状況が出現したことがある。上流域の山村地域の中には、森林利用が地域経済の中で大きな位置を占めている地域があり、そのような地域では森林の利用が過少になれば、地域経済は衰退の危機に瀕することになる。国は所得の再分配により、このような地域を支援しようとしてきた。1975 年には林野庁が「緑のダム」という言葉を生み出し、1985 年には国レベルの水源税構想が示された（実現には至らず）。時を同じくして、前述した「森林の過剰利用は下流に災いをもたらす」という日本人の心の奥底まで浸透している論理を援用し、下流の都市住民が上流の山村を支援する、という考え方が台頭してきた。1991 年の森林法改正で森林を流域単位で管理するシステムが法的に位置づけられた。1993 年には豊田市の水道事業審議会が水道水源保全のための森林整備を目的とした基金設立の答申を行い、1997 年に林政審議会が「国有林野事業の抜本的改革の方向」を発表し、2001 年の森林・林業基本法により「公益的機能重視」の政策転換がはかられた。2003 年には高知県が全国初の「森林環境税」制度を開始し、10 年間で 35 都道府県に広まった。

この考え方を都市住民にわかりやすく説明するため、森林の過少利用がいつの間にか「森林の荒廃」と呼ばれるようになり、「森林の荒廃」は「保水力の低下」をもたらすと言われるようになった。近年の流域単位の森林づくりの考え方は、河川がもたらす恵みである水資源や、災いである水害や水不足は、上流の森林の過剰利用のみならず、過少利用によっても悪化する、という論理によって正当化されている。

水循環基本法の前文に「近年、都市部への人口の集中、産業構造の変化、地球温暖化に伴う気候変動等の様々な要因が水循環に変化を生じさせ、それに伴い、渇水、洪水、水質汚濁、生態系への影響等様々な問題が顕著となってきている」とあるが、森林域では、都市部への人口の集中や産業構造の変化に伴って森林の過少利用が起これ、その結果、水循環が変化し（健全な水循環が損なわれ）、それに伴い、渇水、洪水、水質汚濁、生態系への影響等、様々な問題が顕著になってきた、と読み取ることができる。

4. 緑のダムは科学的にどこまでわかってきたか

森林と水の相互作用を研究分野とする科学者は「森林の利用が過剰であっても、過少であっても、健全な水循環が損なわれ、水害や水不足を引き起こす原因の一つとなり、水質汚濁や生態系への影響が問題となる」といえるのかどうかを検証するため、これまで様々な調査、研究を全国各地で行ってきた（蔵治・保屋野編（2014））。

緑のダムの科学とは、森林の水循環の科学であり、森林水文学（すいもんがく）とも呼ばれる。森林の水循環の科学は近年著しく進歩したが、多様な地形、地質、気候条件の土地に人間の歴史を反映した多様な樹木が生育している日本の森林の水循環をすべて明らかにできたとはいえず、科学的にわからな

いこともたくさん残されている。

現時点ではっきりしていることは、森林は空から降ってきた雨や雪を一時的に貯留する（これを森林の保水力と呼ぶ）が、貯留された水は最終的には蒸発または蒸散により大気に戻っていく水（これを緑の水と呼ぶ）と、河川水または地下水になって下流に流れる水（これを青の水と呼ぶ）に分かれること、ハゲ山や草地に比べて森林では緑の水の量が多く、その分、青の水の量が少なくなることである。森林は、水を蒸発・蒸散する作用と、最終的に河川水・地下水になる水をゆっくり流す遅延作用の両方を持っており、遅延作用は洪水緩和機能・水資源涵養機能の両者にとってプラスに作用するが、蒸発・蒸散作用は洪水緩和機能にとってプラスに、水資源涵養機能にとってマイナスに作用する（表1）。

この科学的知見をもとに、森林の過剰利用と過少利用が健全な水循環に及ぼす影響は表2のように整理される。例えば森林の過剰利用は、森林の蒸発・蒸散作用と遅延作用をとともに弱める。蒸発・蒸散作用が弱まると河川の水量が増加することになり洪水緩和機能にとってはマイナス、水資源涵養機能にとってはプラスになる。一方で遅延作用が弱まると洪水緩和、水資源涵養のいずれの機能にもマイナスになるため、森林の過剰利用は洪水緩和機能にとって間違いなくマイナスと言えるが、水資源涵養機能にとっては2つの作用が相反する方向に変化するため、プラスかマイナスかは一概に言えないことになる。

表1 森林が生態系として備えている作用と人間の活動にとって都合のよい機能との関係

	洪水緩和機能	水資源涵養機能
蒸発・蒸散作用	プラス	マイナス
遅延作用	プラス	プラス

表2 森林が適正に利用されている状態と、過剰利用・過少利用状態との比較

	蒸発・蒸散作用	遅延作用	洪水緩和機能	水資源涵養機能
森林の過剰利用	マイナス	マイナス	マイナス	プラスの場合もマイナスの場合もある
森林の過少利用	プラス	マイナス	プラスの場合もマイナスの場合もある	マイナス

現在は森林の過少利用の状態であり、森林をもっと利用することは水資源涵養機能にとってはプラスであるが、洪水緩和機能にとってはケース・バイ・ケースで判断しなければならないことがわかる。

このような複雑な関係があることは、よく知られておらず、知ってもらいのも難しいため、人工林を間伐すればすべての問題が解決するかのような、単純なメッセージが安易に発信されてしまい、多くの人がそれを信じてしまうという悪循環が発生している。森林と水の科学の立場からは、間伐して発生した伐倒木を持ち出さずに林内に放置して腐らせ、土にしていくことや、伐倒木を運び出すために作業道や搬出路を入れる場合に注意が必要であることなどが科学的に明らかになりつつあるが、木材生産の現場では採算性のみが考慮され、緑のダム機能への影響が考慮されることはまれである。

5. 森林における緑のダム機能の維持及び向上は可能か

現在、過少利用状態にある森林において、緑のダム機能が劣化していると考えられる森林は、すべてではないものの、確かに存在している。そのような場所において森林の緑のダム機能が向上すれば、下

流域で暮らす人間の活動にとってプラスになるだろう。

平成 27 年 4 月付の水循環基本計画（原案）（内閣官房水循環政策本部事務局（2015））の第 2 部「水循環に関する施策に関し、政府が総合的かつ計画的に講ずべき施策」の 2. 「貯留・涵養機能の維持および向上」の（1）森林の項には、6 点の施策が列挙されている。ここではその 6 点について私の意見を述べる。

1. 我が国においては、個々の森林に対して、異なる複数の機能の発揮が期待される場合が多いため、森林の現況、自然条件、地域ニーズ等を踏まえながら、水源涵養機能をはじめとする多面的機能を持続的に発揮させるための森林の整備及び保全を進める必要がある。

【意見】森林の多面的機能とは、森林の作用のうち人間にとって都合がよい作用のことである。複数の機能の中には互いに「トレード・オフ」の関係にある機能もあるため、1 つの森林のすべての機能を同時に向上させることは不可能である。それが可能であるかのような文章は誤解を招く。また現在の木材市況下においては、いずれの機能を発揮させるにしても公的資金の投入が必要であり、財政的制約から、すべての森林に均等に公的資金を投入することはもはや現実的ではない。全国一律に漠然とした施策を行うのをやめ、下流の住民にとって、緑のダム機能向上が特に必要とされている森林の区域（以下ではこれを「緑のダム高度発揮区域」と称する）を政府の責任で特定した上で、その区域の森林については他の機能よりも緑のダム機能の維持及び向上の優先順位を高くして、科学的根拠に基づいた緑のダム政策を行う必要がある。

2. 全国の多様な森林について、森林計画制度に基づき、国・都道府県・市町村・森林所有者等が連携しつつ、各々の役割に応じて体系的かつ計画的な森林の整備及び保全の取組を推進する。

【意見】現在の森林計画制度は、流域ごとの計画になっていない。1991 年の森林法改正で「森林の流域管理システム」が導入され、現在も維持されてはいるが、管理境界は都道府県の境界で切られており、都道府県の境界を超えて流れる河川の流域における森林管理計画は立てられていない。現行の森林計画制度を改め、河川流域ごとの計画に再編した上で、複数の都道府県職員をメンバーとした計画の実行を担う組織を流域ごとに立ち上げる必要がある。

3. 民有林においては、森林施業の集約化を図り、間伐やこれと一体となった路網の整備等を推進するとともに、水源涵養機能の高度発揮が求められる奥地水源林等であって、所有者の自助努力等によっては適正な整備が見込めない森林等においては、公的主体による間伐や針広混交林化等の森林整備のほか、公有林化を推進する。また、奥地脊梁山地や水源地域に広く分布する国有林においては、国自らが適切な森林の整備及び保全を推進する。

【意見】民有林では所有者が同意しない限りどのような計画を立てても絵に描いた餅になる。緑のダム高度発揮区域でない区域の民有林で所有者が木材生産活動を行うことは自由であるが、緑のダム高度発揮区域の民有林においては、路網整備の制限を含み、罰則を伴う新たな法制度を検討すべきである（京都府が 2014 年に森林の適正な管理に関する条例を制定）。所有者の自助努力によって適正な整備が見込めない、とあるが、所有者は緑のダム機能発揮のために努力するのではなく、あくまで自分の所得を最大化するために努力するものであるから、緑のダム高度発揮区域における所有者の自助努力は、現在の木材市況を踏まえると、持続可能性を顧みない木材生産となってしまう、緑のダム機能を損なう結果を招く可能性があることに注意すべきである。

4. 水源涵養機能の維持増進を通じて良質な水の安定的な供給と国土の保全に資するため、ダム上流等

の重要な水源地や集落の水源となっている森林について、保安林の指定やその適切な管理を推進する。また、これら保安林について、浸透・保水能力の高い森林土壌を有する森林を維持・造成することとし、荒廃地や荒廃森林を再生するために必要な治山施設の設置と森林の整備を面的かつ総合的に推進する。

【意見】保安林は明治 30 年に定められた古い制度であり、現代社会のニーズを踏まえて定められる緑のダム高度発揮区域とは一致しない。また保安林は日本の森林の 48%を占めているが、面積が大きすぎるため、財政に制約がある状況では、治山事業等の公的資金投入はどうしても広く浅くなってしまふ。限られた国家予算を重点的かつ効果的に使うために、保安林制度を抜本的に改革するか、または保安林の上にさらに別の制度を乗せるなどして、緑のダム高度発揮区域への集中投資を進める必要がある。

5. 過疎化・高齢化の進展や、林業の収益性の低下、担い手の不足等により必要な整備・保全が行われない森林が増加するおそれがある中、水源涵養機能等の森林の多面的機能の持続的な発揮を図るため、これらの森林を有する山村に安定的な雇用を創出しつつ、山村に人が定住し、林業生産活動等を通じて森林を整備・保全する必要がある。このため、新たな木材需要の創出や需要者ニーズに対応した国産材の安定供給体制の構築などを通じて、山村の雇用創出に大きな役割を果たしている林業・木材産業の振興や山村の地域資源の活用への支援などにより、山村の活性化を推進する。

【意見】山村に人が定住することが望ましいことについて異論はないが、すでに定住者がいなくなっている山村の数が年々増加している現状では、全国すべての山村に定住者を求めることには限界がある。全国すべての山村に定住者を求めることをやめ、緑のダム高度発揮区域の山村に重点的に定住者を誘致する施策を展開し、緑のダム高度発揮区域でない区域においては、定住者がいないことを前提とした森林の取り扱いを考えざるを得ない。このような区域においては、いかなる機能も期待せずに、放置して自然の遷移に任せる森林も森林計画に位置付ける必要がある。

6. 水道の水源周辺の森林等を維持・保全し、良質な原水の取水を確保するため、森林、河川、環境等の行政部門が各々連携し、水道水源域の適切な管理を実施する。

【意見】水道原水の取水口の上流域（水道水源域）はすべて、緑のダム高度発揮区域の候補となるが、すべての水道水源域を緑のダム高度発揮区域に位置づけるのではなく、各取水口の給水人口や流域面積を勘案して優先順位をつけるべきである。水道水源域ごとに行政部門が連携すべきであるのは当然であるが、具体的にどの部局が連携の責任を負うのかをはっきりさせたいうえで、その部局が事務局となり、水道水源域保全のための組織を各水道水源域にそれぞれ設立することが必要である。

引用文献

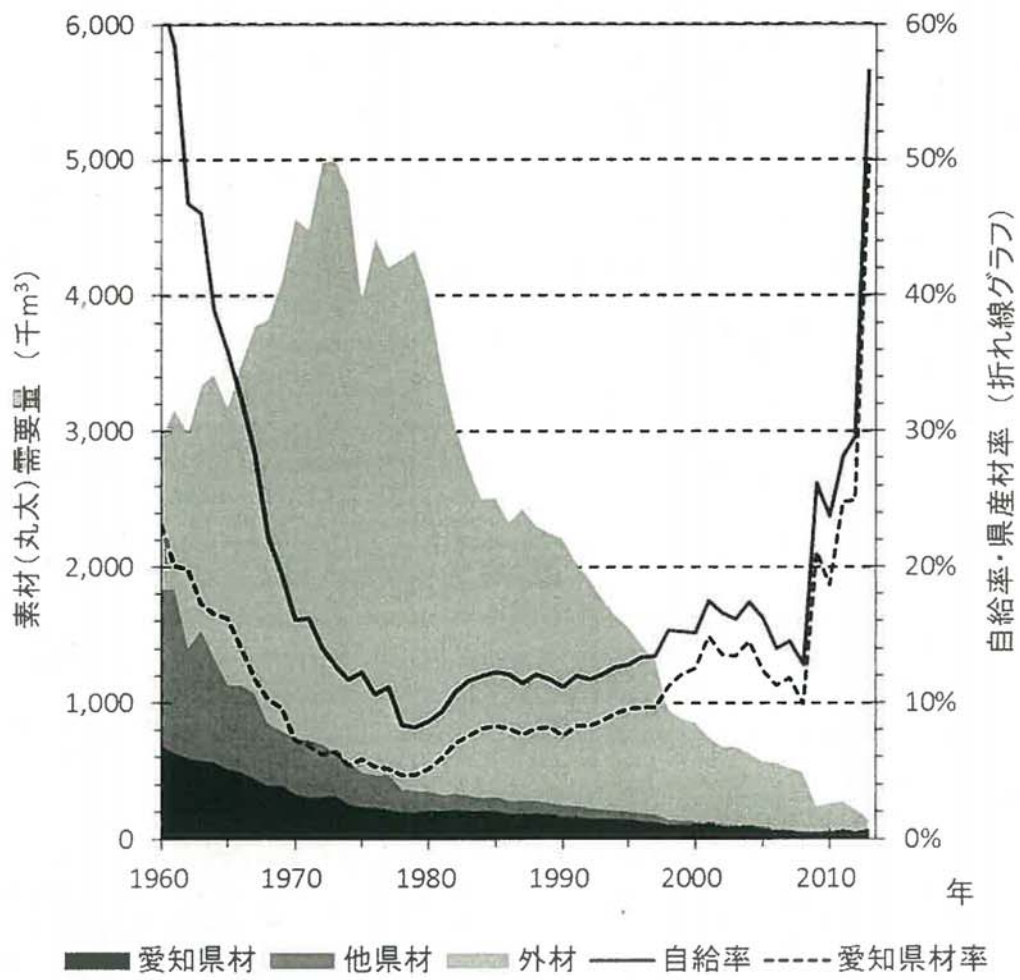
蔵治光一郎(2014)木づかいと共に進める矢作川流域単位の森林づくりとその考え方. 月刊「杉」Web 版、

第 107 号、http://www.m-sugi.com/107/m-sugi_107_kurachi.htm

蔵治光一郎・保屋野初子(編)(2014)『緑のダムの科学－減災・森林・水循環－』、築地書館

内閣官房水循環政策本部事務局(2015)水循環基本計画(原案)平成 27 年 4 月

http://www.kantei.go.jp/jp/singi/mizu_junkan/pdf/h270415_2.pdf



豊田市中核製材工場

西垣林業(株) 地域と共生を強調

「原木高く買える」直送で経費減

近隣製材所と相互補完も

平成30年度操業

豊田市の林産業を「産業」として成り立たせるべく、市が全国公募で誘致し、御船町地内で平成30年度に稼働する「豊田市中核製材工場」。その実施事業者に決まった西垣林業(株)が山主むけの説明会を7日開き、事業内容の詳細を明らかにした。

「地域と共に長期的・安定的に事業を続けたい」という同社の姿勢と事業計画に、山主や関係者は希望を持ったはずだ。

この説明会は豊田森林組合が足助交流館で開催した講演会&パネルディ

スキャッションの中で行われたもの。組合員(山主)や林業関係者ら約150名が集まった。

西垣林業(株)は奈良県桜井市と名古屋市中核製材工場が12番目の事業拠点となる。

今回の説明会では、中核製材工場を長期的・安定的に成功させるための差別化ポイントとして、

「①もりの直送」「②相互補完システム」「③豊田市&愛知県産材」の3点を挙げた。

「①もりの直送」は原木の生産段階での差別化だ。原木市場を通さずに中核製材工場が直接買い取ることで、流通経費を削減し、生産現場の手取り増加と製材工場の適正価格仕入れをねらう考えだ。伐採現場での非効率な選別作業も不要になるという。

「②相互補完システム」は加工段階での差別化。地域に既存の小規模製材所と共存するための仕組みでもある。中核製材工場の要である木材乾燥機を近隣製材所にも活用して貰い、逆に、特殊仕上げ加工などは近隣製材所へ委託したい考えだ。

「③豊田市&愛知県産材」は販売段階での差別化。地産地消がキーワードだ。「TOYOTA WOOD」(仮称)のロゴや含水率等を印字してブランド化し、名古屋市場へも投入していく。

西垣雅史副社長は「愛知県は多くの人口を持つ街がある。豊田市を中心とする三河地方には山林資源の豊富な森がある。これを結びつけることが中核製材工場を成功させるエッセンスだ」「川上・川中・川下それぞれで差別化を履行し、地産地消をキーワードにした生産・販売戦略を実現したい」と語った。

雇用は操業開始の平成30年度に17人、同34年度時点で25人を想定しているという。【新見克也】

豊田市

森林計画 10年 経過 リニューアルへ

「キックオフ・シンポジウム」

太田市長「新構想も意欲的内容に」

シンポジウム会場は木の雰囲気味わえる
豊田市能楽堂。210人が参加した。



平成17年の市町村合併で広大な森林を抱えた豊田市は「100年の森づくり構想」を掲げ、市の最重要課題の1つとして人工林の間伐を促進してきた。この構想が平成29年度に10年となるため、近年の課題や全国的動向を踏まえてリニューアルする考えだ。そのキックオフ・イベントとして市能楽堂で16日に「森づくり構想シンポジウム」が開催された。【新見克也】

豊田市が人工林間伐の重要性に気づいたのは、中心市街地が水没寸前の危機となった平成12年の東海豪雨災害がきっかけ。合併後すぐさま産業部内に「森林課」を新設し、森林施策に本腰を入れた。都市を守るた

めの税金投入による思い切った人工林整備だ。掲げた目標は「10年間で2万5千ヘクタール間伐する」という過大なもの。達成は厳しいと認識

専門家も森林課を高評価

いことだが、こうした森林行政は市レベルでは全国でも飛び抜けていると言われる。今回のシンポジウムに招かれた専門家も、職員の見込みや専門性を保つ人事を含めて非常に高く評価していた。

市の森林行政は 今後大きく展開

豊田市の森林行政は今、大きく展開しようとしている。市民が水道使用料1トンにつき1円を拠出している「水道水源保全基金」の使い道が、矢作ダム湖畔の森の購入に決まった。また林産業を産業として軌道に乗せる拠点施設「中核製材工

場」の誘致も決まった。「森づくり構想」のリニューアルはこうした大きな動きを踏まえて行われることになる。

太田裕彦市長の期待も大きい。市長はシンポジウムの挨拶で目標達成していないことに触れ、「10年前の構想は意欲的、積極的なものだった。今回の見直しでごんまりとした物になってはいけない」と、積極的な見直しを支持していた。

今回のシンポジウムは今後を語り合うと言つより、国内・国際的な視野のなかで、豊田市の森林行政の立ち位置を再確認するものだった。

豊田市中核製材工場の実施事業者の決定について

1 実施事業者

企業名称 西垣林業株式会社

本社所在地 奈良県桜井市大字戒重137番地

代表者氏名 代表取締役社長 西垣 泰幸

資本金 7,500万円

従業員 127人

【事業所】※複数本社制

・桜井本社（奈良県）
山林経営、原木市場、国産材製材等

・名古屋本社（愛知県）
製品市場、建築工事請負等

・舞鶴工場（京都府）、浜松工場（静岡県）、
酒田工場（山形県）

外国産材製材等 ほか

2 事業計画の概要

設備計画 製材工場棟（延べ床面積約3,000㎡）、製品保管庫、中温乾燥機、高温乾燥機ほか

生産計画 原木取扱量 45,000 m³ ※操業5年度の想定

製品計画 ヒノキ柱及び土台（JAS認定）、ヒノキ板類、
スギ柱（JAS認定）、スギ間柱及び板類、チップ材

特 色 地域材のブランド化、自社製品市場の堅実な販路と、市場情報を生かした製品開発

3 決定に係る評価のポイント

去る平成27年6月5日に募集要項を公表し、製材工場を運営する実施事業者の募集したところ、全国から3者の応募があり、森林、木材利用等の専門的知見を有する委員（6名）で構成する選考委員会による審査を経て、実施事業者を決定した。決定に係る評価ポイントは以下のとおり。

(1) 原木生産（川上）から製品販売（川下）まで一貫した木材産業への関わり

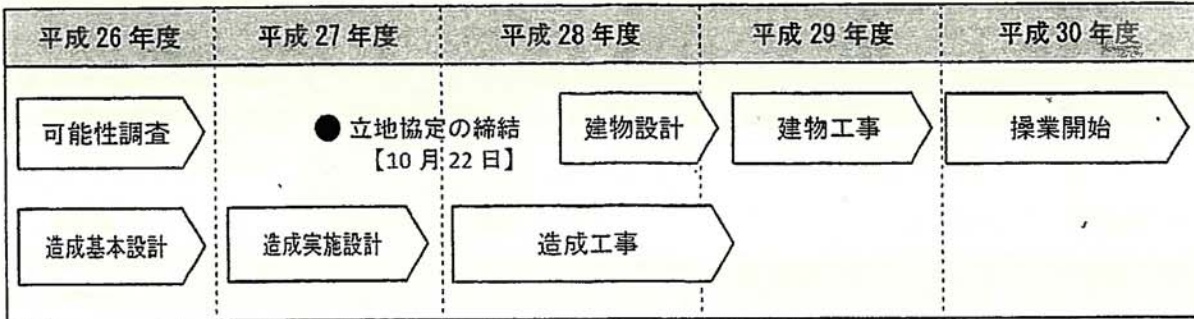
- ・自社で山林を所有し、素材生産（原木生産）のノウハウを地域に波及させることができるとともに、自ら原木市場を運営し、原木調達に必要な需要動向の知見を有する。
- ・ヒノキを含めた住宅用構造材の量産や寺社仏閣用材等の国産材の生産設備を有し、製材における実績が豊富である。
- ・周辺地域を含めた既存の木材産業（地域の製材工場等）と、互いに得意分野で補完しあう相互連携が期待できる。
- ・本市の樹種構成の特徴であるヒノキを主体とした生産計画であり、地域材の有効活用が期待できる。
- ・名古屋市内に名古屋本社及び製品市場を置き、長年に亘り東海地域での営業実績があるとともに、マーケット情報を製品開発や生産計画に反映することができる。

(2) 企業姿勢

- ・社として豊田市のプロジェクトを重点的に位置づけ、製材工場の運営に意欲的であることに加え、豊田市産材のブランド化に対して前向きな取組の姿勢がみられる。
- ・周辺環境対策、安全管理体制などに対し必要な考慮がされており、定期的な地元工場見学会を計画するなど、地域と共生する工場づくりを目指している。
- ・借入金に依存しない資金計画など、財務的に自立性の高い事業計画である。

平成27年10月22日(木)
添付資料
産業部森林課

4 操業開始に向けたスケジュール



参考1 事業概要

(1) 事業手法

市有地において市が造成工事を行い、賃貸借契約を締結した上で、実施事業者が製材工場を建設し、運営する民設民営方式

(2) 事業計画地

豊田市御船町山ノ神 56-116 ほか2筆

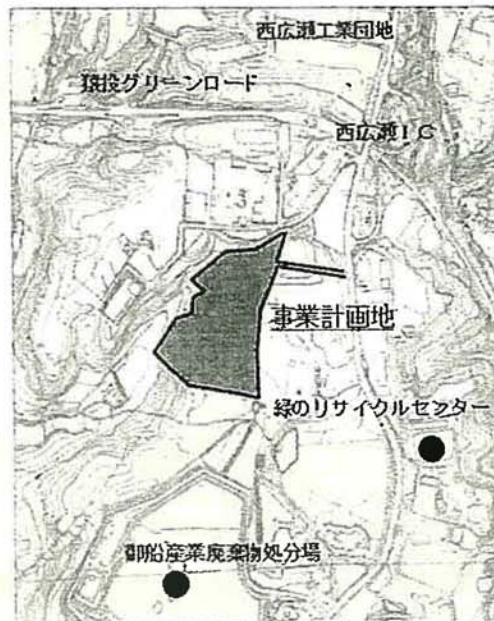
(3) 面積

開発区域面積：約 52,500 m²

工場用地面積：約 30,000 m²

(4) 想定規模

国産材を主体に、年間の原木消費量が3～5万m³程度以上



参考2 募集に係る経緯

募集要項の公表	6月5日(金)	募集要項の公表、参加表明書の受付開始
説明会・現地確認	6月19日(金)	募集要項の説明、事業計画地の見学
参加表明書の提出	～7月21日(火)	応募者による参加表明書の提出(5者)
事業計画書の提出	～8月31日(月)	応募者による事業計画書の提出(3者)
プレゼンテーション	9月25日(金)	応募者によるプレゼンテーション(3者)
立地協定書(覚書)締結	10月22日(木)	実施事業者と立地協定書(覚書)を締結

参考3 豊田市の森林の状況

(1) 面積及び蓄積

〈豊田市の土地利用別面積〉

区域面積	森林面積			農用地	その他
	総数	国有林	民有林 ^{※2}		
91,847 ha ^{※1}	62,615 ha	1,319 ha	61,296 ha	6,790 ha	22,442 ha
100%	68%	1%	67%	7%	25%

※1 表示の区域面積については、平成27年3月6日付で、国土地理院の計測方法の変更に伴い、91,832haに変更されている。

※2 民有林は、国有林以外の森林をいう。

資料：平成25年度愛知県林業統計

〈豊田市の林種別面積及び蓄積〉

		面積 (ha)	蓄積 (m ³)	年間成長量 (m ³)
立木地	人工林	35,198	9,681,590	141,735
	天然林	23,962	3,040,013	17,787
竹林		1,147		
無立木地		974		
総数		61,281	12,721,603	159,522

(注) ha未満は四捨五入したので、内訳と計は必ずしも一致しない。

各数値は速報値であるため、確定値の発表により変更する場合がある。

資料：愛知県森林資源構成表（平成26年度）

〈豊田市の人工林の樹種別面積及び蓄積〉

		面積 (ha)	蓄積 (m ³)	年間成長量 (m ³)
針葉樹	スギ	11,254	4,529,755	61,571
	ヒノキ	19,271	4,292,702	71,065
	マツ類	4,445	825,858	8,632
	その他	86	19,604	302
広葉樹		141	13,671	165
総計		35,198	9,681,590	141,735

(注) ha未満は四捨五入したので、内訳と計は必ずしも一致しない。

各数値は速報値であるため、確定値の発表により変更する場合がある。

資料：愛知県森林資源構成表（平成26年度）

(2) 木材生産量

〈豊田市内木材生産量〉

(単位：m³)

年	市内木材生産量	うち豊田森林組合 の生産量		
		うち利用間伐	うち高性能林業機械使用	
H17年	23,700	13,811	11,049	—
H18年	24,300	14,689	8,000	3,320
H19年	23,218	16,495	12,899	6,826
H20年	28,900	17,660	14,035	6,912
H21年	29,400	18,553	14,535	8,012
H22年	33,390	18,969	16,121	12,223
H23年	32,484	21,141	15,988	12,801
H24年	37,399	18,704	14,700	11,445
H25年	33,818	22,962	18,403	11,755
H26年	39,390	26,305	19,096	14,429

(注) 市内木材生産量は、年次(1/1~12/31)の数値である。

各数値は速報値であるため、確定値の発表により変更する場合がある。

資料：愛知県「林産物生産流通動態調査」及び豊田森林組合

〈豊田森林組合木材センターの木材取扱量と平均単価〉

項目/年度	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26
木材取扱量 (m ³)	8,086	11,154	13,037	13,643	14,115	15,726	16,738	15,038	14,167	12,583
平均単価 (円/m ³)	15,886	16,458	13,713	13,974	12,453	13,513	12,680	10,422	12,403	12,441

(注) 各数値は速報値であるため、確定値の発表により変更する場合がある。

資料：豊田森林組合

〈スギ・ヒノキの取扱量と平均単価〉

項目/年度		H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26
スギ	木材取扱量 (m ³)	3,268	4,228	6,437	5,889	6,872	7,942	8,179	6,769	5,344	5,527
	平均単価 (円/m ³)	10,030	10,300	9,192	9,193	9,171	10,420	9,856	8,290	9,492	10,060
ヒノキ	木材取扱量 (m ³)	4,254	6,588	6,220	7,494	6,903	7,496	8,559	7,601	7,986	6,796
	平均単価 (円/m ³)	19,981	20,590	19,087	17,862	15,337	16,981	15,379	12,806	15,736	14,568

(注) 各数値は速報値であるため、確定値の発表により変更する場合がある。

資料：豊田森林組合

㊦ 西垣林業株式会社

■ 会社概要 ■

創業：明治 45 年 4 月 10 日

設立：昭和 21 年 7 月 18 日

資本金：7,500 万円

代表者：取締役社長 西垣泰幸

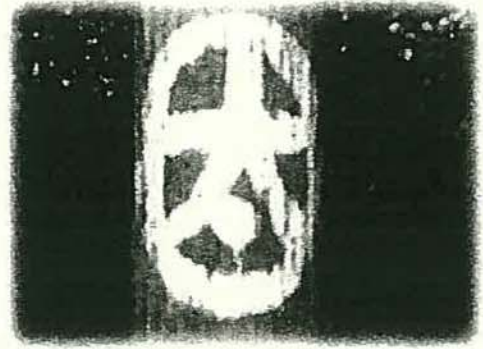
従業員数：127 名（平成 27 年 10 月現在）

売上高：93.8 億円（平成 26 年 12 月期）

所在地：桜井本社 奈良県桜井市大字戒重 137 番地

名古屋本社 愛知県名古屋市瑞穂区桃園町 3-23

事業内容：山林経営、立木の仕入販売、素材生産、木材の市売、製材及び木材加工
木材の仕入販売、建築工事請負、不動産賃貸



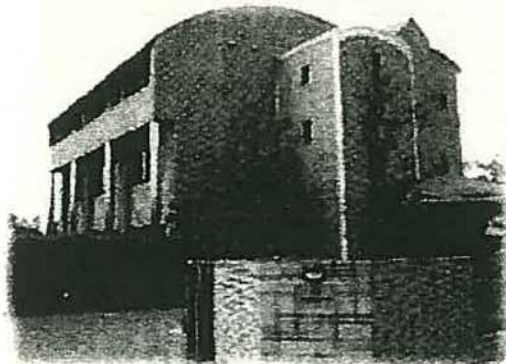
社有林のロゴマーク

■ 会社紹介 ■

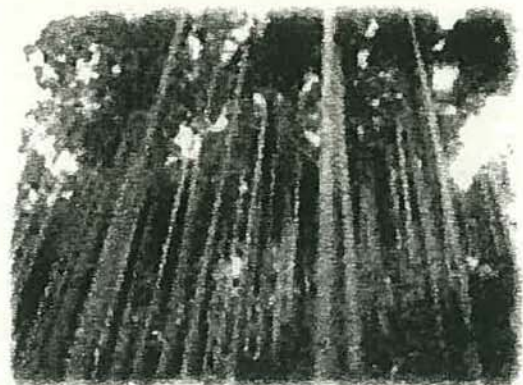
西垣林業は、明治 45 年創業以来の精神である「信義と誠実」を企業理念とし、昭和 61 年より「木と人と、未来のために」をスローガンに掲げ、自然素材である「木材」の育成、生産、流通に関わる事業活動を推進しています。

この企業理念を踏まえながら、日々の事業活動において「公正・信用の重視」「共に生きる」という考え方を行動指針とし、「広く社会に貢献する企業」を目指しています。

木材事業の川上から川下まで幅広い事業をカバーし、桜井/名古屋の本社をはじめ全国各地に拠点を持ち、広いエリアで地域に密着した事業を展開しています。この事業基盤を下に、長年積み重ねて参りました木材事業のノウハウを活かし、木材総合事業会社として総合力を発揮しながら取引先の皆様のお役に立てるよう、役職員一同取り組んで参ります。



桜井本社ビル



社有林

■事業拠点■



事業所名	所在地	事業内容
桜井本社	奈良県桜井市	山林経営、素材生産、原木市場、国産材製材等
名古屋本社	愛知県名古屋市瑞穂区	製品市場、木材建材の小売、建築工事請負等
浜松工場	静岡県浜松市	外国産材製材等
舞鶴事業所／舞鶴工場	京都府舞鶴市	外国産材原木 及び 木材製品の仕入販売等
酒田事業所／酒田工場	山形県酒田市	国産材原木 及び 木材製品の仕入販売等
浜松事業所	静岡県磐田市	木材製品の仕入販売等
茨城事業所	茨城県小美玉市	国産材原木 及び 木材製品の仕入販売等
犬山事業所	愛知県犬山市	国産材原木の仕入販売等
四国出張所	高知県香美市	国産材原木の仕入販売等
栃木出張所	栃木県那須郡那珂川町	素材生産等
高山出張所	岐阜県高山市	国産材原木の仕入販売等



名古屋本社ビル



舞鶴事業所事務所



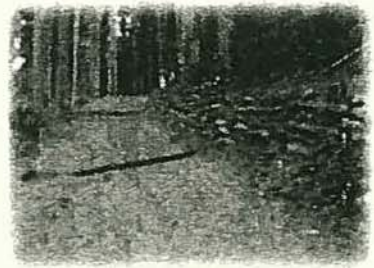
酒田事業所事務所

西垣林業株式会社

■ 事業内容 ■

一 山林経営

長期に亘る山林経営を通じて、持続可能な木材資源の有効活用
主要作業：植林、撫育、間伐、作業道作り



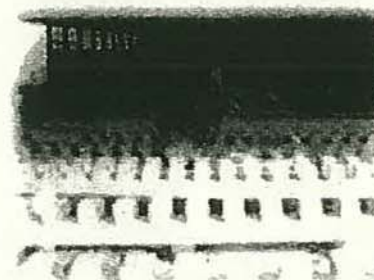
一 立木の仕入販売 及び 素材生産

国産原木の総合卸売事業として、立木/原木の仕入販売から
素材生産請負まで、山林のトータルコーディネーター
主要取扱商品：国産原木全般（国有林、民有林）



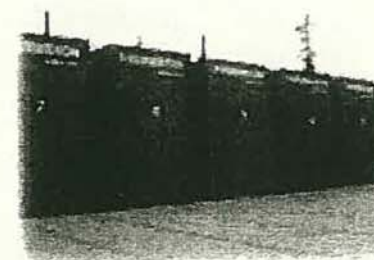
一 木材の市売

木材市場の市売機能を通じ、適切な木材流通に貢献
主要取扱商品：国産原木 及び 国内外産木材製品



一 製材及び木材加工

建築住宅部材としての木材製品の製造販売を行う
量産工場と注文挽工場を併設、大量生産から伝統製材まで
主要取扱商品：一般住宅向け製品 及び 社寺仏閣向け製品



一 木材の仕入販売

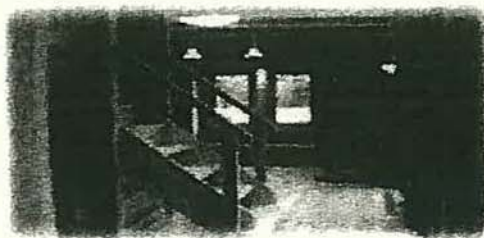
商売を通じた情報収集とネットワークを活かし
外材製品を中心に木材全般の仕入販売を行う商社部門
主要取扱商品：北米産原木、ロシア産製品、国内外産製品全般

一 木材建材の小売販売

木材市場のプロショップ、小売専門店「木の国屋」を運営

一 建築工事請負

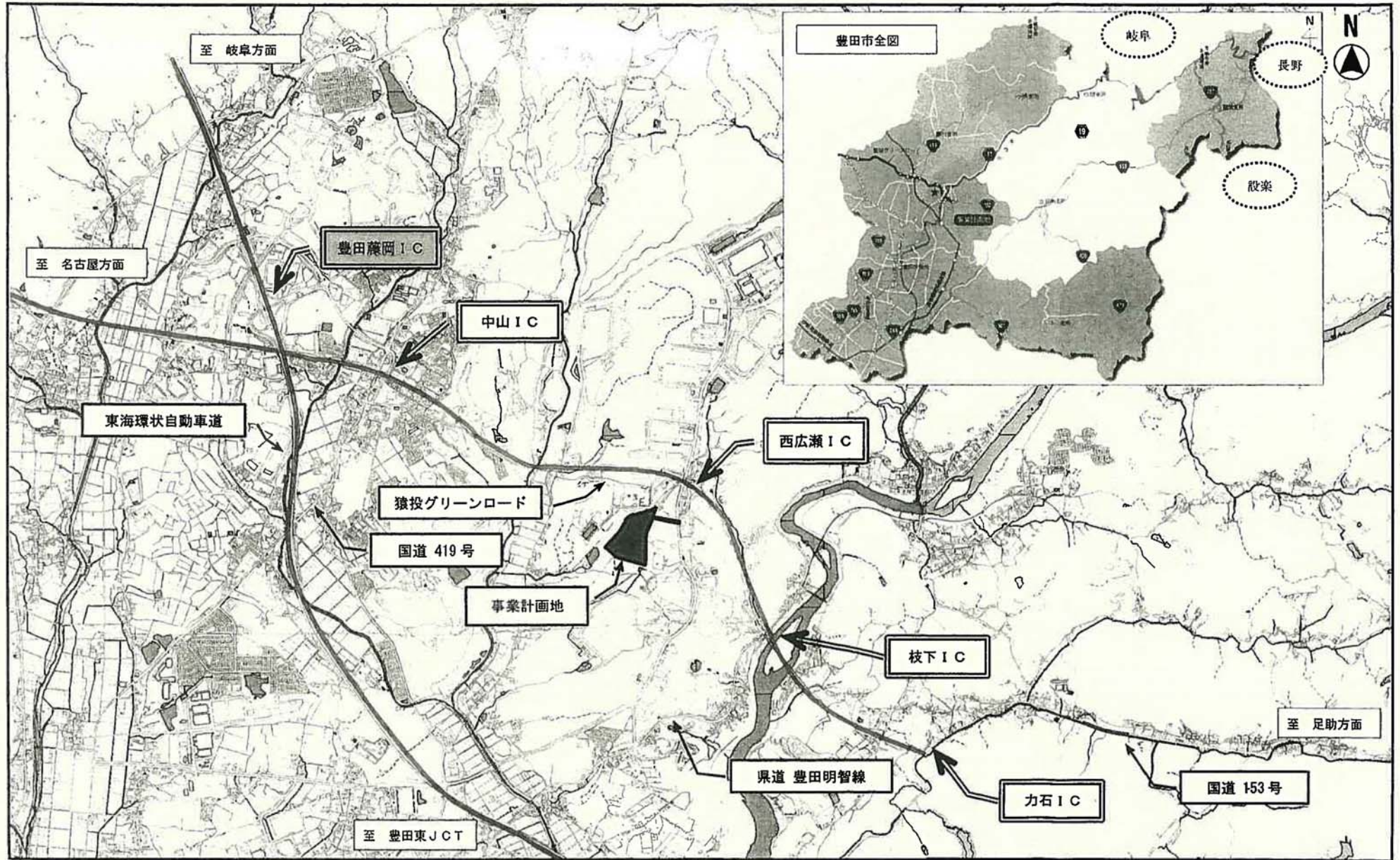
木材総合事業会社としての経験やノウハウを基盤にした、
木造建築工事 及び 部材販売



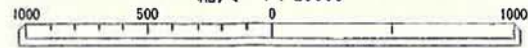
■沿革■

- 明治 45 年 初代社長 西垣愛太郎が奈良県吉野郡東吉野村にて素材業を創業
- 大正 14 年 奈良県桜井市に進出
- 昭和 10 年 現桜井本社所在地に移転、製材工場を新設
- 昭和 21 年 西垣林業株式会社を設立
- 昭和 23 年 名古屋市瑞穂区に名古屋出張所（現名古屋本社）を開設
- 昭和 31 年 名古屋本社にて市売を開始
- 昭和 32 年 桜井本社にて市売を開始
- 昭和 33 年 外材部門を設置し、京都府舞鶴市に舞鶴支店（現舞鶴事業所）を開設
- 昭和 34 年 名古屋本社にて製品（複式）市売を開始
- 昭和 43 年 愛知県小牧市に株式会社西垣林業（現犬山事業所）を設立し、市売を開始
- 昭和 51 年 外材部門の新拠点として、山形県酒田市にて西垣林業北日本株式会社を設立
- 平成 15 年 西垣林業北日本株式会社の営業部門を譲り受け、酒田事業所を開設
- 平成 16 年 名古屋本社にて小売専門店「木の国屋」を開設
- 平成 17 年 「一般建設業許可」を取得。（建築工事業・大工工事業・内装仕上工事業）
舞鶴、酒田の両拠点にてロシア産赤松製品の仕訳工場開設
- 平成 18 年 桜井本社に国産材推進事業部を新設。杉 FJ 間柱を製造開始
- 平成 19 年 茨城県小美玉市に茨城事業所を開設
静岡県浜松市に浜松工場を開設。ロシア産赤松原板の人工乾燥&再割製材開始
静岡県磐田市に浜松デリバリーセンター（現浜松事業所）を開設
- 平成 20 年 酒田事業所を茨城事業所に統合
- 平成 23 年 高知県香美市に四国出張所を開設
- 平成 25 年 株式会社西垣林業を吸収合併し、小牧事業所・（現犬山事業所）を開設
- 平成 26 年 栃木県那須郡に栃木出張所を開設し、素材生産班を設置
- 平成 27 年 桜井本社に素材生産班を設置
小牧事業所を愛知県犬山市（現犬山事業所）に移転
岐阜県高山市に高山出張所を開設
山形県酒田市に酒田事業所を開設し資源活用部を設置

中核製材工場位置図



縮尺 1:20000



・この地図は参考図であり、内容を証明するものではありません。
 図形情報の時点、精度についてご確認の上ご利用ください。
 ・「Copyright (C) ZENRIN co. LTD.」

第4章 取り組むべき課題とその取組方法

本章では、えなの森林づくり基本計画において、今後恵那市の森林の適正な管理と活用を図る上で必要とした取り組むべき課題について、具体的な事業内容及び目標を掲げます。

4.1 土地境界の明確化

- 具体的な取組み① 森林づくり会議（協議会）の設立
- 具体的な取組み② 市有林の現況調査

4.2 災害に強い森林づくり

- 具体的な取組み① 間伐モデル林の整備
- 具体的な取組み② 過密人工林の解消

4.3 地域材利用の拡大

- 具体的な取組み① 地域材利用推進のための協議会等の設立
- 具体的な取組み② 公共事業における地域産材の利用
- 具体的な取組み③ 地域材を活用した木造住宅建設の支援
- 具体的な取組み④ 林地残材の活用

4.4 森林・木材教育の推進

- 具体的な取組み① 森林関係講座の開催
- 具体的な取組み② 学校林の設置
- 具体的な取組み③ えなの森林づくり実施計画の周知
- 具体的な取組み④ 森林資源利用の啓発

4.5 森林づくり活動に対する協力体制

- 具体的な取組み① 各種団体及び個人が行う活動等紹介
- 具体的な取組み② 各種団体及び個人が行う活動等への支援
- 具体的な取組み③ 他市町村との交流支援

4.6 効率的な森林施業

- 具体的な取組み① 集約化施業の推進
- 具体的な取組み② 作業路網整備の推進
- 具体的な取組み③ 担い手の育成

4.7 森林の適切な保全

- 具体的な取組み① 森林区分に沿った森林管理

4.8 森林空間利用の促進

- 具体的な取組み① 既存施設の管理及び整備
- 具体的な取組み② 新規の森林空間整備



委員任命と推進員会説明会



えなの森林づくりについて
ワークショップによる意見交換会

「平成 27 年度 人口減少時代における新たな国土利用管理（国土と自然環境） に関する調査」における有識者検討会について

1. 経緯及び趣旨

国土管理・国土利用を巡っては、新たな国土形成計画（全国計画）・国土利用計画（国計画）（平成 27 年 8 月閣議決定）にも掲げられた通り、

- 本格的な人口減少社会を迎えた今、国土を適切に管理し荒廃を防ぐこと
- 開発圧力が低減する機会をとらえ、自然環境の再生・活用や災害に対する安全な土地利用の推進等を図ること
- 国土の安全性を高め、持続可能で豊かな国土を形成する国土利用を目指すことが重要な課題となっている。

この推進に向けた検討の一環として、本調査業務では、人口減少時代における新しい国土利用管理のあり方について検討するため関連する国内外の情報について収集・整理を行っている。（全国の市町村担当者（林地・農地）対象の Web アンケート調査、事例地域における関係者ヒアリング、大学等の有識者ヒアリング調査等を実施中）。

2. 有識者検討会

主に自然的土地利用の技術的な観点から、本調査業務において有識者の方々のご意見を伺う検討会を設ける。国土の選択的な利用、複合的な施策をどのように進めていくべきかについて、自然環境分野を中心に好事例の収集や進めていくべき取組に関し、自由に幅広くご意見をいただく場としたい。

【検討にあたり、重要な観点】

- 自然と調和した防災・減災の促進など、複合的な効果をもたらす施策を積極的に進め、国土に多面的な機能を発揮させることで、土地の利用価値を高め、人口減少下においても、国土の適切な管理を行っていくことが必要。
- 人口減少等にもなう開発圧力の低下の機会をとらえ、管理コストを低減させる工夫とともに、森林など新たな生産の場としての活用や、過去に損なわれた湿地などの自然環境の再生などの選択肢を示し、地域の状況に応じた新たな用途を見いだすことで国土を荒廃させず、むしろ国民にとってプラスに働くような最適な国土利用を選択し、必要な取組を進めていく必要。
- 土地利用転換を伴うこれらの取組は長期的な見通しの上に地域の合意形成を進めるなど長期の視点から取り組むことが重要
- 国土管理については、地域による取組を基本としつつ、良好な国土の恵みを享受する都市住民や民間企業等の多様な主体の参画を進めることが必要。急激な人口減少下においては、国民の参加による国土管理(国土の国民的経営)を進めていくことが一層重要。

3. スケジュール

今年度中に 2 回の開催を予定。

第 1 回：2 / 10（水）13：00～15：30 頃

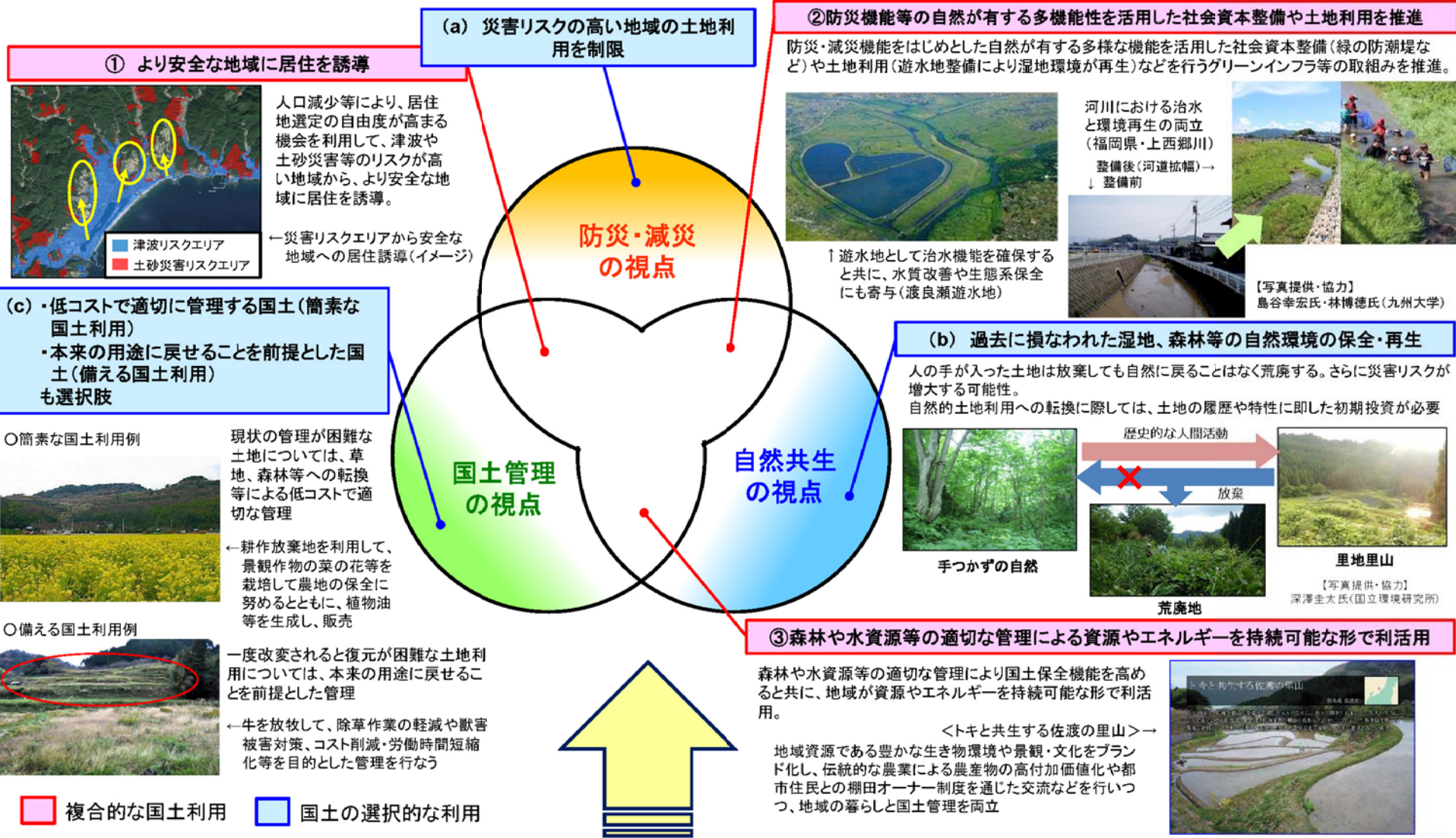
第 2 回：3 / 14（月）13：00～18：00 頃 ※検討会+シンポジウム的なもの

グリーンインフラ等の活用による新たな選択的・複合的土地利用の推進

～ 人口減少下における安全・安心で持続可能な国土の形成に向けて～

人口減少、高齢化、財政制約等の下で良好な国土を維持していくため、

- ① 防災・減災、自然共生、国土管理など複合的な機能を有する『国土の複合的な利用』を推進
- ② 自然的土地利用への転換や、より簡素な国土管理を含む『国土の選択的な利用』を推進



地域自らが土地利用を選択することによるきめ細やかな土地利用。地域住民に加え、都市住民、企業、NPOなど多様な主体で管理。

木の健康診断の10年

楽しくて
ためになる
流域の木の
キツキと
マナビ

矢作川森の健康診断実行委員会

森の健康診断の10年 楽しくてためになる流域の木のキツキとマナビ

矢作川森の健康診断実行委員会

ISBN 978-4-903321-22-6

C0061 ¥1500E

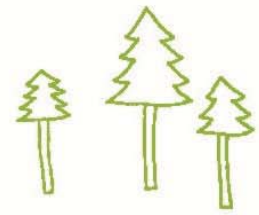
定価(本体1500円+税)



9 784903 321226



1 920061 015005



森林ボランティア・研究者・市民の協働

3. 木づかいガイドラインについて

平成 28 年 1 月 15 日

木づかいガイドライン作成関連資料

1 平成 27 年度 木づかいガイドラインの活動総括について

- ① 平成 26 年度の総括は「木づかいライブ・スギダラキャラバン」を行うことにより、広く市民に対して矢作川流域材の活用による「木づかい」推進を図ると共に、流域の方々が連携して地域の生活空間を自らのアイデアと行動でスギダラケにしていこう、というものであった。
- ② 平成 27 年度はこの総括に基づき、「木づかい」推進のリーダー役を務める根羽村森林組合が中心となって「木づかいライブ・スギダラキャラバン」を実施し、里山市民グループ・地域の団体等と連携しながら、流域内の様々なイベントとジョイントを図り、地域に活力を生み出す元気な人の輪を育成するよう努めた。その実施内容は別紙のとおり
- ③ 特に本年度は、木づかい推進活動を通して、豊田市、安城市、岡崎市、恵那市の各行政機関と連携の輪が強化されると共に、豊田市フリーペーパー誌との協働企画による木づかい推進活動を行い、今後の新たな展開力を得られたものが多かった。
- ④ 中でも、安城市デンパーク、豊田市駅前での「あそべるとよたプロジェクト」における木のアイテム展示・木工作体験等による木の魅力や楽しさの発信は、改めて「木」は多くの方々を魅了するものであること、集客効果をもたらす「プレイスメイキング＝場所の力づくり」にも大きく貢献するものであることが認識できた。
- ⑤ 同時に、スギダラ天竜支部とのコラボである「矢作川流域ものさし」やスギダラ商品の一環として「動く木のおもちゃ」、「貸切風呂 根羽の湯」、「根羽物置」等、木のアイテムの開発を図りながら、矢作川の流域材を活用した楽しい「木のある暮らし」を広く市民に提案した。
- ⑥ 部会では別紙「山部会 木づかいガイドライン作成の取組整理表」を作成して活動内容を整理した。その内容は次のとおり。今後、ガイドラインの作成を中心として、最終目標である矢作川流域内の木を活用した木づかいの定着に向けた様々な活動を展開し、これらの活動と併せて適切な森林整備、水資源の安定供給、林産業の振興、地域の活性化等に結びつけたい。
 - ① 木づかいの楽しみや取り組みを紹介するガイドラインの作成
 - ② 木の魅力と楽しさを地道に市民に伝える「木づかいライブ スギダラキャラバン」の継続的な取り組み
 - ③ 木のある暮らしを楽しむための様々な木のアイテム提案・開発
 - ④ 矢作川流域内の木を活用した木づかいの定着「矢作川ディスプレイ」、「木づかい市民活動」、「フェアトレード」、「流域連携」への展開

2 平成 28 年度 木づかいガイドラインの活動方針について

- ① 平成 26 年度に作成した提案型「木づかいガイドライン さあ~しよう」の原案を基本に、各提案項目について提案が可能なものから順次提案者へ原稿を依頼して作成業務を行う
- ② 「木づかいガイドライン」は、こうした方法で順次提案者に作成依頼を図りながら、その内容を増やしていく
- ③ 並行して開催する「木づかいライブ・スギダラキャラバン」は、「木づかい」推進のリーダー役を務める根羽村森林組合がまとめ役となって、里山市民グループ・地元工務店・地域の団体等と連携しながら、流域内の様々なイベントとジョイントを図り、地域に活力を生み出す元気な人の輪を育成する
- ④ 「木づかいライブ・スギダラキャラバン」開催を通して、「森づくりガイドライン・木づかいガイドライン」等の森づくりと木づかい情報を発信して、矢作川流域の森林資源・木づかい推進活動を紹介しながら、森や木づかいのファンを増やしていく
- ⑤ 同時に、木育アイテムや「どこでもシリーズ」等スギダラ商品の開発を図りながら、矢作川の流域材を活用した楽しい「木のある暮らし」を広く市民に提案して、その普及と定着を図る
- ⑥ こうした楽しい「木のある暮らし」の普及を基本として、市民自らのアイデアと行動で身近なあらゆる生活空間をスギダラケにする市民活動を生み出し、「人生を楽しみ愛する家族と共に幸せに暮らす 森や木とそれを育む矢作川の流れと共に生きるライフスタイル 矢作川デイズ」を確立する
- ⑦ 具体的な活動内容は、別紙「山部会 木づかいガイドライン作成の取組整理表」に掲げた内容等とし、これらの実施内容もそれぞれの事業主体に応じて「木づかいガイドライン」の掲載していくものとする

● 「木づかいライブ・スギダラキャラバン」とは

「木づかいライブ・スギダラキャラバン」は、根羽スギなどの「木づかい」を推進していきたい根羽村森林組合が中心となって、長野県や愛知県内の里山市民グループ・地元工務店・地域の団体等と連携しながら、各地で行われる様々なイベントとジョイントして、表札づくりなどの木工作体験や、どこでも足湯などの色々な「木のある暮らしアイテム」の展示を行うイベントキャラバンです。

このことによって、根羽スギをはじめとする地域の木材を利用した「木のある暮らし」を提案して、森や木づかいのファンを増やしていくと共に、そうした方々が仲良くなることによって、地域に活力を生み出す「元気な人の輪づくり」も目指しています。

ちなみに「スギダラ」とは、スギをはじめとする人工林を利用して、あらゆる生活空間をスギダラケにしよう、という全国展開している活動のことです。根羽村森林組合は、愛知県を流れる矢作川の水源地の村として、平成 26 年 9 月に設立された「矢作川流域支部」の事務局となっています。

こうした木づかいが進むことによって森林整備が推進され、また、山村における林業振興による地域の活性化が図られます。皆様ぜひ、スギダラキャラバンに遊びにきてください。

27 「木の魅力と楽しさを伝える

木づかいライブ・スギダラキャラバンの実績及び予定」

NO	イベント名	開催日	場所	備考
1	ほんわか里山祭り	3/22	豊田市 笹戸温泉	
2	オールアイシン家族祭り	5/17	刈谷市 アイシン高丘工場	
3	ワイルドツリーコラボイベント	5/24	伊那市 旧市役所広場	
4	TASKIサミット	7/7	根羽村	
5	豊田市Tフェイスアウトドアフェスタ	7/18	豊田市 Tフェイス	
6	アイシン夏の陣	7/25	根羽村	
7	安城市デンパーク無料開放デー	7/25	安城市 デンパーク	
8	わくわくネイチャースクール	7/30.31	根羽村	
9	全国水源サミット	9/4.5.6	根羽村	
10	信州大学農学部カラマツ祭	9/18.19.20	南箕輪村	
11	足助夢里まつり	9～10月	豊田市	
12	建築総合展	10/1.2.3	名古屋市 吹上ホール	
13	あそべるとよたプロジェクト	10/19～ 11/1.2.3	豊田市 駅前広場	Tフェイス
14	エコットイベント	10/31	根羽村	
15	豊田市浄水北小木製遊具伐採調達	11/6	豊田市	
16	アイシン秋の陣	11/7	根羽村	
17	メッセナゴヤ 2015	11/4.5.6.7	名古屋市 メッセナゴヤ	
18	飯田合庁木づかい推進フェア	11/16～20	飯田市	
19	とよた森林学校 杉の魅力に迫る	2/28	根羽村	
20	ほんわか里山交流まつり	3/20	豊田市	

山部会 木づかいガイドライン作成の取組み整理表

区 分	主 体 者	内 容
木づかいガイドライン	市民 行政 業界 研究者	「さあ～しよう」提案
木づかいライブ スギダラキャラバン	根羽村森林組合	別紙 スギダラキャラバンの実施 スギダラ天童支部との連携 木の魅力と楽しさを「森の民」が伝える 木製品の受注販売 木づかい推進の取り組みに対する公的資金による支援(公園等の木づかい推進拠点)
様々な木のある暮らしのアイテム提案	根羽村森林組合	どこでもシリーズ → 水平展開から垂直展開へ 動く木のおもちゃ → 木の魅力に釘付け・木の魅力への導き 流域ものさし → 全国共通アイテム化・私の流域甲子園 根羽物置 → 手が届く価格・実用的・自由設計・自分で建てられる 安曇野市 中房温泉 貸切風呂「根羽の湯」 → 露天風呂交流・青少年の動機付
矢作川ディズ・木づかい市民活動・ フェアトレード・流域連携	あそべるとよたプロジェクト 流域フェス 豊田市 市民 東幡豆漁業組合と根羽村森林組合 安城市と根羽村森林組合 中房温泉と根羽村森林組合 信州大学等と根羽村・根羽村森林組合 豊田市製材工場と根羽村森林組合 流域内工務店と根羽村森林組合	市民提案・参加型プレイスメイキングによる流域連携の拠点創設 流域連携イベント → 市民活動に向けたキックオフ 川会議による流域連携 私の流域物語・スギダラキャラバンへの参加による木の魅力の気づき 漁礁及び憩いの浜辺プレイスメイキング(場所の力づくり) 木材利用指針・公的資金支援・カーボンオフセットを原資とした木づかい推進活動 愛知県小中学生を対象とした温泉・山岳・森林・木づかいファンづくり 流域資源活用・持続可能な流域づくりのための流域内知の集積ツアー お互いに補完しあう矢作川流域材の生産・流通 木づかい推進活動と連携した「子供の時から始める木の家づくり物語」 テーマ性・デザイン性・遊び心満載の二地域居住者向けコンパクト住宅

「動く木のおもちゃと木のある暮らしのアイテム展」



27.11.1~3 豊田市あそべるとよたプロジェクト 豊田市駅前T-フェイス広場前
「どこでもウッドデッキ」・「どこでもブランコ」・「どこでもオセロ」とガゼボの組み合わせ
による居心地の良い木の空間づくり (プレイスメイキング)







矢作川流域ものさし 試作品

